

# 川柳塔

平成十八年三月一日発行  
創刊大正十三年 通卷九四六号



No. 946

三月号

日川協加盟

## 『川柳塔』九五〇号記念誌上川柳大会のご案内

川柳塔社では『川柳塔』九五〇号を記念して誌上川柳大会を左記の要領により実施いたします。同人、誌友にかかわらず広く皆様のご応募をお待ちしております。

題・選者（各題2句）

「途中」

田中新一（一番傘）共選  
西出楓（川柳塔）共選

「カード」

平山繁夫（時の川柳）共選  
高瀬霜石（川柳塔）共選

「ひびく」

福島直球（ふあうすと）共選  
小島蘭幸（川柳塔）共選

「魚」

今川乱魚（番傘）共選  
政岡日枝子（川柳塔）共選

締め切り 四月二十五日

発表表 『川柳塔』七月号誌上。同人、誌友以外の参加者

には発表誌送付

投句料 一〇〇〇円（定額小為替）

賞 各選者秀句に呈賞

用紙 『川柳塔』三、四月号に添付。他にご希望の方は

川柳塔事務所へご請求下さい。

投句先 〒545-0005 大阪市阿倍野区三木町二一〇一六一二〇二

川柳塔社誌上大会係

電話〇六一六六二九一六九一四

信頼され、社会に役立つ製品を作る

高級封筒専門メーカー



# コーキ封筒株式会社

本社 富田林市若松町東3丁目7番8号 〒584-0023

TEL 0721-25-7210 FAX 0721-25-9484

東京営業所 東京都中央区日本橋本石町4丁目5番8号 〒103-0021  
(日本橋川村ビル4F)

TEL 03-5255-5158 FAX 03-5255-5159

<http://www.koki-envelope.com>

# 中島生々庵先生

河内 天笑

浮き草は浮き草なりに花が咲き

生々庵

生々庵先生は昭和40年7月7日路郎師逝去後、不朽洞会員有志と共にこれまでの『川柳雑誌』を遺言により廃し、『川柳塔』に改題、川柳塔社初代主幹となる。岡山県弓削町の川柳公園に右の句碑が建立されている。明治31年佐賀県牛津町生れ、昭和24年大阪府南区鰻谷に中島小児科診療院を開設、同44年大阪府内科小児科医学会会長に就任。川柳歴は昭和14年3月松坂クラブを通じ路郎門下生に。同18年に不朽洞会理事長となる。NHK川柳選者、山陽新聞、読売芸芸川柳選者等を歴任、同49年日川協創立委員、のち日川協理事長を務めた。

昭和51年3月に上梓された句集『生々楽天』の跋で「私の家庭はよい意味での夫唱婦随であり小石は私の指導者でもある」とご本人が述べている。小石夫人は明治40年東京生れ、昭和2年に結婚。川柳は昭和21年路郎夫妻に師事。日本画も夫と共に木村杏園画伯に師事、茶道は宗寿、舞踊は小川流の名取。『生々楽天』のあとがきで長男一彦氏は父の生き方について「物事を中途半端にすまそうとしないのは結構だが、世の中のことをとかく自分の物差しではかろうとする。中島先生はこわい、と言われる所以だ」。また、「会長とか主幹と言われるようになればニコニコして若いも

のに任せばよいものを一々口出し、手出しをしてしまう。とても『生々楽天』とはいかない」と述べている。昭和50年に私の二男と三男が小児喘息の診療を受けたが、子供達を想うゆえに厳しく叱られた記憶がある。

昭和57年に西尾葉先生に主幹を委譲、名誉主幹に就任、昭和61年2月に89歳で逝去された。今年で20年になる。

生々庵句抄

出来心女房に嘔んで吐き出され

見本でも見る気で三度目の見合

遺言にまで強情を書き残し

血圧があがらぬ葉猪口でのみ

いや味ではおへんといや味並べ立て

お互に気付かぬふりのすれ違い

極楽へ来てあの人が見当らず

子猫ぞろぞろみな宿命の顔かたち

どないでもお書きしまっせ領収書

まわり舞台これは見事な除夜の鐘

自選句

漫才のネタを探しに森へゆく

スランプになつたらおはぎチヨコレート

殺生は嫌いでも蚊は許さない

焼肉のけむりに咽せている桜

ムームを着て還暦の腰をふり

天笑

〃  
〃  
〃  
〃



座右の句

ふとこころにバラと銀河とエンピツと (天笑)

私の句

深海のシャトーのような青テント 飛永 ふりこ

## 川柳塔 三月号 目次

題字・中島生々庵／表紙きり絵・前田 尋「当麻」

■巻頭言 中島生々庵先生	河内 天笑	……(1)
川柳と笛生	宮口 笛生	……(2)
川柳塔(同人吟)	河内 天笑	……(4)
川柳塔の川柳讃歌 <sup>(15)</sup>	木津川 計	……(51)
自選集		……(52)
水煙抄	板尾 岳人選	……(56)
愛染帖	新家 完司選	……(79)
誹風柳多留 一篇研究		……7
檸檬抄「ソフト」	仁部 四郎・藤田 泰子共選	……(84)

## 川柳と笛生

宮口 笛生

川柳を知り作句始めたのが、昭和二十二年八月で、大変古い話になります。俳句会の帰りに大阪のデパートで、「番傘」と「柳想」という川柳誌を見つけてからのことです。一茶の俳句そっくりと思ひ、二冊共買ひ求めて帰ったのがきっかけです。当時国鉄大阪鉄道局で大鉄文芸という月間誌が発行されていて、川柳欄もあり、長宗白鬼という職員の方の担当で、たくさん職員が入会されていた。早速川柳を作句して初めて投句しました。

すると「空襲はもうない家の明るい灯」という句が入選し、それから俳句を止めて川柳一本にのめり込みました。天王寺鉄道病院内科医長だった北川春巢という先生を知り、何遍もお目にかかり色々川柳の指導を受けました。

昭和二十四年四月に城崎温泉に於て、西日本国鉄川柳大会があり、春巢先生のお供で城崎へ行きました。初めての川柳大会でした。岸本水府、麻生路郎、榎元紋太の諸先生をお迎えして、番傘、川柳雜誌社、ふあうすとの同人等、たくさんの人で大盛會に驚いたものです。麻生路郎

「芽」	飛永ふりこ選	(86)
一路集「燦々」	山岡富美子選	(86)
「駆ける」	深田俱久選	(87)
初歩教室「三」	三宅保州	(88)
秀句鑑賞「同人吟」	三島崧丘	(90)
「水煙抄」	正畑半覚	(92)
閑人閑話「言葉は生きています」	田中正坊	(93)
二月本社句会		(94)
各地柳壇(佳句地十選/宮本三喜夫)		(98)
中後清史氏を偲ぶ	牛尾緑良	(111)
柳界展望		(113)
三月各地句会案内		(114)
■編集後記(ひとこと/瀧本きよし)	楓楽・希久子	(118)

座右の句

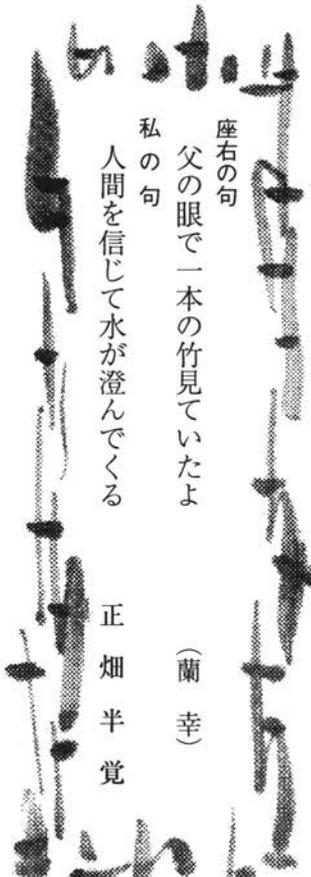
父の眼で一本の竹見ていたよ

(蘭幸)

私の句

人間を信じて水が澄んでくる

正畑半覚



選で天位に入選して、「新川柳講座」という本をいただきました。うれしかったです。二泊三日の旅でたくさんの方達が出来ました。

その前に長宗白鬼氏より、SLの機関士は汽車の笛を生むとして、笛生という雅号をいただき今に至っています。北川春巢先生の縁で、私も路郎門下に入会し、毎月の例会にも出席するようになりました。

昭和二十五年の奈良の若草山焼きに、麻生路郎先生が「おれに似よ俺に似るなと子をおもひ」の川柳を打ち揚げられ、片岡つとむ氏の挨拶で奈良の川柳会を知り、早速お会いして柳茶屋川柳会に入会させていただきました。今日まで柳派は違うが深いお付き合いをしています。

川柳塔も奈良で一旗揚げようという事になり、奈良番傘の方々にも協力をお願いして、平成十年十月十日に、川柳塔ならを発足しました。大阪の方々のほか奈良番傘のたくさんの方達にも応援いただき、毎月の例会の出席者も四十名を突破、盛会で雰囲気の良い会だと好評をいただいております。早いもので今年八年目を迎えました。この調子で続けられたら有難いことだと喜んでいきます。今後共よろしく御支援をお願いいたします。

# 川柳塔

## 河内天笑選

出雲市 園山 多賀子

さりげない言葉が風が膨らまず

甘え癖風は他人の貌をする

裸木の意地を匿う風の音

象の視野蟻の視野とが一致する

残り火でゆっくり豆を煮ています

卒寿今恥多くしてサバイバル

大洲市 中居 善信

夢を追う少女のまままで老いている

正月二日仕事始めの畑に佇つ

ジョークでしか言えぬアイラブユーなんて

子育ての失敗だらう子が独身

金のことになるかと男がみみっつい

明日のため何かを今日もしなくては

鳥取市 春木 圭一郎

シンプルに悩みの中味考える

プレッシャー楽しむようになればいい

つらいこと逃げてでも解決にはならぬ

ほめられてほめて互いにやる気出る

悪びれずやりたいことをやればいい

間違えた時は引き返す勇氣

松山市 高橋 宏臣

年頭の挨拶嘘のつき始め

旨そうに食べて見せるも芸の内

熱いうち食えと田舎のおもてなし

灯点ると高層ビルもあたたかい

太陽を逃げて男はどこへ行く

幻想の中で口笛吹いている

鳥取市 岸 本 宏 章

これが歌かと若者の曲を聞く

寒がりに飼われて犬が服を着る

糖尿と血圧箸を迷わせる

興味あるはなし正面向いて聞く

一発で効いた薬が怖くなる

いよいよになって神さま仏さま

鳥取市 岸 本 孝 子

おみくじを引いて一年動きだす  
健康を願う今年も鈴を振る

順調に老いて雑煮の数も減り

大木になる夢抱いている若さ

菜の花のおひたし体春にする

一発の夢を背負ったくじを買う

奈良市 天 正 千 梢

朝一番水神さまに礼を言い

心の叫びうすらいで行く八十路

誘い水私の脳は枯れかかり

居住まいを正しお点前待っている

エリートの子折知らないもろさかも

山茶花は女ざかりの背なを押す

橿原市 安 土 理 恵

大嫌いな貧乏ゆすりする男

横やりは入れぬそれぞれ選択肢

靴下を脱いで混浴する足湯

再会のこの哀しさは何だろう

情炎の尽きる日じつと待っている

ことさらに別れ話はせぬつもり

出雲市 岸 桂 子

その訳を言えばあなたに傷がつく

海鳴りをいっばいつめた壺を買う

少し疲れて一人で入る喫茶店

病室の友をなだめる冬の花

今頃の鬼はすこうし子に甘い

言い負けた方がぐっすり眠っている

鳥取市 近 藤 佳 子

雪の日は夢をみましよう万華鏡

雪が降る届かぬ慕情積むように

へなちよこが別れの美学親に説き

産まぬ娘で雛の可愛さには触れず

憂さをみな忘れなさいと雪つもる

まじり気のない象の目は故郷思う

雲南市 毛 利 幸

人生のシナリオ才狂い瓦解する

いらいらが相手の顔に影落す

忘年会全ての垢を吐いてみる

知りたくて心の障子開けてみる

親の恩財布を持って身に沁みる

愛想よい人は笑顔で株上げる

米子市 林 瑞 枝

雪の窓開けて山脈との対話

カラオケで声と身体のリフレッシュ

いちめん菜の花蛇も私も殻を脱ぐ

迷いもう消えた花束抱えている

ほんの少しの微笑みでいい楽天家

華やいで湖面を渡る笑い声

美祿市 安平次 弘道

投げつけた皿が痛いと言っていた  
銭のいる話はいまいでは困る  
告白するには少し覇気がない  
ここだけの話口下手には見えず  
散骨するには春の海がよい  
雲走る終着駅はまだ遠し

羽曳野市 徳山 みつこ

日に十度笑う私にも出来そう  
万歩計つけると用もなく歩く  
民主主義売りに戦車が来たもの  
引き際をまだかまだかと待つ軍靴  
怖いコワイこと並んでる週刊誌  
きょうも生きていましたありがとう夕陽

東かがわ市 池内 かおり

温かい言葉に飢えた子がキレル  
少子化が我慢の出来ぬ子を育て  
向い風父のペダルは休まない  
和解して今夜の月が美しい  
ムーミンのような老母です子供です  
やわらかい日射しの中に老母在わす

堺市 宮本 かりん

うまいお茶愚痴も一緒に溶けてゆく  
ママの愛いっぱい受けて大あくび  
飾らない言葉真実匂い出す

もめながら歩く相合い傘の中  
よじ登った坂高速で下り出す  
生かされてこの世を右往左往する

大阪市 近藤 正

どんぐり目して憲法を読み直す  
貧富の差税が広げていませんか  
駄目押しが引き裂いていた友の仲  
クシャクシャの遺言状がものを言う  
ロボットがヘルパーさんで来て欲しい  
削るだけ削ったあとに消費税

豊中市 藤井 則彦

シャガールの色にあやかるフルムーン  
叩かれてやっと思つた妥協点  
警策に乗り移ってる妻の怒気  
息子から増額されたお年玉  
自治会の脇役こなす元社長  
スピーチに一味つける流行語

弘前市 高瀬 霜石

ゴミ箱の隅にヒントが落ちていて  
父は父反面教師だとしても  
天国がだんだん近くなる肥満  
お互いに直視はしない風呂あがり  
社長以下切り刻まれる更衣室  
スランプを抜け出たらしい人の顔

熊本市 永田 俊子

貧しいが千両万両庭にある

何もないが付録の人生丸儲け

凍て滝が残り時間を止めている

まだ頑張るのですかと言う影法師

洪柿が洪を抜かれたイエスマン

熊本市 高野 宵草

理屈詰めされてどこかに残るウツ

僅かだが心豊かな社会鍋

ひと言が過ぎて仮面の美が剥げる

血統書ないから僕のポチで居る

交番に善意届けた拾い物

熊本市 岩切 康子

自分なり騙しておやつ太るはず

大雪の予報約束延ばすべし

専用を持ちたく注文する扇

珍品を戴き戸惑う料理の手

買ってお節二日までとはちと酷い

唐津市 市丸 晴翠

乳呑児は無事 列島に春陽射す

雑念を捨て福耳が舵を取る

薄味に慣れ手を取って老いの坂

エレベーター幼児の問いに皆和む

地吹雪を田の神も聴く穀倉地

唐津市 久保 正剣

根回しの役で終った課長補佐

面白くない人生だったチンドン屋

糠床の底に女の不発弾

待ち針に追いつくまでの夜なべかな

美女求む貼り紙を見て立ち止まる

唐津市 井上 勝視

怒らなきや老いの生き甲斐ない世だナ

老いてゆく見付けだんだん狭くなる

横着な猫は尻尾で返事する

右ひだり人生常に迷い道

姑を陰で褒めてる嫁の知恵

唐津市 宗 水笑

年頭の決意老いても二つ三つ

当選の側まではゆく宝くじ

神さまの思い違いもあるみくじ

自画像に菩薩の笑みを少し借る

野の花の自由うらやむ鉢の花

唐津市 山口 高明

人間の姑息を啜う大自然

剃刀の異名を持つて恐れられ

ちゃんつけて呼ばれ深間になれぬ仲

童顔の残るお医者で頼りない

生き甲斐はこれとおんなは寶石を見せ

唐津市 坂本 蜂朗

上役の激励耳を抜けていく  
故郷の風傷口を包み込む

児に還りながら白寿を目指す母

末弟が還暦児を押し上げる

商人のソフトな口をまた信じ

唐津市 樋口 輝夫

教科書にない人生のマニフェスト

参観日チャックをしたい親の口

少子化に神が出雲で会議する

マジシャンのように化粧をする女

くたびれて帰りはバスにする散歩

東かがわ市 清川 玲子

湯どうぶが胃に合う老いのクリスマス

屠蘇の盃今年もよろしめ二人膳

関所より怖い学校帰り路

ばあちゃんの消えた茶の間のきのう今日

正直が歩いてるよな父が好き

東かがわ市 川崎 ひかり

倅せが眠りを深くしてくれる

甘辛のドラマ始まる鍋の中

誰だつて迷い迷つて生きている

炊飯器カップで計る水加減

腹黒い人の笑顔は信じない

東かがわ市 成重 放任

豊作の柿にお医者が青くなる  
風花が急かせて終えた冬支度

争えぬ風格までが親に似て

月末のたびに苦勞をかけた妻

年寄せる度に頑固さ増してくる

東かがわ市 原 賢

若者に飢餓の時代は語れない

向い風来るならこいと山椒の木

ライバルを偲び飲む酒苦すぎる

三猿を守り老後は輪の中に

凜と咲く花に生命を教えられ

東かがわ市 神保 坊太郎

師の句碑の目線迎れば二子島

覚束ぬ足が途中で義理を欠く

バスが出る噂半分だけ積んで

飯の世も曲りくねつて十二月

わら塚のように師走着着膨れる

東かがわ市 伊勢 八重子

じわじわと地球に迫る温暖化

人は皆温もり探すたずね人

春座敷障子にうつる花あかり

ランドセル小躍りしてる雪の朝

不眠症話相手は窓の月

松山市 宮尾 みのり

穏やかな暮らしに優るものはない  
笑い声隣家いい事あるらしい  
読経の僧今日は迷いの中らしい  
成長するとベットで収まらぬ  
計画的にすればサラ金など要らぬ

松山市 古手川 光

淋しさと疲れを置いて孫は去に  
安心して寝れぬホテルもマンションも  
悪知恵がチェックの甘い隙を突く  
アメリカ牛自己責任で食べましょう  
これまでよりこれからをどう生きるかだ

西予市 黒田 茂代

今朝も無事目が覚めましたありがと  
何も無理していないのに肩が凝る  
腹立てず一日過ごせたら拍手  
今にして思う平屋でよかったな  
冬の陽のさらばさらばと海の果て

高知市 北川 竹萌

つい忘れものさがすこと多くなる  
曾孫から来た年賀状ついほろり  
さがしもの出てきた小学優等賞  
ありがたい不幸思わず来た道よ  
九十路をかるく楽しく夕あかね

高知市 小川 てるみ

冬籠りさせてはくれぬ五七五  
アップテンポの曲で頭を刺激する  
どの色も染まらぬ自負の杉木立  
義務感が少し崩れた民主主義  
本心を知っているから笑つとく

高知県 赤川 菊野

二〇〇六年抱負新たに初詣で  
箸一膳おちよこ一つの屠蘇の膳  
出来すぎた嫁でストレスたまる姑  
修羅堪えてやがて花咲く母子草  
肩書きはないが父さん日本一

高知県 小澤 幸泉

玉ねぎを泣きなきむいている平和  
労りと無言の中に復帰劇  
身体ポロポロ内なる思い燃え上がる  
熟年の詩書きつづる冬の部屋  
もう一度やり直しても今がよい

砂川市 大橋 政良

この椅子でやがて私の喪があける  
タクシーの拾ったずぶ濡れの女  
この橋で鳴り出す僕のオルゴール  
折れた虹僕の願いを吊っておく  
無意識に切り取り線を踏んでいる

弘前市 高橋 岳水

挽回が出来ぬ月日とオゾン層  
眼鏡拭きながら本音を推しはかる  
生きてゆく気力漲る朝の市

試着室しばし女は蝶になる  
如意棒が鈍る男の折り返し

弘前市 須郷 井蛙

ダイケアーみんなとお遊戯して帰り

胎児からもうサツカーして動き

国保にはすまぬ大病してしまひ

凍結路疲れ三倍すり減らし

護衛艦付けて小学送迎し

弘前市 福士 慕情

カラスだつて生きねばならぬゴミ漁り

僕を無視カラス飛ばずに眺ねている

口太の烏凶器に見えてくる

電線へ止まる鳥の序列かな

ふる里はビルの谷間というカラス

弘前市 相馬 銀波

世界地図見ると原油は遠い国

豪雪が二年続きに泣く財布

雪深く雪に土日が消えて行き

気の迷いまだまだ道を蛇行する

言うことも言えて頼りは妻ひとり

弘前市 今 愁女

温暖化またもや雪に閉ざされる  
大男命綱つけ雪おろす  
招いても春は遠いと諦める

底辺に生きてじっくり世を眺め  
盆梅が数えるほどの蓄つけ

弘前市 岡本 花匠

成り行きに任せておれぬ雪の嵩

剪定を急かせ清しいひのえいぬ

地震保険掛けて安堵の利益組む

むかしばなし母居て弾む笑福門

白いみちたどれば悪が邪魔をする

弘前市 櫻庭 順風

新宿の二番ホームで会う奇遇

ほろ酔いの疑問呼名で安堵する

平常の帰宅時間に会うなんて

一生に一度の奇遇胸に抱き

ハイスピードのリフトに揺れる津軽風

平川市 小寺 花峯

お互いに欠点があり酒うまい

冬薔薇が咲いたら猫が媚びて来る

肩書が剥がれて丸い腰となる

へそくりは皺を伸ばしてにんまりと

華やかな過去は酒から甦る

十和田市 阿部 進

晴れた日も雨の日も浮かぶあの笑顔

表札にまだ母さんが生きている

本当の年は仲々伝わらぬ

輝いて夢ガムシヤラに追いかける

古里の川鮭帰りが活気づく

黒石市 相馬 一花

挑発的ポーズに釣れてくるマクロ

理屈にはからきし弱い正義漢

叩いても撫でてでも化けて出る女

凡人をカリスマにする化粧法

女房に勝ちを譲っている平和

さいたま市 八田 敏

温暖化この豪雪は何の罰

ケータイにかかるは妻と娘と孫と

咲き揃う寒菊冬を忘れさせ

新春の目標作りもう忘れ

椎間板ヘルニア頭痛手の痺れ

さいたま市 星 野 育 子

自分へのご褒美好きなお母さん

便利さに慣れて昭和を懐かしむ

大寒波真っ赤なコート着て挑む

学校より真面目に大人のドリル

子はまだか産めば次はと言う他人

日高市 根岸 方子

今年こそ友になりたい電子辞書

梅の香に心奪われ時忘れ

温暖化季節を急かす花暦

久方にもずのはやにえほけの枝

故郷の名が消えあけましておめでとう

佐倉市 岡 井 やすお

三月は別れの月や泣き笑い

悪がきが仰げば尊し歌ってる

隣国と勝った負けたはスポーツで

スポーツじゃ中高生も国際化

まだ迷う何為すべきや九十四

東京都 清原 悦子

水滴のひとつひとつにある命

何よりも自然に勝るものはない

二十四時誰にも与えられている

のびのびと書いてあなたの潔さ

アルバムを見て出かけてるクラス会

東京都 岸 野 あやめ

神様とした約束は破れない

雪雪雪ただに綺麗なだけでない

サンプルがよく出来すぎで罪やなあ

パソコンで覗く他人の私生活

母さんは苦勞人だと娘婿

東京都 小川 賀世子

無病息災心底願う初詣で

初詣で子もながながと願ひあり

おせち食べまたまた食べて寝正月

歌麿の世界女形に脈みやくと

リハビリの友に祈りに似たエール

八王子市 播本 充子

隣人愛ナースコールを押ししている

同じ歳命令形が気に入らず

会員を増やす笑顔を絶やさない

親友もたと病気を持つている

安いから買ってどっさり捨てている

横浜市 菊地 政勝

一病を味方に今日もウォーキング

越えられぬハードル神は与えない

年越して妻に抜かれていた酒量

お互いに主張し合った無駄遣い

少子化へ耳傾けぬ共稼ぎ

横浜市 小野 句多留

負け組の舌なめずりが見る株価

民営化裏目になった利益率

紅白に除夜の鐘まで酔いつぶれ

里帰りその後の事で果てぬ夜

幅広く責任転化する手抜き

静岡県 蘭田 獭 杏

来客も去って孫との鶴を折る

山と里一繋がり年明け枯れてなお執念の如夢絡む

沖遠く白々明ける二〇〇六

岸壁に猛る丈余の冬の海

富山市 島 ひかる

除雪車の音が気になる朝の雪

障子戸の隙間に覗く空模様

ほんわかと指摘をくれる温かさ

脇役も主役も同じ風の中

六星占術信じ当った宝くじ

可児市 板山 まみ子

雨音に少し安堵の喉の風邪

パソコンに遊んでもらう時もあり

ねむい目に雲が邪魔する初日の出

平穏な暮らし彩るスケジュール

突然に友の訃報の年はじめ

愛知県 早川 盛夫

暁へ犬の鎖を解き放つ

よく降ったもんだと雪へ頬被り

四五日は水さえあれば生きられる

泣きながら笑いながらの夫婦坂

内緒で食べたニンニクがよく臭う

京都市 高島啓子

頭ひとつの差のままで咲いている  
バッグにはいつも入れているお数珠  
奥の手を使う相手は決めてある  
吊り皮に長い短いある電車  
誤解したままで根雪になってゆく

京都市 都倉求芽

頓挫する嘘が少うし足りなくて  
妬心などお好み焼にまぜて食べ  
月は多情満ち欠け幾度くり返す  
思いやりひとりで納得して帰る  
自分から先に笑うてな可笑し

亀岡市 井上森生

逆襲の妻にはゆつくりと笑うこと  
年金で遊んで食べるその加減  
これからは生きるじゃなくて生かされる  
海外の旅のハッピー ニューイヤ―(香港 2句)  
驚いた三ヶ国語の孫といふ

長岡京市 山田葉子

煙たいのにずっとコンピを組んでいる  
断われない顔が頼みにやってくる  
プービーを走る男の離れ技  
クイズ解け孫の仲間にしてもらう  
あとひとつパズルのかけら見当らず

八幡市 結城君子

息子の言葉叱られながら有難し  
おお影よ転ぶな先はまだ遠い  
記憶いいばあさん時に嫌われる  
けつたいなニュース許りで早寝する  
老婆ほほ染めてぶつちやけ話する

大津市 中 宗明

指定席キャンセル待ちの巨神戦  
寒風に公園ベンチ閑古鳥  
いらいらとベンチ温め出番待つ  
煮え切らぬ彼女の態度うんざりと  
効能をくどく聞かされうんざりだ

大阪市 川原章久

寝てる間が楽しい楽しい夢芝居  
玉三郎どうにもならぬのど仏  
水仙が首だけ出して雪積る  
紅椿昔噺の中の彩  
七草粥さらいなものが一つある

大阪市 前 たもつ

初夢で恩師にやる気叱られる  
正月に去年の恩を簡条書き  
十年日記やつと自信の折り返し  
寒風へ汗たっぷりと一万歩  
腹八分早寝早起医者不知

大阪市 川端 一步

順風満帆運動靴に履きかえる

冬眠の春闘芽吹く嬉しさよ

ああ日本声をかけると子は逃げる

山の風でできることなら袋詰め

学校の側を通れば春の歌

大阪市 古今堂 蕉子

御辞退の香典で友徳ぶ酒

水ぬるむ今年の春は皆が待つ

愛の結晶生む苦しきも分かちたい

しがらみが一人こたつで座つてる

洋服を着せられ犬の悲しい目

大阪市 岩崎 公誠

てのひらの約束ひとつ黙秘権

笑うことふやして頭楽にする

手料理という手に乗って騙される

日本人仕事仕事と駆けまわり

豪雪は軒を越えたと里メール

大阪市 奥村 五月

国のため頑張りますと子沢山

賽銭を増やし今年にかけて見る

定年後昼も聞いている妻の愚痴

駅弁と酒を連れての独り旅

あげ底のオッパイ外し露天風呂

大阪市 岡本 久峰

若き日の書生羽織をなつかしむ

瘦せ蛙あつけらかんと生きている

星条旗はびこり日本どこへ行く

沖繩に一揆の姿垣間見る

政治家の無策マンション揺れている

大阪市 榎本 舞夢

風船やカブト折つてた頃たのし

炉開きに茶室の空気凜として

初詣で犬の土鈴を買いに行く

ブレゼント開く楽しみメツチャ好き

しがらみを上手に泳ぐ処世術

大阪市 津守 柳伸

雑煮餅形崩れて喜ばれ

初旅は雪雪雪へまっしぐら

氷雪のカマクラ出入り禁止札

そば打ちも余興信州宴会場

サクラ咲くやつと陽の目の羨糸

大阪市 津守 なぎさ

初旅は一軒宿の横谷峽

雪の中木地師の技に息を飲む

どか雪の孤立を思いただ祈る

妻籠宿外人さんも仲間入り

面倒見よくて他人にうとまれる

大阪市 松尾柳右子

言い過ぎて知らん振りする得な人

シルバーと見せぬダンスのうまい方

目的はおみくじ娘等の初詣で

福袋ホントに福もあるらしい

上品な言葉遣いにかしこまり

大阪市 井丸昌紀

聞きたくもない話だけよく聞こえ

イライラに空気感染したみたい

まつすくな道が続いて身構える

鍋奉行おだてて全部作らせる

お開きの後に本番控えてる

大阪市 大川桃花

バランスはともかく味のある笑顔

煮え切らぬわたしに吠える影法師

手振りまで同じ二度目の話聞く

今朝も顔洗っています生きてます

例えばと身の上話他人めく

大阪市 中村叡子

天麩羅もせぬに汚れる換気扇

病人も遠慮勝ちなり年の暮れ

三が日精根尽きて寝正月

今年こそ良い年になる子も増える

お煮染の少しも減らず勿体ない

大阪市 安達はじめ

先頭のリード信じる渡り鳥

三度目のデートは鍋で打ちとけた

居酒屋の総理に景気聞いてみる

ほろ酔いに無口の貝が泥を吐く

床柱家伝の色に磨きあげ

大阪市 神夏磯典子

新年の顔三回洗うて座す

Uターン若さへ還る船に乗る

群れの中原色を着て目立たせる

裏の裏知らずに今日の肉を買う

一テンポ置かねば答出て来ない

大阪市 津村志華子

泣きごとと言うまい月に笑われる

子や孫の帰った後の大あくび

葉ばしが知ってる母の目分量

時どきは自分自身が空になる

たんぽぽもすみれも咲くよ母の墓

大阪市 小糸昭子

宇宙から見れば地球は青い粒

悠々と我が街を行く隠居猫

夢で会う会いたい亡母はまだそうそう

嚴重な宝石店が狙われる

平凡に暮した一日がありがたい

大阪市 小泉 ひさ乃

泣いたぶん笑い幸せ取り戻す  
良い思い積んで豊かになる余生  
失敗もそれを肥やしにまた燃える  
孫からの年玉大切にしまう  
夢を砕かれて行き場の無い怒り

大阪市 中村 れんげ

例えばの話すぐのるあわて者  
大安か籤を売る店人並ぶ  
あの謎は箆筒に入れてしまつとこ  
山寺の熱爛身にしむ二人旅  
神仏の化身に頼り人は生く

大阪市 渡部 さと美

とんでゆく暦を追いかける元気  
驚きはブラゴミこんなにもたまり  
長命なお方みなさんよい笑顔  
春の月みれば長生きできそうな  
冴え冴えと牛も酔わせる笙の笛

大阪市 小谷 集一

平等に福を下さい戎っさん  
ハーモニカ昔の音のままで鳴る  
労りへ叛骨心が湧いて来る  
見たこともない優しさに身構える  
若き日は酒代老いては薬代

大阪市 町田 達子

寒いほど値打があると戎さん  
三が日逃げ足何と早いこと  
炬燵の守やめて近くの戎さん  
これからの事は気にせずケセラセラ  
歳だなど寒さに後込みしています

大阪市 清水 絹子

初雪や浪速の空に清め塩  
布を裁つ頼まれものに四苦八苦  
買物袋両手も足りぬ年の暮れ  
しがらみの旧家に嫁はさからえぬ  
一旦座れば夢中にさせる毛糸針

大阪市 熊代 菜月

のほほんと友の好意に気がつかず  
また一年風呂呂めし寝るで暮れてゆく  
寒月や背中丸めてすれ違い  
人生の日溜りさがす喜寿の坂  
猫でさえ甘える相手知っている

大阪市 星野 きらり

冬將軍はやお出ましへ面食らう  
迎春は先ず大切な墓まいり  
石けりの土の匂いの路いずこ  
日日好日今日はどの色似合うかな  
けじめなどつけなくていいケセラセラ

大阪市 伊藤博仁

祝い鯛跳ねて二十に男孫  
じいさんの二十は軍が予約済  
クシヤミ出るすぐ飛んでくるかぜ葉  
五万円犬のお節に二の句出す  
あの家の田舎育ちか吊し柿

大阪市 榎本日の出

長生きをしよう延命処置は駄目  
穏やかな顔になつて泣いた後  
神様もよそ見している事故現場  
鼻歌が出たよ体調よしとする  
国のツケ民のサイフを狙つてる

池田市 栗田久子

やさしさに心とろりと雛の顔  
落胆がおさまる頃に慰める  
高望みやめて目線を下げてみる  
バーゲンの日のプライドは見当たらず  
草もえて季節を送る忘れ霜

和泉市 西岡洛醉

一つだけ趣味を求めて元気です  
不整脈年の所為だと捨てられず  
赤いバラ亡母へ贈った事がない  
達者なる足に余生を載せ歩く  
一日の速さに温い日が流れ

和泉市 中川楓

どれも皆夢を秘めてる冬木の芽  
子に貰う齡となつたお年玉  
元日もいつもと同じ菓飲む  
呼ばれてる娘の家遠く冬籠り  
降り積もる雪音もなく容赦なく

和泉市 横山捷也

産声がメールで着いて日本晴れ  
気にかかる捨てた故郷の空模様  
明日のこと明日考えよう仕舞い風呂  
オデン煮て古い話にはずむ母  
遣伝子は組みかえられぬ孫七人

泉佐野市 山本蛙城

のどかさを歌会始めからもらう  
賽銭は投げずにそつと入れる主義  
赤んぼの大きな足に託す夢  
残り火をそろりと煽る春の風  
お助けのこころで緋寒桜咲き

茨木市 藤井正雄

寝たきりへ手を添えてやる旬の味  
叩くだけ叩き半端も値切つてる  
傷つけぬ言葉を選っている別れ  
今覚めた夢語りつつ祖父が起き  
バス旅行飲む男にも回る鮎

大阪狭山市 矢野 梓

初便り同窓会の誘いあり

いい笑顔必ず福がやつて来る  
大根のはじけるような白まぶし  
大根の乱切り愚痴も鍋に入れ  
古稀過ぎて一つ一つが重くなり

交野市 田岡 九好

子ら無残国の滅びる音を聞く  
下校バト迎陵頰伽の声曇る  
悪相が揃う国交委員会

大とんどわが八万の罪を焼く  
世の乱れ元はわたしの不心得

交野市 森本 弘風

来年へ秋を惜しんで散る枯葉  
日陰には師走の雪が残る道  
ごまめ煎る匂いが急かす大晦日  
トンド焼き正月気分焼き尽くす  
柔らかい冬の木漏れ日受け散歩

交野市 山川 日出子

戌年もクラス会待つ年賀状  
あちこちと福を求めて初詣で

老犬が今年もささ青い鳥  
新年は鸚鵡のような御挨拶  
竹の桶滝の水のむ山の寺

河内長野市 山岡 富美子

目指すものありジャンケンはまだ続く

難病の友へ書けない見舞状  
だんまりを決めるしかない板挟み  
言わないと胸のボタンが弾けちゃう  
早春賦休耕田の黄水仙

河内長野市 水谷 正子

しみじみと大阪がよい雪情報  
温暖もこわいが豪雪おとろしい  
八十路越えテレビと祝うお元日  
初電話初ファックスも有り難い  
あの人や名は出ないので歌歌う

河内長野市 村上 直樹

欲と見栄むき出しにしてまだ元気  
だんまりの術で朝から睨みあい  
沈黙の美学腹には不発弾  
かくれたり見詰めあったりまだ夫婦  
無に生まれ無になるための一里塚

河内長野市 植村 喜代

どこまでも進んで急ぐことばかり  
夢抱いて今年も終る年の暮れ  
張り切ると疲れる歳でほどほどに  
外面がよくて言つてた事も裏返す  
出る杭は打たれて小泉さん元氣

河内長野市 坂上淳司

どのお子もえびす顔した福娘  
僕だけにあつたらよろし残り福  
夜逃げした社屋にポツリ福の笹  
今日もまた同じところで蹴躓く  
カーナビの如く怒らずすねもせず

河内長野市 井上喜醉

熟年は意欲を出すと肉離れ  
信心の声とカラオケ別な喉  
頼まれた嘘アリバイへ気を遣い  
北風へ首が落ちそう寒椿  
別世界探す気楽な散歩道

岸和田市 岩佐ダン吉

理に叶う話に少し染みがある  
あくせくの日だったマルをやる  
九条の我慢限界なんだろう  
県境はなし天気図はみんな雪  
恥かいた数だけ人に近くなる

岸和田市 井伊東吉

冬眠を終えて顔出すお年寄り  
春闘のベア増税と帳消しに  
清原よピアス外して出直しを  
新しい街かと思う大スパー  
ゲーム器を放せぬ子等の春休み

岸和田市 原 さよ子

結び目で母だとわかり荷をほどく  
なれなれしく面識ないのが寄ってくる  
不器量なみかんが残る籠の中  
足音も二人連れです落葉道  
じいばあも一緒に写す成人の日

岸和田市 雪本珠子

北風が悪ふざけして裾めくる  
春の風木々の命をふくらます  
雪が解け春の息吹がすぐそこに  
時が過ぎバツシヨネットな恋も褪せ  
足早に過ぎ去って行くカレンダー

岸和田市 森元 ふみよ

年重ね愚痴も嘆きも消え去って  
物置き古い火鉢にメダカ住む  
お犬様一家の中で超美食  
物置きに隠して置いた秘密ばれ  
面識が無い方向故かニッコリと

岸和田市 土橋房枝

原点の父母に感謝の誕生日  
負け犬と言われたくなく吠え続け  
いい情報伝えなければもったいない  
ストレスをじつと聞いている長電話  
くじ運に役だけ当る運不運

岸和田市 林 力子

のど自慢自己を見直す鐘連打  
物置き小屋根で雑草花盛り  
来客へ計算してのお年玉  
金貸した友が素知らぬ顔をする  
響かそうだんじり囃子世界まで

堺市 近藤 豊子

くる年へまわりはじめた風ぐるま  
どことなく祖父におもごし似て育つ  
てのひらはいつもぬくいね十四歳  
かぜひいてなんにもしないありがたさ  
雪だるまほつと安堵のかおかたち

堺市 村上 玄也

干支聞かれサバ読んでいた歳がばれ  
美女が来てすっかり変わる社の空気  
おやまたも名前変わったあのバンク  
割り勘か奢りか分からない誘い  
勝負師はデータ収集怠らず

堺市 石堂 潤子

似合わないけど寒風に毛糸帽  
ピンヒールカツカツ少女おぼつか  
な  
思うことあり七十の結跏趺坐  
畳み方なんか知らない晴着の娘  
平穏な一日でしたハーブティー

堺市 齋藤 さくら

初夢に朝日差し込むいい予感  
子等揃い鍋が美味いとお正月  
正月の餅がお腹にへばり付き  
西国を元気で巡る誓い立て  
雪国の冬の厳しさ思いやり

堺市 矢倉 五月

息つぎをさせてあげたい ICU  
病院へせめて明るい服で行く  
大らかな師の字体など真似たい日  
腹立ちを真つ直ぐ口に出す若さ  
勘違いしてはるけれど聞いてあげ

堺市 山本 半銭

雑字を気楽に聴いて身に付かず  
鍋のレシビグルメ仲間を往き来する  
葱提げて舅すきやき食べに来る  
聖夜の餐空を渡って来たカード  
おままごと我が家の食の縮図かも

堺市 神原 文

初恋の匂い抜けない賀状くる  
胸襟開く小さなバーのカウンター  
デジタルに馴れて計算うまくなり  
髪切ると失恋したかと笑われる  
外見をさっぱり変える若さ欲し

堺市和田 つづや

柔らかく生きよう自我を捨てながら

古希が来る葉たらふく飲みながら

妻の留守弾む気持はなんだろう

十六夜のほうが威張って見える月

証人喚問素人芝居幕あける

堺市西村 りつえ

温暖化逆らうように積もる雪

咲き誇る花は素知らぬ花言葉

もう少し貯え欲しく戎さん

本命なく義理チョコばかり買っている

くしゃみから春だ春だと騒ぐパパ

堺市志田 千代

今時の化粧を学ぶ地下鉄で

美人ゆえ災難にあわれたらしい

甘えたくなりそう労りの言葉

すき透る青磁の皿のふぐの花

雪ダルマ作れるほどの雪でよい

堺市加島 由一

美しく歴史になっていく昭和

裕ちゃんと同じビールを飲んでいる

妻が子にさりげなく聞くチョコの数

耳元で飛ぶ蠅のよう妻の愚痴

車座の熟女の歌を聞く桜

堺市源田 八千代

年一度血縁集うありがたさ

三が日だけでも解る暮し振り

お互いの生活基盤崩せない

孫達の成長と古い反比例

七草粥元の二人でほっこりと

堺市柿花 和夫

自分史の余白で本音あはれてる

愛用の眼鏡おでこにありました

いざという時に分別邪魔をする

常連をまとめてさばく名女将

日本語も見事お見事大銀杏

四條畷市 吉岡 修

ファッションシヨーあんな背でなし腰でなし

我ながらしたたかだった褒めておこう

四方からライトを浴びて影消える

庭いっぱい陽気元気のきを植える

わが社にも推す派否定派だんまり派

吹田市 山本 希久子

はずむ毬追いかけている春に逢う

無器用に生きてキッチンが居場所

明快な答卵をボンと割り

年金の旅自転車でゆっくりと

忠誠心盲導犬に負けている

吹田市 穴吹尚士

暗合で手帳につけた袖の下  
談合を手帳すら自ら白する  
病院の予約で手帳忙しい  
遺言を手帳ひそかに考える  
艶っぽい予定は何もない手帳

吹田市 太田 昭

車座の中で話をはじけ出す  
元朝の寒気を吸って禊する  
俺の呆けに妻は付き合うことはない  
夫の愚痴洗濯物に丸めこみ  
番号で呼ばれることに慣れて老い

吹田市 早川 棲世

駅裏の店飲む尻を外に向け  
あたたかい札をATMくれる  
娘がつれてきたとじ蓋とまあ飲むか  
固形物入れると痛む頭もち  
テレビ広告してる大学子が落ちる

吹田市 瀬戸 まさよ

幼稚園好き先生は美人です  
白髪美より黒がいい女たち  
豆まきも小声で済ませホツとする  
素颜でも許しあう友いてうれし  
やや嫉妬ゴールドカード持つ友に

吹田市 大谷 篤子

古希もすぎ恋のいろはに迷う朝  
ふわふわの友と話す春になる  
風ひらり手持ぶさたの家族留守  
生きてゆく限り女は虹を抱く  
月にまたなんぼのもとと笑われる

吹田市 岩屋 美明

雲一つなき元朝の深呼吸  
また一つ頭も足も歳をとり  
百までは生きろと孫が背中押す  
新藤兼人元気なうちはまだゆかぬ  
十円じゃ男がすたる戎さん

吹田市 木下 敏子

元気だと字もおどつてる年賀状  
食べ過ぎた胃袋洗う寒の水  
霜踏んでポチに従う万歩計  
ストレスも綺麗に解けた露天風呂  
犬よりも安い食事をして達者

吹田市 須磨 活恵

初詣でちっちゃな倅を祈ります  
鈴ふって柏手打ってはて何を  
欲ばらず不平を言わず暮せたら  
三が日孫や娘が居て笑い  
雪の朝椿見事な刑を逃げ

高石市 浅野 房子

高槻市 執行 稲子

医者じゃない私も匙を投げたい日  
乗りのいい客だ手拍子打っている

喉元を過ぎるか過ぎぬ間に変わる  
クラス会休めばすぐに殺される

うぬぼれも多少はないと生きられぬ

高槻市 乙倉 武史

雪下ろし何とかならぬか歯痒さよ

人心の荒廃あちこち監視が出る

上向いたらしい景気で見える株価

環境に優しい風呂敷見直され

生かされているのも忘れ愚痴ばかり

高槻市 瀧本 きよし

笑わない乙女で箸も味気ない

やはり金あればあったで生き易い

転んだらそのまま寝てる歳となる

刀鍛冶継いだ老舗が消えてゆく

蹴りたいが蹴る石がないバス道路

高槻市 傍島 克治

止めときよしとやんわり諭す京言葉

まかしとけと切った啖呵がのしかかる

今更にひとに聞けるかこんなこと

告白に声上擦った遠き恋

落着きのない大阪が好きやねん

クラス会でついでにと言う里帰り

ポーナスと孫に貰ったポチ袋

号泣もフィギュアも立派金メダル

大見得を切ったに没のアンケート

被災地の足長小父さん待っている

高槻市 左右田 泰雄

ひびき合う形で支え合う暮し

味わいのある一言が気にかかる

竹箒知らぬマンシヨン育ちの子

冬の音近づく朝の落葉掃き

驚れないリングながめている入れ歯

高槻市 西谷 治三郎

マネキンの服を買ったがいまひとつ

表向きいたわり合ってる嫁姑

景気良い言うても利率零てん零

診察順おばさんの後不運です

金出して広告買ってる新聞代

高槻市 江原 秀夫

つかず離れず火種は胸の奥の奥

まだ若い心と葛藤する体

気に入った娑婆に長居の雑煮箸

感情を笑顔で押え切り抜ける

妻の愚痴ふんふんふんとブランデー

高槻市 富田美義

生き下手に嘘は乗らないボタン雪

粘りつく視線の先にあるダイヤ

楽しみは老いて酒ある夫婦旅

遠き灯も近くの花も冬の音

人はみな迷い焦って刻きざむ

高槻市 生田義一

賀状書く若き日の顔偲びつつ

除夜の鐘ワンちゃん出番と第一声

毛筆の賀状恋しい八十路坂

干支は戌ベツトも厚着で初詣で

パツと散る名将仰木の名を残し

高槻市 井上照子

新年を祝う生け花梅開く

年賀状幸せそうな犬ばかり

傘寿くるめでたい歳というけれど

惚けられぬ娘に甘えずにおさんどん

このマンション命の補償クエスチョン

豊中市 安藤寿美子

新しい手帳に貼ったスヌーピー

犬の手も猫の手も借り雪除ける

腹立てた事思い出す古手帳

愛よりも遺族年金手放さぬ

愛されぬまんま化石になる女

豊中市 山門タミ

久し振り月に逢えたよホツとした

思い出は数限りない夢にまで

同じ事いつも言う友聞いてあげ

犬ならばダックスフント私かな

芋粥に温もりもろた雪の朝

豊中市 吉田あずき

やわらかい雪が凶器になろうとは

崩れると判って建てる地獄絵図

初日の出こっそり蒲団から抜ける

知恩院こんなところでカウントダウン

失せ物を探す勿体ない時間

豊中市 江見見清

買ってきた服が派手だと孫がくれ

ボロ勝ちの時は相手にも拍手

影法師平らな道で身を直す

平たくという説明が長くなる

頂上はおいでおいでと先へ行く

豊中市 水野黒兔

履歴書の行間にある泣き笑い

ポケットに隠した過去が騒がしい

天守閣空青ければ増す威厳

悪球も空振りすればストライク

ふる里に迷子になったプーメラン

豊中市 岸 田 知香子

眠られぬ夜中目覚めの五七五  
誕生日娘の腕すがり能楽堂

手術後の自己確かめる自転車行

事務屋です小さい店でも会社並み

正月の繁華街出て疲れ果て

富田林市 池 森 子

手の内を見せて確かな愛と知る  
迫真の演技で火の輪潜り抜け

身構えて受話器を握る母である  
てっぺんの席には季節風がふく

くるま座のすき間を埋める笑い声

富田林市 藤 田 泰 子

振り袖の孫華やかに幕が開く

チヨコの数春の心で生きている

娘と同居体内時計が狂いだす

肥後の守研いで鉛筆初削り

三日目のカレーのような僕と君

富田林市 片 岡 智恵子

涙かわくと居直っていた腹が減り

北の豪雪テレビ見て震え

脱皮した少女社会へ背伸びする

夕やけの空のどこかに曼珠沙華

ハーモニカ一音濁る牡丹雪

富田林市 中 井 ア キ

青空へ千切れるほどに振る尻尾

時々人は恋しくてとんぼりへ

目標をやっと見付けた蝸牛

たつぶりのコーヒーだった三が日

一桁の昭和みーんな忙しい

富田林市 大 橋 鐘 造

良い顔になろうなろうと善を積む

横風に誘われ己を見失う

皆帰りやと二人のお正月

善人でトップに縁のない背中

初対面笑顔の中にある殺気

富田林市 中 崎 深 雪

隣国の気持無視して靖国へ

爺さまは命をかけて雪おろし

医療費にも原油高にも攻められる

こんな世じゃ子供生むのはもう御免

改革とのたまうけれど誰のため

富田林市 稲 川 恵 勇

内気そうと娶ったはずが敷かれてる

ペンだこの指が手を焼くキーボード

齧られた脛を孫にも狙われる

三高を狙った拳句行きそびれ

キッチンの主役ゆずって飛びはねる

寝屋川市 江口 度

寝屋川市 太田 とし子

いく度にかにを食われる冬の旅  
退屈している煙草に手がのびる

さみだれに妻の小言が止まらない

椅子に座ると本棚の本笑いだす

初詣でいつもの人に逢いました

寝屋川市 平松 かすみ

じいちゃんのためにたくさんひなあられ

瘦せた脛それでも内の床柱

お役所で雅号で書いてすみません

選別をされたら私不良品

幾つもの命を貰い人となり

寝屋川市 籠島 恵子

千枚田美しいのは第三者

竿の位置すこうし下げる寒の入り

温かくなつたらなんて待ちきれず

親孝行する気ないかと頼み事

乳房には言つてきかせた事がある

寝屋川市 森 茜

抒情詩のまちさすらえば虎落笛

いっばしの孫のガイドで古寺巡り

ちよつと置いたおみやげ消えたエアポート

シニア連組んで通学路を守る

一面の残照こころ空っぱに

賀状ナシ察することの多くあり

それぞれの思いが滾る鍋つつく

三が日ソフトに暮れた鏡餅

歳もろて知らないことが増えてゆく

カタカナの何やらおかし日本語

寝屋川市 富山 ルイ子

天王寺青テントでは寒かろう

新今宮ここ西成と聞き悲し

やつと春年金遣い切つた冬

裏切りを想像出来ぬお人好し

ホームでのボランティアはや十五年

寝屋川市 坂上 高栄

嫁さんが来たうれしさが苦の始め

目をつぶる事も覚えた初試験

傘寿過ぎ息子がくれた地鎮祭

棟上げのお酒がまわる木の香り

認知症になつてもこの日忘れない

羽曳野市 吉川 寿美

柗と鯛の頭を信じてた

人の裏覗き見をする包装紙

母が在れば父が在ればと今にして

喪の家の九官鳥の置き所

喜寿の初春まだ炎を抱いた帯の芯

羽曳野市 安芸田 泰子

ダイエツトまた崩されたお正月  
言いたいこと胸に納めて風になる  
好奇心いっぱいあつてまだ死ぬ  
冗談にのせた本音が通じない  
あいまいな答でピンチ切り抜ける

羽曳野市 三好 専平

神将に踏まれて笑う天の邪鬼  
別人の顔がうつっている鏡  
人間に冬眠のないこの辛さ  
ホームレス立入禁止のなかに棲み  
両腕のない子が地雷売っている

羽曳野市 酒井 一壺

逆転の風を待つてる粘り腰  
半額になるまで粘り諦める  
境界が大空なのでつい油断  
別れ際彼女の呼吸掌に残る  
一呼吸おいて話せば済んだこと

阪南市 森村 美花

少しだけ背伸びしながら生きていく  
開き直る癖でストレス溜めている  
赤ちゃん的笑顔は白い天使さま  
金のない年寄どこで住めばいい  
年寄が大事にされてこそ平和

東大阪市 谷口 義

大切なことは手帳に書いてない  
しがらみを抜けると誰もいなくなる  
市役所の書類はみんな立って書き  
置物でない証拠に腹を立てている  
単純にして複雑な母に似る

東大阪市 安永 春

カルテからやつと癒され感無量  
恵方へとみんな笑顔の初詣で  
無理せずにはつばつしよう明日がある  
ワット数変えて輝く台所  
好きな人言いたい方がまた増えた

東大阪市 中岡 妙

はしごして願う事する初詣で  
家計簿の一ページ目はお年玉  
独り居の友へ無事かと初電話  
和を保つ返事はいつも円くする  
一巡りした流行を着ています

東大阪市 北村 賢子

満たされた笑顔生みだす玉の汗  
知らなけりゃ幸せだった事ばかり  
澄みきった空がやさしいころ生む  
凜と咲くバラも時にはへこたれる  
ため息はつかぬハミングして生きる

東大阪市 西村 哲夫

お元旦座るところのない世相

信じろと言ったばかりに疑われ

やみくもに下戸が酒飲む愚痴を聞き

気に入らぬ人の命もまた命

縄電車むすめも笑顔見せて乗り

東大阪市 米田 水昇

狒犬のあうんの呼吸年迎う

冬眠の穴は楽しい我が家です

うつろいを覚ます山焼き炎立つ

煩惱を散らす花火の破裂音

雪はげし浄化されてる天も地も

枚方市 寺川 弘一

介護疲れの夜更け独りで赤ワイン

いい汗をかいた素肌は美しい

我が家では俺と猫とが糖尿病

目を閉じてページの裏を読みなさい

あの世にはぼっくりジャンプするつもり

枚方市 海老池 洋

七転び目に定年の来てしまひ

万歳も降参もした老いたる手

親と子が同心円にいる安堵

黒猫に藍という名をつけてやる

ねちねちの妻に結局負けている

枚方市 森本 節子

その家のベットもわかる年賀状

年賀状友の安否を知るよすが

境内で一斉に焼く鏡餅

振る舞いのぜんざい心身暖まる

ご苦労さまカクタスようやく咲き終わり

枚方市 二宮 山久

成人式若きを語る六十坂

はく息も白き散歩のペアシューズ

こぼれ陽を集めて散歩の国訛り

まだ春は遠き枯木はじつとたえ

露天風呂小雪舞いくる鞍馬の湯

枚方市 宮川 珠笑

三が日すんで老夫婦に無口

沢庵を一切れつまみ食う至福

孫集うどれもアイドル系でない

台所替えた専業主夫の父

家出てた兄が葬儀を取り仕切る

枚方市 丹後屋 肇

くらわんか耳を櫛る河内ぶし

哲学の道にあふれるバスの旗

つつき合う湯気にはどける蟻り

風塵によるける手と手つなぎ合う

靴紐を締める退院スタンバイ

枚方市 莊 司 弘 之

凜とした心で見つめる初日の出

祝箸雑煮の餅をはふはふと

いらいらとしたら大きく深呼吸

階段は油断大敵一歩ずつ

熱爛におでんが出るとつい本音

枚方市 安 達 忠 央

成人式晴れ着で艶を競つてる

新人の覇気に個性がみずみずし

いざごさも笑顔にかわる呱呱の声

たたきあううちに友情深くなり

はらすえていたのに誰もたたかない

藤井寺市 高 田 美代子

茶柱が立ったそろそろ栄転だ

口止めをせずに話せる友がいる

死んでいい人はひとりもない戦

春の闇白い時間を持て余し

花片をたんと集めて花ことは

藤井寺市 鴨 谷 瑠美子

気のきいた暦で今年の運は良い

人肌のお酒で暖火照ってる

成人式袂さながら金魚たち

初詣で拝む形は美しく

あと一歩距離が縮まぬ恋の仲

藤井寺市 太 田 扶美代

ただの火で終りたくなかった炎

ポケットを出たので夢でなくなつた

クレオパトラが食べたのならばたくしも

唄つたら私の悲しさがバレる

もう一人のわたしは絡みグセを持つ

藤井寺市 中 島 志 洋

白酒よりワイン飲みたいお下げ髪

やり直しきかぬ人生泣き笑い

ライバルに同情される腑甲斐なさ

金と暇出来て耳まで遠くなり

世渡りが下手でめだかのままでいる

藤井寺市 鈴 木 いさお

酒二合豆腐一丁烏賊少々

仏壇の父と酌み交うふたり酒

年金になって晩酌少し減り

古稀近しそろそろお酒減らそうか

にがり酒欠けた茶碗がよく似合う

藤井寺市 若 松 雅 枝

野仏とお話が好き山が好き

本当はやさしい配慮だった姑

おすし屋で魚偏の文字競い合う

古里が好きで墓参は欠かさない

日溜りにのたり昼寝の孕み猫

箕面市 出口 セツ子

八尾市 吉村 一風

初日記明日へ祈りを込めて書く

初詣で温泉も済み寝正月

正月の都会に車消えました

正月も大忙しの救急車

魂に恥じぬ一年過ごしたい

守口市 井上 桂 作

春立ちて白河の関秋に着き

白河の関まで歩く旅でした

西行も芭蕉も行った白河に

関守りもなしと景時歌を詠み

たびたびに世界旅して本を書く

八尾市 高杉 千 歩

春の宵命をつなぐ片手鍋

負けん気の三本足へ花だより

塀の上颯爽といく春の猫

かけがえない一日を白い画布

スケッチへ早くこないか桜咲く

八尾市 宮崎 シマ子

主婦業を棚にあずけて病床二十日(怪我をして)

恨みごとと言わぬ空はまっ青だ

動けないけど字が書ける本読める

口は痛くないので歌をうたってる

病むときにと貯めて病んでも遣えない

商魂の声にいつい買わされる

爪きってひとり手締めの大晦日

反省をしますます昼の月と会う

きっちりとは急所押さえる妻の釘

初詣で雪の白さに洗われる

八尾市 生嶋 ますみ

景気よさそうだなと賽銭箱の私語

あほだなと思う私は昼の月

沈丁花の蕾が春を近づける

ニートにも働く力持っている

嫁のぐちちらつと聞いて知らんぶり

八尾市 山本 宏 至

正月の町に子供の声がない

もう一本ソフトな声で追加する

やわらかい枕が眠り妨げる

一匹の蚊が天井で春を待つ

こだわりを捨てると視野が広がる

八尾市 村上 ミツ子

松の内バス貸切りの墓参り

笑顔しか映らぬ鏡持っている

大雪の白さ怖さをテレビから

白組の方がピタリの和田アキ子

他人まかせのシナリオに慣らされる

八尾市 長谷川 春 蘭

当たるかも知れぬくじ買う冬ごもり

巻きくせを直して掛ける新曆

足跡がそのまま冬に入る刈田

恙なき日の明け暮れるや花八ツ手

これはもう掃いて詮なき落葉かな

大阪府 粉 山 隆 盛

国際技館に看板替える国技館

初夢に大間のまぐろ釣り上げる

バラ色の夢巻き戻す春の酒

義理チョコがまだ男性と見てくれる

青い鳥舞い込む胸を開け放つ

大阪府 野 田 栄 呼

三回も読んで半分話せない

マンガ読む孫に加わる日曜日

若者に勝てる辛抱強さ持つ

外人を下支えする大相撲

賽銭は投げやすいから銀貨にす

大阪府 米 澤 俣 子

カルチャアの友よ七色年賀状

物よりも笑顔の欲しい歳となり

人並みに暮らせる日々のありがたさ

老いてなお自分のいろに咲く気概

意地張って引く潮時を見失う

大阪府 澤 田 和 重

お手本のような家庭も修羅がある

家系図がでかい顔している釣書

美人にはない持ち味で持てている

スツボンボンいやとマネキン春を着る

鷹生んだばかりに親は忘れられ

大阪府 桑 田 ゆきの

三世代戌年揃う家の幸

介護され一つまみある自尊心

靴紐を締めて立つてる通学路

駈けっ振りドラマ湧かした箱根道

両の手を合わせば煩惱解けて来た

大阪府 前 田 ゆ い

生き甲斐は千差万別人の世や

愛犬の披露ラッシュの年賀状

お散歩の犬と飼主見て楽し

安全な場所から吠えるうちの犬

子宝へ願いを込めて戌の年

神戸市 山 口 光 久

割り箸がきれいに割れて未練なし

ペラペラの紙が判子で重くなる

寄せ鍋はみんなの味のまとめ役

雲海の中で詩人の夢心地

再生紙二度の役目に胸躍る

神戸市 山口 美穂

芦屋市 黒田 能子

ことしはもう今年こそはと思わない  
咲いてますと臘梅香り漂わせ  
温暖化が寒波も雪も持つてくる  
多数決が正しいとはかぎらない  
九条の重さ新成人に伝えたい

神戸市 木村 貴代子

性善説信じたばかり怪我をする  
悪筆も言うなら個性年賀状  
今日一日生きた儲けよあかね雲  
一途さで失敗の山のりこえる  
後悔を生き抜く知恵に変えて春

神戸市 伊勢田 毅

クラス会元ライバルの敵も増え  
医者変えて妻の挑戦まだ続く  
参拝を次のトップが模索する  
遺産分けすめば他人の顔になる  
孫一人家名断絶ふと思う

相生市 中塚 礎石

縄のれん右と左にいる肴  
散髪で鼻毛切られるまで知らず  
熱爛が冷めても話とぎれない  
支払いに孫が暗算してくれる  
生き残るためにかゝるくやりすこす

たつぷりと花粉まぶした春の風  
じいちゃんが若者よりもしゃんとする  
苦手だと思つた人とうまが合う  
ガンバレと人事だから軽く言う  
若さだろ川の深さが分らない

伊丹市 山崎 君子

相席も同じかけ蕎麦老夫婦  
受験生吉を見せ合う初詣で  
残り福分けて貰つて笹ゆれる  
呆け防止恋愛とある今更に  
同期会南の青春連れてくる

尼崎市 長浜 美籠

夢無限炎を秘めている背広  
どの顔もさして変わらぬお正月  
とんがってみてもと思う雪の花  
心音を覚られぬよう席を立つ  
うす紅色の恥らい愛シシクラメン

尼崎市 田辺 鹿太

鏡には歳に合わせた顔がある  
呑み屋には寄らぬ散歩もいいもんだ  
謳歌するほどでもないが生きている  
七人の敵も残るは二三人  
意地悪をするのも愛の裏返し

尼崎市 松下 比ろ志

庭に雪まさしく冬が目の前に  
恙なく妻と聞いている除夜の鐘  
待つてるとなかなか咲かぬ冬薔薇  
おやじさんと呼んで見つめる冬銀河  
市民講座でシルクロードへ誘われる

尼崎市 春城 武庫坊

四世代新春祝い鍋囲む  
老い二人の笑顔をつくる曾孫来る  
三年先の米寿目指して二人生き  
雲の色冬をゆたかにしてくれる  
大地の味知らない葱が鉢で伸び

尼崎市 春城 年代

公園のベンチ青天お元日  
人影のない新年のおごそかよ  
初詣で大型店で道迷う  
使い捨ておせち料理の箱りっぱ  
愚妻ですよと今年も開き直る私

尼崎市 軸丸 勝巳

紅白も馴染みが消えて切り替える  
年越しのそばにひと味除夜の鐘  
親しさに添え書き長くなる賀状  
破魔矢買うために生田の初詣で  
ロボット奴僕より膝が柔らかい

尼崎市 林 昭三

配当金餅代ほどを受け取りに  
済みきった参道進む砂利の音  
人の波拍手届けと強く打つ  
はぐれたら狛犬の前孫と決め  
鈴なりの柿が熟れてる留守屋敷

川西市 米原 雪子

異状なし検査結果に気が抜ける  
同じ事ニコニコ話す同年  
思い出と歳月載せて賀状来る  
帰郷の膳古い器に語りかけ  
ボケの鉢ふつくら蓄夢を持つ

川西市 西内 朋月

冬の蚊は叩かなくても消えていき  
旧友の思い出話す珈琲店  
眠れない深夜に開く定石書  
揺すられて終着駅で目を覚まし  
首竦めおでん喰つてる宵戎

三田市 久保田 千代

支払いを拒否し紅白ない師走  
ほどほどの欲ありわたし元気で  
生きがいは白寿の母の無垢な笑み  
ヘルパーの介護居心地整える  
席一つ運命決めた列車事故

三田市 北野 哲男

ライバルがたんといるのでげんきです  
見て見えぬ聞いて聞こえぬ振りの歳

マドンナも敵七人も息が切れ  
パッキンが古くて涙もれやすい

割り切れぬ円周率の輪が丸い

西宮市 井上 松煙

八十路坂書初め飾り屠蘇祝う

爛をするひととき待てず冷やで飲む

軽口を叩けるいまが将に旬

まかしとき胸を叩いてすぐ忘れ

紛れです慎ましやかに言う自信

西宮市 亀岡 哲子

開き直って料亭おせち万円

一休みすると夫がオイと来る

戎さんにご縁もらつためぐり逢い

生れ変り明日を迎えるハープ風呂

三世代ユニクロを着てぬくい春

西宮市 山本 義子

ポケットの奥にゆずれぬ自負ひとつ

怒り心頭そんな若さは過ぎました

遺伝子とはつきりわかるお人好し

間違ひ電話風がつないでいるらしい

玄関に靴の並んだころ想う

西宮市 緒方 美津子

被災して僕にもあつたバカ力  
鍋奉行しつっしつかり飲んでる

欲ばりも座席は一つしかとれぬ  
きんぴらで男心をゲットする

遠く住み母の杖にはなれずいる

西宮市 門谷 たず子

もう泪とはサヨナラをする実南天

乗り替への駅で未練は捨ててきた

祝卒業またベトナムへ行く孫よ

眠れないのも業の深さカミルク飲む

心持ちよくワインがまわる摩耶の雪

西宮市 牧 潤 富喜子

雪国の雪の重さを思い出す

生きてゐる者のおつとめまた黙痔

牛肉を食べてないなどふと気付く

申し訳なくて快晴とは言えず

宵えびすバスが遅れていると言う

西宮市 西口 いわゑ

木枯しの中山茶花にほほえまれ

無言というとても強い武器がある

盃をかわし苦手ととけてゆく

化粧する女勇気が湧いてくる

プランにはなかつたあなたとの出会い

西宮市 坪井孝一

絆という太くて細いものがある  
一言が味方にもなり仇にも  
ハモニカで最後まで吹くマイウエイ  
アンパンに時代の味が潜んでる  
同窓会青い山脈締め括る

西宮市 菊池トミエ

何もかも包んで祝う富士の山  
粕汁に灘の名酒が香ります  
串柿のいつも二個にご睦まじく  
年あらた歳相応に羽ばたこう  
福の神運が開ける初詣で

西宮市 秋元てる

台風が逸れた故郷から来たりんご  
木道を選つて散歩の足守る  
病氣癒え釣果が踊る法螺を乗せ  
明らさまに長生き非難のよな口調  
冬木立もうひとふんばりとの気迫

姫路市 古川奮水

名曲をじっくり聴かせ銘酒熟む  
隅田川水上バスで橋を観る  
帝釈天参る矢切の渡し混む  
帝釈天だんごの味も旅の味  
人間が歩きシャネルの5が香る

兵庫県 大谷幸次郎

柏手を打って今年の命乞い  
簡単に花の命を断つ鉢  
新しい名が氣にくわぬ町に住む  
除夜の鐘余韻の中に去年今年  
また一つ命を守る葉増え

奈良市 米田恭昌

八百万の神の鼓動を聞く社  
しがらみがあつて賀状を欠かせない  
ホントかな祈つてくれている賀状  
しがらみが足枷となるトラバユ  
なけなしの財布に妻のケセラセラ

生駒市 飛永ふりこ

渾身の力で真水掬いたい  
ろうそくも気恥ずかしいがバースデー  
間違いをうのみにしてる喉仏  
河豚ちりの雑炊だけを所望する  
繕いの情が生まれて共白髪

香芝市 大内朝子

開運へここ掘れわんと言うて欲し  
真っ直ぐに生きてるつもり自分流  
おみくじの凶に反発して生きる  
観梅のお誘い脳も華が咲く  
まだ失せぬ色と欲とが生臭い

檀原市 居谷 真理子

ああ恐い心にならないこと言っちゃった

お目当ての人が奥さん連れで来る

パチンコの玉を金利のつく金で

待つという愛を覚えて母となる

乗り継いで佇むために来た岬

大和郡山市 坊農 柳 弘

天声人語四季それなりの朝を斬る

山茶花の色褪せさせて黄砂舞う

季の巡る早さに紅梅の輪廻

春告げ鳥私の恋はマイベース

おぼろ月両手で掬う露天風呂

奈良県 渡辺 富子

生め生めと国挙げて言う姦しさ

息子より介護ロボット当てにする

愛憎もいたわりになる老いふたり

逢えばまた心が揺らぐ花の寺

古代しのぶ明日香の風がやわらかい

和歌山市 牛尾 緑 良

ひとつだけ約束をする春だから

青春はまだメサイアを諳ずる

茶柱がどうあろうともモーツァルト

ティータイム今日は太宰の文を読む

友という紹介状に気を許す

和歌山市 喜田 准一

明るくて丸い笑顔に含む針

ブレーキを踏む癖前に出られない

残り皆言えは味方も敵になる

情報の咀嚼に顎が弱過ぎる

限界を知っているから踏み込まぬ

和歌山市 木本 朱夏

シクラメン届くひとりのクリスマス

牙見せぬよう大らかに鬼笑う

場の空気読めず微妙にゆらぐ椅子

お財布の口あけ春の便り待つ

あくせくと咲きあくせくと散ってゆく

和歌山市 古久保 和子

古里によく似た景色土の道

新米のたまごはんといい至福

大根は葉付きのまままで買いました

少子化へお役に立てるものならば

ノーメイクで行けるところは両隣

和歌山市 桜井 千秀

すぐムキになるから磯飛んでくる

哀楽にどっぷり浸かる一人部屋

コーヒーとジュースで粘る一時間

宥め賺してやっとなんを取り戻す

トイレにも電気スタンド文机

和歌山市 福本英子

ガラス越しに初日を拝む今朝の冷え  
他人さまの助けを借りて除夜の鐘

雪中の箱根感動ほしいまま

孤立した村で老人逞しい

身長と反比例する腹回り

和歌山市 榎原公子

あの世への道が開けた寺の寄付

悟れずに迷い道する昨日今日

冬の陽へ女は鯖を読みたがる

春に先駆けてキンカン姦しい

さあ旅の続きを誘う春の音

和歌山市 楠見章子

深呼吸すると豊かになるバスト

傷がつき易いと自慢してござる

ケータイを持たぬ不便も気が楽で

路地を行くやさしい水の音がする

図書館へ元氣出る本借りにいく

和歌山市 玉置当代

新年の抱負もどこへ寝正月

恙なく賀状頂く嬉しさよ

またひとつ持病が増えて年を越す

体重がまた増えました三が日

柔らかな幸せ掴みママの顔

和歌山市 上地登美代

一年の計に書き足す愛の文字  
握る手が好意に満ちた脈を打つ

ためらえばチャンスくるりと背を向ける

負け犬はいやや心に鬼を飼う

少子化の大事な子供なぜ殺す

和歌山市 松原寿子

大切な刻を日記に伏せておく

豪雪へ人も野菜も哭いている

鈍くなる鐘も芯から凍りつく

受話器おき胸おだやかな波となる

いま風と内緒ばなしのティータム

和歌山市 堀畑靖子

たまごっち星へ還ったたまごっち

いいじゃない負けず嫌いの女の子

血脈の重さ根雪になっている

去年より弱気な母の肩を揉む

愛求めすぎて生じてきた軋み

和歌山市 武本碧

間のびした恋の扇子がたためない

組み紐に編み込んである思慕の糸

親友の素顔に滲む人間味

真心に見栄もちよっぴり添え包む

婿殿も左党にて馬が合う

和歌山市 細川 稚代

修復のきかぬお肌とあきらめる  
ほしいもの何もないとは淋しいね  
年明けて医者のはしごをして帰る  
株価追う目はランランと輝いて  
百五歳まだ暗算が出来るそな

和歌山市 松尾 和香

日も新た忙しく上がる古希の坂  
生薑湯の温もり抱いて寺の坂  
川霧の中にふるさと寒の入り  
自転車で紀の川渡る孫を待つ  
シンブルに生きる私を風が押す

和歌山市 田中 みね

よかったよかった無事終羽ちゃんの報に触れ  
パパのこと一番好きとなさぬ仲  
できた人だご自分だけがそう思い  
お目当ては例の焼き鳥宵えびす  
川柳三昧今年も詰まるスケジュール

和歌山市 宮本 三喜夫

世の中が何か狂うて怖いこと  
議員さん古巣に顔を誤解され  
私欲だし議員失格笑えない  
呼び出して耐震偽装なすりあい  
罪のない子殺める馬鹿な若者よ

和歌山市 福井 桂香

初夢は夫とダンスしてる妻  
お正月ビンゴゲームで大はしゃぎ  
遺伝子の組み替え神の域冒す  
ショートステイ小鳥の声を聞く朝食  
鏡開きで久々のおぜんざい

海南市 三宅 保州

遠からず女系途絶える雛飾る  
サブリメント不死身の如きコマーシャル  
順不同とは死ぬ順番のことですか  
欠席の理由鮮やかすぎないか  
天の邪鬼放っておくと従いてくる

海南市 堂上 泰女

幕あけはモーツアルトで華を追う  
ボトル一本あけたいうても碧ジュース  
ヒロインにすっかりなつて見るオペラ  
着メロはボレロであなた待ってます  
官能がはち切れそうなペアダンス

鳥取市 植田 一京

家計簿に時どき謎が秘めてある  
春ですれ少し背のびをして歩く  
人生は片道切符の旅ですね  
風ばかり読んで方角定まらず  
長い冬まだ迷いから抜けられぬ

鳥取市 西村 黙光

豪雪がタイムトンネルくぐらせる  
雪達磨竹馬の友が飛んでくる  
辿りついた傘寿の重み噛みしめる  
浅学を晒して詩と相撲取る  
もて余す暇が酒豪の名を広め

鳥取市 夏目 一粹

哀しみを抱いた夕陽はすぐ沈む  
にんげんはとびら閉じたり開いたり  
年はじめ暦が重くのしかかる  
内面と外面芸の巧いこと  
生き残るためにソフトな人になる

鳥取市 杉本 孝男

健診の外科医はズバリ切る見ため  
ライバルの涼しい顔が気に入わぬ  
勝ち力士背なに嬉しい汗の滴  
汗を知る銭は期待を裏切らぬ  
線の細い男へ未来託せない

鳥取市 倉益 一瑤

ふる里の風にいろはを教えられ  
壁画から見える聖書のものがたり  
シナリオのところどころにある火の輪  
泣きボク口伏せ字をいくつ解いたやら  
鳶の子が鷹になろうともがいとる

鳥取市 鈴木 一弘

苦いから先送りする飲み薬  
枯れてゆく野辺の草ぐさひとらずつ  
働いた八十年がゴミとなる  
胸の内化粧おとしてうちあける  
スタートに遅れとつたが子だくさん

鳥取市 富山 檳榔樹

弥生月鼓腹撃壤来る気配  
雛祭り女性上座で美酒を酌む  
胃腸好調老いの飲酒も現役だ  
足るを知る親父黙って背を伸ばす  
裏表たんと見せられ自信湧く

鳥取市 平尾 菜美

故郷をバネに明日も生き延びる  
崖下の愚痴に聞き耳たてている  
頑張って後はらくらく運まかせ  
夢追って八十路の顔があどけない  
足洗う酒と長旅ふり返る

鳥取市 有沢 せつ子

脱サラをしてから父は無欠勤  
コーヒーを淹れるとほっとしたくなる  
ナツメロとみかんが好きな掘炬燵  
湯の街の旅情彩る雪が降り  
おみやげに聞いて帰った安来節

鳥取市 録 沢 風 花

鳥取市 山 宮 愛 恵

鉛色の空に無口になる砂丘

成どしの犬にもおせちお裾分け

セールスも来ない正月のんびりと

しようもない話がしたい冬籠り

たくさんの人から貰う処世術

鳥取市 加 藤 茶 人

紙よりも薄い命かまた刺され

同郷の訛りつついづい気を許し

尻と腹出てきて舌もよく回り

落ちぶれた父権のひとりほたる族

とりあえず神に委ねた運不運

鳥取市 永 原 昌 鼓

百歳がきれいな皺に包まれる

平和だなベットの調節売つてある

名将のひと言チーム甦る

歳らしいあちこち不備が出始める

よく笑う友から貰うエネルギー

鳥取市 吉 田 弘 子

吉と出て今年の運を手に入れる

三日ほど会わぬ隣へ久し振り

なみなみと議論を交わし女帝論

地割れから顔出す草に喝もらう

辛抱を知らぬ若者キレ易い

ご挨拶雪の話の行き帰り

雪かいてはるかな昔近くする

雪しんしん雀は何処へ行ったやら

ひとつとや深深葛湯かきまわす

雪模様雪と小話して暮れる

鳥取市 田 村 邦 昭

なにもしないなにもしないと妻の愚痴

いい答えだけではなにも掴めまい

忠犬と言われるほどの犬でない

失敗を重ねた力いい答え

もう少し薄化粧なら好きと言ひ

鳥取市 中 村 金 祥

沢山の笑顔もらつて若返り

凧を繰る笑顔君にもあげたいな

声だけは男前だと自慢する

温暖化笑っちゃいます雪が降る

あくせくとしていた頃が懐かしい

鳥取市 美 田 旋 風

新聞で日にちと曜日確かめる

美容院帰りの妻はほめておく

禁煙と決める正月明けてから

老人の町に祭りの風が止む

訃報欄気になる歳になつている

鳥取市 武田 帆雀

歳月は幽霊死んだ顔が出る  
名も顔も売れて逆らうものは斬る  
雪ダンブ隣の嫁女と根比べ  
神よりも先に失礼晦日酒  
跡継ぎは遠くにいます注連飾り

鳥取市 土橋 睦子

少子化に日本の未来いじめかも  
茶柱にうさうさ今朝の風を吸う  
とりあえず骨量検査して貰う  
折り込みのチラシで遊ぶ老友会  
童うた聞かせて春を待っている

鳥取市 福田 登美

北風が怪しい音で雪を積む  
正月は誰もかえらぬ冬木立  
錆びてきた重い命も明日を追う  
一病に点滴だけは欠かせない  
化粧落としほっと自分を取り戻す

鳥取市 上田 俊路

雑草にもやさしい水をくれてやる  
雪道にびっくり箱が置いてある  
私物除けば空っぽの部屋残る  
誕生日八十一といい聞かす  
百までは生きるつもりのみ浮かぶ

鳥取市 林 露杖

老犬の欠伸長閑けし明けの春  
口開けて笑うことなく三が日  
自画自賛そんな驕りの日もあった  
神経痛卒寿の脚に食らいつき  
仕来たりの廃れとんどの火も小さく

鳥取市 福島 庸二

一〇〇円の価値を見直す品揃え  
美しい流れをつくる句読点  
宿命か出やすい杭に生まれつく  
二日酔い五臓六腑に沁みる水  
戌年に願いをかけるワンチャンス

鳥取市 徳田 ひろこ

水仙のかおり一足早い春  
ダイエツト忘れて赤い箸進む  
ひと言のポロン波紋を広げたな  
見ぬ振りができずいつでも熱くなり  
二度ノーを言われて以来誘わない

鳥取市 埜 寛子

試されているぞ傘寿はパツと咲こ  
ワタクシを仕上げる時間下さいな  
あの夢がそしらぬ顔でまた逃げた  
安来節うなり運転しています  
児の前で喫うパパついに禁固刑

鳥取市 福西 茶子  
ああ言えばこうと捻じ伏す人と住む

ドカ雪に幽閉三日まだつづく  
ドクターへ渡す夫の承諾書

壳薬もサプリメントも飲まぬ主義  
母の歳二倍も生きてまだ未熟

鳥取市 西川 和子

寒風の中でも春に咲く準備

添い寝する児から温もり貰ってる  
雪解けてやつと陽を見た路のとう

残り雪掘って彼岸の墓洗う

春の音ばあちゃんは脱ぐチャンチャンコ

鳥取市 宮脇 道子

太陽で頬染め直すりんどです

認知症早く来そうな戦中派

終着駅水面に浮かぶ極楽寺

捨てられた手袋にある物語

大根が首の青さを自慢顔

鳥取市 奥谷 彩子

たっぷりと愛盛る皿に塩胡椒

一行詩生命と対語り返す

酸素不足仮面外して日に晒す

耳学問拾う片耳あけておく

折れた釘さびた釘にも自負はある

倉吉市 山中 康子  
豪雪の不安が母を眠らせぬ

大自然神の御慈悲をこい願う

大雪に負けず成年走り出す

取り上げた話の種に芯がある

かけひきを知らない母の庭掃除

倉吉市 最上 和枝

入院の準備に箸も忘れない

二次会は他人の噂食べに行く

炎えさがる風の女と火の男

仏壇のとびらを開けて話する

アスベスト我が家の壁が気にかかる

倉吉市 松本 よしえ

おみくじを見せ合う若い二人連れ

犬小屋に一寸小さめしめ飾り

救急車犬も脅えて落着かず

勝負師が策をめぐらす舞台うら

アルバムを開き暫く若返る

倉吉市 米田 幸子

吹けば飛ぶようになって口は立つ

木枯しが僕を詩人にしてくれる

悶々と眠れず枕裏返す

増税にみんなやる気をなくしちゃう

俳優の名前もとんと出てこない

倉吉市 牧野 芳光

故郷が薄い夕日に耐えている  
力んでも寡黙な人になわなない  
百円で僕の苗字が売られてる  
幸福論金の話は書いてない  
犬よりもみじめに道を歩く冬

倉吉市 山本 玲子

名を聞けばとても抜けない母子草  
木漏れ日をしつかり掴む藪柑子  
人波に吞まれ目的地を過ぎる  
不道徳なげきポイ捨て伍拾う  
名案が浮かび散歩の歩を早め

倉吉市 野口 節子

仲間だと思つた亀が駆け出した  
二番手が息の乱れを待っている  
先祖は浪人今は見事なフリーター  
錆びること知らない母の木綿針  
さもしいが赤札ばかり目に止まる

倉吉市 猪川 由美子

聖職がだんだん死語になつてゆく  
小泉劇場名演出に踊らされ  
著者離婚買ったアツアツ本を捨て  
愛の手紙飲み食いよりも温つたまり  
クリスマスケーキ年重ねてもやめられず

米子市 青戸 田鶴

草萌える私も足をきたえよう  
八方へ気くばりベダルふんでいる  
春の絵の中で油断は禁物だ  
ななかまど赤く炎えたよこの大雪  
おだやかな一日友とおしゃべりを

米子市 白根 ふみ

合併の新春にしあわせ見当らぬ  
改まるきのうの顔と同じだが  
水仙をがばつと新春がはね起きる  
松葉ガニ君のすべてを大皿に  
身の丈で過し退屈などしない

米子市 中井 ゆき

弦をひき月は夜さむをつれてくる  
でこぼこの地球に脚をとられまい  
油断せぬそれでも脚は虚をつかれ  
一呼吸おいてやさしい声にする  
ししなべの湯気に夜さむがとけだした

米子市 光井 玲子

時々呼吸が乱れ老いを知る  
孫たちの名前も忘れそうになる  
光るものなんにもないが健康だ  
油断すれば私は呆けになります  
率先してジंकクス破るおじちゃん

米子市 政岡 日枝子

私の呼吸が鏡から洩れる

仏飯を盛るゆつたりとした呼吸

油断すると風邪がどこからでも入る

寒い音ばかりで暮らす雪の国

食べに行く人差し指にぶらさがる

米子市 澤田 千春

チャルメラの笛も恋しや夜寒かな

ひと呼吸おいて結論出すことだ

この寒波骨の芯まで凍結だ

春夏秋冬 四季それぞれに氣をもらう

一言で明るくなるよありがとう

米子市 木村 春枝

天気予報信じて作るスケジュール

いい日和素直な耳にありがとう

ひっそりと呼吸していたすみれ達

寶石の虜になって夕暮れる

片付けてすぐに始まる探し物

米子市 門脇 晶子

油断してたら僕は人生曲り角

輪の中のぬくもりだけに油断する

診察室へ一呼吸して入ります

コーラスの呼吸合うまでタクト振る

重ね着の夜寒にこたつはなされぬ

米子市 野坂 なみ

八十四歳の呼吸でこなす身の回り

風の呼吸を窺っている杉花粉

不注意に変えた電池よごめんなさい

地図にない住所へ友が行きだした

病院でばったり逢ったお寺さん

鳥取県 深田 俱久

雪化粧やっぱり君は伯耆富士

雛あられ正月餅とは知らぬ子等

物指しの目盛り違いで物別れ

美德から忘れ去られた爪の火よ

団欒に薪ストーブの底力

鳥取県 澤裕 子

雲行きを読んで手の内変えてみる

やさしさに触れて涙腺しまらない

麻酔から醒めて聖書に掌を合わす

温もりとパワー仲間にもらつてる

駆け落ちで火の輪くぐつた愛も冷め

鳥取県 谷口 次男

流されたところの水が暖かい

泣き虫をききょうも励ます流れ星

悪政をがぶりと嘔めよ波頭

ケータイもカードも持たぬ平和主義

ヒトラーに近づいただけで大変だ

鳥取県 佐伯やえ

裏木戸を開けて待つて福の神

出雲号廃止知るや知らずやふきのとう

バカを言うたびに原稿書かされる

物わかりよいおだやかな戌といふ

あらがえぬ白い流れにのつていく

鳥取県 竹信照彦

株高値田舎者には摩訶不思議

やっぱりな不況に強いパチンコ屋

しめ縄も弛みがちだが自分作

雪かきで鍛えられます足と腰

健診はマルだったのに風邪もらう

鳥取県 鳥羽玲子

うれしくて悲しくてよく出る涙

ビタミンC素肌の冴えを期待する

犬逝かせ涙なみだの電話口

生命のドラマは誰が仕組んだか

我が杖になってた夫に杖がいる

鳥取県 盛田夢路

倒れそうな茶柱吹いて立て直す

恋煩いX線が見逃した

まだ女日に何度でも鏡見る

お互いの寝息たしかめ共白髪

瘦せたいのにヘルスメーター嘲笑う

鳥取県 石谷美恵子

御破算を重ねて若い樹が伸びる

久し振りババちゃん鍋に足りてゐる

昼ドラにどっぷり妻が動かない

コスモスの群れへどっぷり沈む贅

正面の女は刺客かも知れぬ

鳥取県 山下節子

これなあにあればなあにと三歳児

客人が無口気疲れしてしまふ

I Qは未知数孫に期待する

オレオレが涙声からまき舌に

有頂天先の火の輪に気が付かぬ

鳥取県 下田茂登子

家付きの女と勝負など出来ぬ

賽銭を盗んだ金で酒も飲む

夫婦仲一生溶けぬ絵の具皿

飲んで絡む出鱈目ばかり言うカラス

腹立つとどんどん濁り口の中

鳥取県 蔵本悦子

天皇のような気である家の犬

泣きぼくろ女の過去は喋らない

アーメンと言ってきれいな私

袷と飲みっぷり良い女に惚れ

晩酌は陽が傾くとすぐにやる

鳥取県 山本 正光

金なんか欲しくないなど嘘のはず

新聞も雑誌も読めて幸せだ

火葉抱き発火押さえて生きている

愛煙家無視されやすいたばこ税

たばこの値上がる血糖値もあがる

松江市 安食 友子

遺影だけ好い子ちゃんして笑顔して

老婆でも人影を気にする夜道

寒月が凜としていて逢わせない

雪しきりブラックならば難儀だね

法要にひ孫いっぱし紅葉の手

松江市 松本 知恵子

二階から煌めく初日スタートだ

安全無視 官から民もすさま風

旧友と堀川めぐる炬燵舟

青さぎの竹む狐独決まつてる

月へ行く時代に連日の凍死

松江市 三島 滋丘

領けばどこまで続く愚痴話

夢いまだ捨てず火の鳥追っている

先人の残した言葉噛みしめる

この道は幼い頃の夢の道

真つ青な空から春のメッセージ

松江市 佐野木 みえ

おはようと一声朝のシクラメン

卵かけ御飯なつかし母の顔

たまご酒ゆっくりきいて眠くなる

有精卵ころころ春が待ち遠しい

卵焼運動会のお供です

松江市 津川 紫晃

フライパンわたしの過去と裏返し

コンパスをつかわぬ丸が好きと言う

海と空水平線で妥協する

積る雪一人窓見て母を恋う

蜂の針よりなお痛い後ろ指

松江市 川本 畔

絡み合う気配背中に受けている

追伸へ涙の雫受けた跡

あと一枚日めくりの刑執行す

ファンファーレ紛れて咳が一つ出る

人間の目が透明になる水面

松江市 小川 注湖

新スーツ競争相手並んでる

海の幸お節料理も国際化

師も走る親も走って子はニート

転んでも起きる心を持つ達磨

朝昼晩もんだ切れ味代弁者

出雲市 多久和 敬子

内緒事輪ゴムで固く口封じ  
節くれた指の温もり母の愛  
これからが私の出番娘のお産  
二人居て仲良く風邪も移し合い  
ストレスが溜まりへそくり減つて来た

出雲市 伊藤 玲子

どじばかり深目の帽子欲しくなる  
深まった疑惑の雲を払わねば  
みつからぬ扉を開くパスワード  
耳打ちの仕掛けに梅がパツと咲く  
ギザギザの胸にも咲いた寒ボタン

出雲市 小豆澤 歌子

両手から虚しく飛んだ白い鳩  
輪の中で丸く泳いでいる世界  
気がかりな紙風船を追っている  
四季の風ゆらりゆらりと乗る世界  
縁側の椅子が楽しい話聞く

出雲市 小玉 満江

雪が降るじよんがら節の撥汗える  
雷のような音して雪崩れ  
年金は親子を救う助け神  
指笛を鳴らしてポチを呼びもどす  
指摘され初めて気づく思い込み

出雲市 多々納 テル子

五十年調子とつてるヤジロベ  
前向きに生きているから今が旬  
和やかに話術のうまい嘘ひとつ  
好きなこといろいろやってマイペース  
年金が無理をしているお年玉

出雲市 富田 蘭水

神よりも己の柱しつかりと  
丙戌じっくり読んでる般若経  
愛ひとつ今年のめあていそがずに  
寒水仙応援しきり二次試験  
七草のおかゆ万病よせつけぬ

出雲市 小白金 房子

節くれた指芸術の技を編む  
めらめらとわたしの過去を灰にする  
春雪に耐えるポストの赤い服(二月五日大雪)  
真心を映す鏡を拭いている  
母の忌へははの形見へ手を通す

出雲市 持田 多輝子

シナリオのない人生の明と暗  
子約した豊かな老後おほかぬ  
プライドと見栄の交差が透けてみえ  
真実は一つ中味がキナクさい  
前向きに何があろうと乗り越える

出雲市 佐藤 治代

思い切り笑いひっくり返るへそ  
辛い日は踊る阿ほうになり笑う  
テレビ見て笑う淋しい時間帯  
腹の立つ事は忘れて良く笑う  
いいじゃない金は無くとも笑おうよ

出雲市 石倉 芙佐子

能面にならないようにドレミファソ  
般若の面笑いごっこで外れそう  
さらさらと筆を走らす夢の中  
つつばった肩に霰が弾かれる  
上弦も下弦も絵になる春の月

出雲市 森 茂美

疲れたらこの指止まれ赤とんぼ  
失業の家族の旅はまだ続く  
桂林の旅に拾った淡い恋  
ふるさとの棚田が哭いている日暮れ  
さまざまな道を歩いた足の裏

島根県 伊藤 寿美

作務衣着た和尚にもらう仏掌薯  
黄昏の食卓に挿す二輪草  
踊り疲れた娘の靴が脱いである  
二世帯同居長い廊下の先のドア  
訪問着の下はババシャツ ホツカイロ

岡山市 井上 柳五郎

名鐘の音テレビしか除夜の鐘  
四世代がやがや揃うお正月  
今年卒寿妻と二人の初詣で  
厳寒に銃執りし日北満を  
夜長にも宵から老父早寝する

倉敷市 井上 富子

低音の軽いお世辞に操られ  
口説き上手にほろりと落ちたイヤリング  
まめまめしい襷に惚れた若旦那  
独身主義もてない奴の言う台詞  
持っている奴ほど渋い銭離れ

倉敷市 撰 喜子

童顔の残る顔にも薄い髭  
明治の風受けた母には逆らえぬ  
乱暴なことばの裏にあつた愛  
味噌作り究極の味豆植える  
実つても頭たれない稲もある

真庭市 福岡 智恵子

古希を過ぎ半分出来て良しとする  
豪雪のふるさと安否訪う娘  
雪景色ロマンなど無い炬燵もり  
シルバーの仲間入りした餅貰い  
労られて嬉し侘しい独り部屋

真庭市 国 米 きくゑ

初笑い誘いこまれる友の文  
燃える想い指にたくして手話の恋  
約束を破り冷たい風といふ  
人間は汗して心光りだす  
枯葉ひらひら新芽にあとは託して

美作市 大石 あすなろ

戌年も日々好日であるように  
絵手紙で初春のこころを届けます  
スーパリーの棚に並んだ多国籍  
鍋ものがつづく雪まだ降りつづく  
メールからメールへ噂とんで行く

美作市 福原悦子

逃げ腰を叱ってくれる影法師  
コッペパン祖母は戦後を語りつぐ  
父の意地白いハンカチしか持たぬ  
我が余生年金の軽さ身に沁みる  
知恵袋主婦の土壇場光らせる

美作市 小林妻子

寝ていても年金間違ひなく貰う  
降り続く雪へみいんな失業者  
どうでもがつくいい人になっている  
百までも生きる心配しています  
年末も正月も埋めてしまった雪の白

美作市 山本玉恵

花よりも白く妙なる若尼僧  
年新た言う事も無い自然体  
ゆつたりと苦を飲みこんで居る母で  
女とや火種ひとつがまだ消せぬ  
爪先と大地の心解け合うて

宇部市 平田実男

棚ボタが続いて恐い自己過信  
禁酒禁煙でしぼんで来たファイブ  
IQは低いが選挙には強い  
隣の子叱つて妻に叱られた  
直筆の賀状心も顔も見え

竹原市 森井菁居

失敗に気落ちしてよし凡夫なら  
福を呼ぶ人と知りあい春近し  
厄日とや異性に声をかけ難し  
少しだけ信じて精力剤を買う  
ガンの友見舞い言葉が見当たらぬ

竹原市 時広一路

禁酒禁煙片方だけにしておこう  
冷凍庫一杯にして一人住む  
虫歯が縁切りたがらない七十九  
正座などんでもないと僕の膝  
さあてさて男一人の台所

竹原市 正畑半覚

家族とはいいいものだなあ春が来る

親子三人見とれてました春の海

こんなにも美しかったのだこの世

見る眼ある男やさしい妻をもつ

妻のいるかぎり輝くばくである

竹原市 岩本笑子

忘れないでと真冬の雪は降る

豆餅をゆっくり焼いて昼にする

しんしんと夜明け誰かが通る音

太陽は真上にあつて少し春

氷雨降る寒行僧はまだ若い

竹原市 石原淑子

脳に活凍て付く朝の深呼吸

オニハソト心の鬼に豆を撒く

ケータイを大きな文字にかえて来た

孫二歳ママをつぶさに観て真似る

軟弱な男育てた母の罪

東広島市 福島万年

良寛の詩口ずさむ良夜かな

急襲に赤い唇アツと咲く

道草もたんとさせた通学路

要塞のような学校メダカの子

自分史の友を見直す我を見直す

## 大会柳川悼追幹主史呂比泉 (77周年ふあうすと川柳大会)

日時 18年4月2日(日) 午前11時 開場  
場所 兵庫県民会館 9階ホール TEL 078-321-2131  
神戸市中央区下山手通り4-16-3

・JR元町・阪神元町駅より北へ徒歩7分  
・地下鉄県庁前駅東1・2出口よりスグ

宿題	「並ぶ」	ふあうすと川柳社(西宮)	大熊純三選
	「光」	ふあうすと川柳社(神戸)	田中節子選
	「転ぶ」	ふあうすと川柳社(倉敷)	三宅能婦子選
	「草」	ふあうすと川柳社(高松)	鳴村幸選
	「曲がる」	ふあうすと川柳社(佐渡)	若林柳一選
	「癖」	時の川柳社(神戸)	平山繁夫選
	「喜ぶ」	ふあうすと川柳社(神戸)	赤井花城選

席題 なし・欠席投句拝辞  
出句締切 12時(各題2句)  
会費 2000円(記念品・発表誌呈)昼食は各自でお済ませ下さい。  
偈ぶ会 5000円 大会終了後、同会館内にて。当日受付



# 自選集

玉置 重人

土橋 螢

余裕綽々ジョーカーがふところ

聴診器長いつきあいしています

頑な心に闇が深くなる

大根がぐつぐつ煮えている冬日

表紙絵のやさしい犬に癒される

恒松 町紅

盆栽の梅が咲いたら春が来る  
五七五練って熟して珍糞漢  
行くひとも待つ人もあり春がくる  
三人産めば少子化にならないに  
過去未来その真ん中で徒爾を踏む

西出 楓 楽

お隣の犬は吠えない良し悪し

丁寧な結ぶ性格親ゆずり

その後が味気なくなる愚痴話

天井を見つめ世相を嘆いている

不器用な嘘は苦手と口を閉じ

遠山 可住

知恵袋鮎をいっぱい詰めておく  
腹いせにファウルばかりを打っている  
時計屋の時計にはない二十五時  
満腹で敵と味方を間違える  
過去形で話す油断してしまう

仁部 四郎

ふる里の水飲んでます中の上

とても効く薬だ怖い副作用

財産があるお見舞の足になり

白菜がブルブル並ぶ雪の中

拾うて来た犬に家族の縁が出来

スーパードで扱うほどの税に生き  
納税のための日掛けに励まされ  
凧揚げの講師料から所得税  
孫ほどの税務署長の御講演  
老人会税の標語も唱和する

波多野 五楽庵

一筆啓上 腰の湿布がにおい出す  
月齢を数え続ける不眠症  
目を閉じて敗者復活戦を待つ  
柀目から一つはみ出す人の運  
吹雪かれて胡弓の音か風の音か

芳地 狸村

素うどんの鉢がならんだ楽屋裏  
人情のある酒はじわじわ効いてくる  
じわじわと効いてきました母の灸  
あじさいが雨のしずくに映えている  
街道の昔をしのぶ道しるべ

宮口 笛生

お元日めでたく幸な朝迎え  
御馳走がずらり正月うまい酒  
朝からの酒がおいしいお元日  
八十歳ぐらいに俺は負けないぞ  
頑張ろう米寿で逝った父までを

宮西 弥生

よく咲る花から早く売れていく  
いい予感こぼさぬうちの時刻表  
いい風が吹いて芽生えに水をやる  
無駄遣いこれもほっこり冬の底  
譲られた座席半分ずつ座る

森下 愛論

手の届く卒寿に無駄な日を重ね  
年豆を数えてひとり老いの背な  
老いの坂登りつめれば孤独感  
欲の虫まだ残つてるエネルギー  
正月の匂いばら撒く街の彩

八木 千代

初明かりひとりふたりと現れて  
門灯にもっと威厳を持たせよう  
少し軽薄な厨のシャンデリア  
我が家ではいちばん重いトイレの灯  
茶の間の灯 北は恐怖の雪が積む

八十田 洞庵

オンブズマン渦の深さを許せない  
待ちぼうけ自嘲の背を笑われる  
事もなげに子は去るはるか二万キロ  
老いなどと嘆かず生きん天寿待つ  
反骨の血父ゆずりかも冬木立

両川 洋々

ああ拉致へ神も無力を思い知り  
裏金のおいに油断召されるな  
行政もわたしも目指すスリム化だ  
生国はどこかと肉に聞いて食う  
捨て石になれる私を褒めてやり

阿萬萬的

自信過剰つい足下が軋む音  
あんな歳考えなさいと妻の愚痴  
僕も歳おんなじことをまた喋る  
実力差素直になれる歳になり  
雑魚なりに明日の絵を描く筆を選ぶ

石川 侃流洞

サザエさんに似た嫁がいるいい空気が  
平和とはこれだパンザイをした御来光  
御神酒を焼酎にして様ならず  
酒やめたやめたと酒を恋しがり  
米寿だつて上座まだいる老人会

板尾 岳人

梅の香に大阪城は機嫌よし  
梅香る宮に頭脳が集う絵馬  
学問の神へ賽銭少なすぎ  
哲学の道もそろそろ身構える  
待ち給えサクラはすでに旅支度

奥田 みつ子

冬晴れに逝きし人追う鳥の声  
亡くなって君はわたしの思うまま  
てのひらに風花受けて子に還る  
明日こそ明日こそはと今日も暮れ  
ひとり住む庭に水仙香りたつ

河井庸佑

かたくなに口を閉ざした深い訳  
切り換えの利かぬ頭と自己嫌悪  
逆境もプラス志向で耐えている  
善悪のけじめは確と子に教え  
約款を眼鏡掛け替え読んでいる

川島 諷云児

体調の都合で神と手を結ぶ  
貧しいがワイシャツだけは白を着る  
子供らと別居パズルを組み替える  
授かった命大事に生き抜こう  
うちの子がまさかの中にいるまさか

木村 あきら

啓蟄で地球全てが動きだす  
碧空へ世界平和の鳩が舞う  
無事だろか案じてくれる母が居る  
白寿への険しい道へ杖を曳く  
無防備に過ぎてませんか自動ドア

小島 蘭幸

東京タワー負け犬ばかり見て来たか  
幸福になろうと犬を飼っている  
昼の酒淋しい顔は見せまいぞ  
エアポートホテルよ昼の酒旨し  
ウエディングベルが聞こえる昼の酒

小西雄々

新家完司

如月へ変わって欲しい娑婆の風

釈迦の掌の中で悟ってきた命

土愛す父は夜寒へ独り言

不死鳥を真似して呼吸してみたい

祈る訳聞けばベツトが病んでいる

小林由多香

引くことを知らぬ若さがケガもする

せめて夢ぐらいはでかく描いてみる

近親の訃へ久しぶり喪服着る

犬さんの美容室まで混んでいる

飲んで寝てまた飲んで寝るお正月

斉藤 姦

ふるさとの風は驕ってなどおらぬ

どん底も薔薇色も見たなあ眼鏡

胡蝶蘭少しきどつていませんか

凶鑑には雑草という草はない

清純さ演じ続ける冬苺

塩満 敏

パソコンを使いこなした夢を見る

入院の妻から指令くる朝よ

孫娘看護師になりたい夢語る

柳友に路郎師の本役に立ち

日本人の横綱その内出るだろう

十二月八日躓くこと多し

すぐ醒める鼻水が出る安い酒

資本主義も共産主義もつまらない

百万遍お経を咀嚼する牛よ

ごく稀にたすけてくれる神仏

田中正坊

十一年復興成つた有馬の湯

元湯から湯気立てている流れ

金の湯は熱く銀の湯ぬるい目に

太閤の栄華をしのぶ湯殿館

父老いて娘優しくしてくれる

## 大会 予告

『川柳塔』九五〇号記念誌上川柳大会

締め切り 4月25日 (7月号発表)

日川協岩手大会 6月11日(日)

花巻温泉ホテル千秋閣

第12回川柳塔まつり 10月8日(日)

アウイーナ大阪

国民文化祭山口大会 11月4日(土)

萩市 民館

# 水煙抄

板尾岳人選

和歌山市 田中すず

不器用に生きて哀しみ溜める指

急斜面挑戦状がおいてある

中心線を外れてからの物語

風は無色で生きよ生きよと吹いてくる

神さまの計らいだろうまた転び

翔んでいます愛されてます軽い靴

大阪市 森田明子

亡き母の庭にあふれる水仙花

再生の狼煙天指す枝の先

梅便り来て冬眠の穴を出る

自画像のゴッホに熱く見つめられ

還暦を待ちきれなくて赤を着る

干し竿で肩いからせるワンピース

和歌山市 柏原夕胡

一合を炊いてたつぷり寝正月

一冊の本に鱗を剥がされる

ティッシュペーパー一枚ほどの恋捨てる

やわらかく恋に墮ちたら泣くだろう

目玉焼きひとつで朝が満ち足りる

ほとほりが醒めて芽吹いてくるころ

恋をした数だけ羽根の色を持つ

モノクロの写真焦りのない笑顔

同じ酒呑んで浮く人沈む人

体力に自信ありそな怠け者

年ごとに涙にとける父の壁

流れゆく雲 父の声母の声

救急車去って野次馬巢に戻る

一坪の庭に欲張る四季の花

兄嫁の背に姑を括り付け

通院へ長引く道の水溜まり

悪友の櫛に目覚める迷い道

ただ一羽はぐれる鴨の片思い

倉吉市 前田三津子

羽曳野市 森下一知

北九州市 岡田幸生

生きてゆく重荷夫婦で担ぎあう  
底抜けに明るい妻という救い  
相談を受けてロダンの像になる  
追い風に乗って忘れていた初心  
耐少し飲んで老躯の潤滑油

唐津市 岩崎 實

お芽出度う揃ってどつとすぐ帰り  
食べて飲み過ぐるが早き松の内  
洪水の車ガンリン大丈夫

着海展どつぶりつかる筆の跡  
麦の芽を押さえて田んぼゆきもどり

東かがわ市 赤澤貞月

空元氣しつべ返しを膝で受け  
肥満度が好物前に我慢さす  
自分史を思い出させる月が冴え  
地藏さん近頃子供見ましたか  
亡妻を追ってザンゲの冬遍路

大洲市 花岡順子

旦那様は空気になったマイホーム  
レールから逸れる自由を持つている  
ハードルを越える努力を怠らぬ  
噛みついた犬の鎖を外せない  
夢だけは持とうよ春は近いもの

今治市 塩路 よしみ

花道でスポット浴びた夢を見る  
完全燃烧無償の愛をくれた亡母  
人許し握手の風が心地よい  
善人の素顔が欲しく写経する  
猜疑心抱いて鏡の不透明

今治市 渡邊 伊津志

見抜かれた嘘へ視線がよく逃げる  
目がとまり息が食い入る一行詩  
みちのくの風が恋しいコケシの目  
目が冴えて影が私を追いかける  
新緑を目薬にする露天風呂

香南市 桑名孝雄

情報交換さえも途絶えた冬ごもり  
一昼夜西部劇観て鬱退治  
マンネリの打開大奥ごっこでも  
ファイティングポーズとれないので降りる  
ボク達も市民だらうかへび蛙 (三月から市制)

高知県 百田 幸

上り降りよいしよがいつかどっこいしよ  
お互いの色に染まった共白髪  
墓に花供えるだけの恩返し  
子と父母を背負って歩く重い靴  
真つ直ぐに歩いて悔いのない余生

札幌市 三浦 強 一

パレットに新たな夢の色を溶く  
デバ地下で七草粥のセット買う  
おふくろの味妻よりもデバ地下で  
異星人今日も電車で二三人  
訥弁も一筆箋とうまが合い

茨城県 葛 西 清

古希二人譲り合わない仲の良さ  
裏かいたつもりのおとが高く付く  
鍋の中に煮え切らぬ顔の二つ三つ  
湯豆腐じゃ釣り合わないが断れず  
父親の歳になったという閑所

日立市 加藤 権 悟

瑞祥の酒に夫婦のおめでと  
再会は心におしゃれして出掛け  
無冠だが大地ふんばる年おとこ  
着ぶくれの夫婦恋しい花日より  
きれいだがきつと野心のないさくら

草加市 飯土井 健 翁

まだ余力本に刺激を受けて夢  
一合で疲れを癒す夕餉時  
陽当りが良くて灯油の値を知らず  
背伸びせず分相應の老いの日々  
凜として生きれば病など寄せず

柏市 河野 桃 葉

バス停の隅にかわいい忘れもの  
本箱の不法駐車がやかましい  
絵手紙の土の匂いに気をもらう  
変声期素直になれぬ喉仏  
アルバムの剥した跡に嫉妬する

昭島市 野 口 忠

若しかして今の私は再生紙  
磨り減った包丁の刃に愛がある  
この歳になればアクセルそつと踏む  
削除キー神が押すなら諦める  
冗談を本気に取られ隙間風

東京都 長谷川 康 子

花柄のジャケット出して春を待つ  
年の瀬に来年分も積る雪  
子らの餅少し大きく切っておく  
母さんはきんとうが好きお元日  
玄関も居間も余所行き三が日

東京都 井 上 つよし

初詣で今年はボチも連れて行き  
正月がお目出度過ぎた血糖値  
賞味期限を伸ばす積りの試着室  
シュレッダーに去年をかけてしまいたい  
冬晴れが続き豪雪嘘のよう

横浜市 金森徳三

戦前派クリスマスより誕生日

カタカナの四股名出来そう大相撲

歌に酔いお酒に酔って除夜の鐘

野暮なこと言うな正月休肝日

ありがとう夢を見させてくれたクジ

横浜市 中尾哲代

お賽銭はずんでいます高望み

娘が嫁ぎピアノの上に雑誌積む

子の笑顔夫婦げんかが救われる

よっこらしよ干した布団に倒れ込む

釘の音殆んど聞かず家が建つ

横浜市 長島亜希子

変わりばえない古家も煤払い

メサイヤを聴いて私のクリスマス

夕映えの富士が仲直りをさせる

三度の飯だけ楽しみに生きてます

末吉に希望が湧いた初詣で

横浜市 川島良子

流行もひとつ取り入れ春うらら

無口だが存在感のあるお方

常識の一から教え直さねば

神さまが賽銭箱を覗いてる

表情はすべて絵になる孫を抱く

佐渡市 高野不二

年賀状だけのつき合い十五年

散髪の値上げ分だけ日をのぼし

暗証をかえると忘れるから困る

煙草皆止めたら国が困るだろ

十年は生きる気国債申込む

可児市 鶴留百合

孫が去り静けさ戻る冷蔵庫

寒波にも容赦をしない灯油高

今年また愛という字で飾りたい

事件事故人間なんて脆いもの

寒風に震えて残る木守柿

静岡市 中西雅

茶柱の立った朝食感謝の日

成人式借りた晴着のくらべっこ

京菓子の色どり形も味のうち

野仏の手編みの帽子春の笑み

エプロンの白さが亡母のお洒落です

浜松市 杉浦恵夢

星空に消える靴音冬の窓

凍える夜ふたりの嘘も透きとおる

白い衾わたしを好きになるために

やましさはそつと寝かせる無洗米

わたしたちおいしい空気みたい仲

犬山市 金子 美千代

初春や軌道修正繰り返す

コロコロと笑い女の小正月

アンコール予定に入れていたタクト

荒れ狂い手がつけれぬ雪女

花マルを付けて浮き立つカレンダー

愛知県 三浦 きぬ

押し入れは開けまい物が踊り出る

ほどほどに降るなら旨い雪見酒

野良猫に見送り出迎えされる幸

欠点は遺伝ですよと言いのがれ

七草の粥は四草でがまんする

愛知県 八木 百合子

母だけが出せるこの味煮ころがし

焦るなど急ぐハンドルを叱りつけ

身の丈に合った歩幅でマイペース

子の気持ち掴み損ねて遠く住み

ガラクタの中の思い出捨て切れず

京都市 榊 本宏子

姉わたし同じ味付筑前煮

心の奥覗けぬままの聴診器

初産のよろこびも増す母子手帳

二〇〇六年何を埋めようダイアリー

携帯に役目譲ったメモ手帳

大阪市 平嶋 美智子

七坂を越え軽やかに靴を履く

良い出会いスキップしたくなりました

この歳で今がチャンスと言われても

恥をかき合える仲間のあたたかさ

磨いても光らぬ玉の重きこと

大阪市 伏見 雅明

邪魔ものを切り捨てにする多数決

ままごとで遊んだ娘二児の母

特賞を狙いティッシュを持ち帰る

眼鏡かけ掘り出し狙う松の内

税務署がお邪魔しますとやって来る

大阪市 中井 萌

カニ鍋に旨いと言ったきり無言

赤いバラ見よとばかりに凜と咲く

大鍋が昔を語る里帰り

波風の立たぬ時ほど身構える

手を焼いた子も父親の顔になり

大阪市 吉田 富美

今日の歩もまた軽々と梅の朝

道ばたに踏まれふまれて名なし草

幸せが来たぞたんぽぽ道に咲く

手ばなさぬ杖が一緒に笑ってる

こんにやくの針千本に梅ひらく

大阪市 升成 好

休肝日書くだけはかくカレンダー  
今日はよく笑ったなあともたわらう  
魂胆があつて女房にバラを買う  
冗談が過ぎると誰も笑わない  
最初はグー相手の癖を知っている

大阪市 尾崎 黄紅

負け犬と思いたくない負け犬だ  
本箱のきれいに昭和消しました  
大正のバカだと言われそうな句だ  
恥ひとつひとつ重ねて歳重ね  
責任のないのは天気予報です

大阪市 三浦 千津子

散る日まで煌めくものを追い続け  
偶然とは言えない神の好意かも  
虚と実の狭間で憂えている心  
優しさが尖る心の底にふれ  
世の乱れ少し汚れて来る眼鏡

大阪市 吉内 福世

(タカ子改め)

千両の零れ種まで赤い春  
役がとれ身も軽々と喜寿の春  
飼い放す犬と並んで宝掘る  
輪の中で答を言わせ丸く行く  
まだ喜寿へこぼれる夢を追って花

大阪市 平井 露芳

便秘症先ずは土産に買いたいも  
脳からの司令良いのが届かない  
ウイーンからワルツで初春が飛んでくる  
大阪も空気うまいで三が日  
ひげ剃らず出かける先は散髪屋

大阪市 福岡 末吉

余所ごとを穿つのあまり立つ窮地  
独楽あそび空気和らぐ路地に舞う  
愛用の文箱に亡母は甦る  
育ちゆく子等を重ねる我が節目  
転寝の振りしてかわす妻の愚痴

池田市 多田 契子

ひたすらにシコリ消すかの雪の舞  
杵音の消えて久しい十二月  
歳月をほめると私消えている  
ボンジュールお屠蘇にワインお目出とう  
大吉でも良くないし気にしない凶

池田市 北出 北朗

物干しへ初日が届く兔小屋  
アスファルト割る大根の土根性  
寒鳥飢餓の絵柄の中で鳴く  
南天にオメメ貰った雪うさぎ  
子狐の親はレディーの首を締め

池田市 上嶋幸雀

煩惱を抱えたままの除夜の鐘

元日の日記今年も今年こそ

生きているただそれだけの年賀状

カラフルな妻のおせちに迷い箸

新しい手帳に初春の一行詩

泉佐野市 稲葉洋

誰それが入院したと地獄耳

どうってことない話して春の午後

筒抜けの話小声の要もなし

釣り果ゼロ家康流で潮を待つ

謎一つまだ晩年の好奇心

岸和田市 坂口英雄

この国も総理みんなを選びたい

医者に行く人より健康先に逝く

小雪ちらちら子供喜ぶ街の雪

一年の計立てても根気続かない

寝る前に今幸せか考える

岸和田市 堤 植代

死ぬるまでプラス志向で生きてゆこ

一粒も残さなかった頃あった

思い切り鈴を鳴らして初詣で

言いたいこと一ぱいあるがのんでおく

もう節分テレビは走るコマーシャル

岸和田市 池田岩夫

プロポーズ最後の関はお父さん  
バブル時の目当てはずれて長い冬  
木簡に古きロマンの匂い嗅ぐ  
命令をするもされるも嫌な人  
嫌がった見合結婚吉と出る

堺市 荻野像山

賑やかな妻いて子いて犬がいる

西向くと尻尾都合で上を向く

今日もまた犬の遠吠え聞く暖簾

気前よく偽装設計にも支援

七福神なみに笑って福を寄せ

堺市 大久保伸子

お雛様娘と同じお歳召す

春の川動くともなく流れてる

後ろには夢がないからふりむかぬ

牙むいて地球が怒りはじめたぞ

歳月は去りゆくものか積むものか

吹田市 早泉早人

寂しくて自慢話が多くなる

白銀に己の邪心捨てて来る

路地裏に癒し求めてひとり酒

春近し背筋だんだん伸びてくる

今日もまた日めくり読んで気を入れる

高槻市 佐 甲 昭 二

神様に見捨てられたかけつまずく  
ダイエツト足りぬと小突く影法師  
泣き笑いひしめき合っているポスト  
明日の夢描く余白を空けておく  
二番手で焦らず出番待っている

寝屋川市 北田 ただよし

地殻が震えてるまだ続く戦  
サトウキビざわわざわと反戦歌  
戦場なら火星貸します無担保で  
カンパネラ見届けるだろこの地球  
アトムつてどこへ行ったか知らないか

寝屋川市 森 田 麗

いつからかおふくろと呼び親離れ  
まだ凝りぬ反省してもくじを買う  
神仏の加護に頼っているばかり  
肩の荷が少し軽くて空を見る  
飴七分鞭三分で育てあげ

寝屋川市 岡 本 勲

いっぱいが命とりですコップ酒  
線香花火の今どのあたりこの命  
みてたのに見えてなかった穴に落ち  
出てつてもいいんですねと揺れている  
真つ直ぐに生きて斜めにトゲ刺さる

羽曳野市 吉 村 久仁雄

元旦に胸の電池を入れ換える  
五百羅漢ながめて僕がいる安堵  
遅咲きの花へたつぷり水をやる  
長所だけ見詰め仲良し夫婦です  
善人の杵はめられてから酔えず

枚方市 小 川 良 吉

御仏を信じ味方の今朝の汁  
老いたりて頼りの味方電子辞書  
味方ばかりでなかったな永田町  
老いたりてドジを笑える豊かさよ  
寒の庭ひよどりみかんねだり鳴く

枚方市 二 宮 紫 鳳

一枚の賀状ですます交際費  
おしゃべりな孫が取りもつ夫婦仲  
三が日忠実すぎる体重計  
孫帰り風船一つ部屋の隅  
一枚の賀状に友の笑顔かな

枚方市 伊 達 郁 夫

冬を着た芝生命を休ませる  
甘言を丸呑みにして下痢をする  
人工と自然が葛藤する地球  
プラン立てそのまま止まっている時計  
ほんわかと生きてほんわか夢を見る

栄転を見送る村の名残り雪

八尾市 田中トシエ

うまいこと言い過ぎ蓋がしまらない  
ハガキから飛び出しそうな千支の戌  
迷いなどなさそうに絵馬かけに行く  
大袈裟に言って気にしているお世辞

八尾市 脇俊子

風紋が今年をさらひ弾み出す

美味しいと話せる人と生きる術

大風呂敷広げてみても面白い

さらけ出す生身になるとよく笑う

願望を求めて歩くチビた靴

八尾市 松葉君江

美しい昔の心見直そう

ネット化にコミュニケーション退化する

たまに来る野鳥心の栄養に

勘違い笑ってすます喜寿米寿

土壇場で父の度胸が物を言う

八尾市 田邊浩三

大吉は財布の中で何年も

微熱出て氷枕の地球です

筋いいと調子に乗った老いの趣味

聞き役が補聴器はずし一休み

すれ違う軽い会釈が解けぬ謎

びったりと煙草を止めてから変だ

勘違い本音は笑みの裏にある

びったりですよ旨い嘘つく試着室

こう変わるものかと思う無垢の雪

ポーカフェイス度胸を秘めているカラス

八尾市 寺川はじむ

冬將軍おじぎしている竹の雪

餅箱も年季の入った明治作

センス好い一句が添えてある賀状

お洒落して行くあてもなし鏡拭く

初春の空へ大きく描く夢

大阪府 畑中節子

丸裸名前だけしかない名刺

紙風船生きてるように丸くなり

寄せ鍋の具におしゃべりも入れてある

雛あられ三人官女もつまみ食い

天災を自己責任という不思議

大阪府 神野千恵子

美しく神々しくも雪が降る

春秋の季節短くなる地球

秒針を刻む如くに陽が落ちる

耳鳴りがしているボタン押さなけりや

少しだけ晒してみたい嫉妬心

神戸市 山田婦美子

尼崎市 河津 正治

頷いて極楽を聞く辻説法  
メルヘンの夢も世相が拭い去り  
ふらり来てまたもや揺らす恋心  
極楽に遠く地獄の闇ぎあい  
古鏡心許して向かい合う

三田市 堀 正和

落葉舞うロゼワインでも飲みますか  
食べる飲む寝る順調に歳をとる  
充電と言うが単なる冬眠だ  
書くほどの事は無いけど書く日記  
ジョーカーを掴んだ顔で黙秘権

三田市 阪本 藤朗

包装紙きれいに剥がしほっとする  
チーンした仲間詰まったお弁当  
元旦に仕立直した計を立て  
書くうちに草書へ変わる年賀状  
足の爪近くて遠い距離になり

三田市 辻 開子

戌年は気合いを入れて走りたい  
願い事老いを狂わす年のせい  
新年が過ぎて二人でする朝寝  
封を切る鼓動が聞こえ手も震い  
定年後飲んで遊んで過ごす時

兵庫県 安達 厚

一つして一つ忘れて傘寿です  
おお傘寿よくここまでと思う春  
八十路かと思えば四股をふんでみる  
満たされて師走の雨に絵筆とる  
終章はありがとうでくくりたい

奈良市 矢野 良一

抽選会無欲が諭吉引き当てる  
やっぱり親子うしろ姿は瓜二つ  
霧笛の音がせつなく胸を揺する夜  
満天の星ロマンチックにさせる夜  
莊厳な読経に心癒される

奈良市 乾 春雄

褒められてうきうき秘密喋り出す  
散る花を笑う造花のうす汚れ  
無記名になると本音目白おし  
夕焼けを明日の土産に帰る道  
反逆の影絵がゆらり揺れている

奈良市 尾畑 なを江

命がけそんな恋など出来ないわ  
原点に戻れば今度魔女になる  
近頃は仲人必要ないらしい  
日に一度位は自分ほめている  
このごろは捻子を巻いても動けない

檀原市 藤 永 実千代

合併の銀行名に舌もつれ

大笑い出来て夫がいる暮らし

脇役に徹す役者の底力

鉄骨の細さに夢も汗も消え

ふるりの景色唱歌の中となり

和歌山市 土 屋 起世子

浮かれ旅屋根の豪雪見て恥じる

踏んばって町の電柱天へ伸び

お日様を布団たたきで詰めている

平凡に一日暮れて茶の間の灯

母からの遺伝で私遊び下手

和歌山市 たむら あきこ

名を残すなんていずればみんな風

永遠がないから今日の空が澄む

大きな木黙っていても鳥が来る

ぬかるんでいる歩いてもあるいても

さて恋かどうかゆつくり思案する

和歌山市 山 田 侃 太

塩焼きへ岩魚は雪を見て想う

時刻表燃やした跡の失恋路

関東煮炊けば家族のコクが出る

呑むほどにヒト科が好きになつていく

炊飯のキーなら押せるババの位置

和歌山県 村 中 悦 男

さい銭が幅跳びをする初詣で

どの犬も利口に見える年賀状

隣から梅一輪が伸びて咲く

失せものが不用になつて顔を出し

妥協した理由を自分に言いきかす

和歌山県 辻 内 次 根

幸せは朝の布団の中にいる

空調になつて無くなる思いやり

飛行機は買えないけれど軽を買う

空想でまだまだ空を飛んでいる

銘柄は問わぬうれしい酒の酔い

和歌山県 木 村 徑 子

人生がまた煌めいて供は辞書

入り浸る友天敵になる兆し

グブアップしない私にある美学

大惨事神も密かにご心痛

正解のない人生を辞書に問う

鳥取市 横 田 春 名

呑み込んだ言葉おでんに煮込もうか

自画自賛老いの糧よと笑顔でる

途中下車してもいいよと慰める

ひさびさの和服に帯が結べない

遠い道共に歩いた金婚日

鳥取市 山岡 紀子

若い風もらうパートが楽しくて  
五つほど鯖を読んでるアンケート  
君と見る赤い夕陽も久し振り  
ブランドのウインドシヨップ久し振り  
ドカ雪に師走の風もあわててる

雲南市 武 島 ちよえ

贈物縁起担いだ蝶結び

寄せ鍋のように仲間が寄る我が家  
医者信じ今狙の鯉になる

南天の赤に迷うたぼたん雪  
逃げ足の早い月です追いかける

倉吉市 酒 井 芙美子

絶食までしたが減量効果なし  
おさい銭はずんだけれど効果なし  
意志曲げぬ頑固通用させている  
調子良い曲が流れてうかれ出す  
笑うこと少なくなつて老い進む

鳥取県 橋 谷 静 江

犬は犬主人と距離をおく羨  
吠え方で主人の帰りが知らず犬  
少しでも機嫌良くなる酒もある  
三合の酒で仏になる夫  
前向きに体力保つ日を決める

鳥取県 大森 孝恵

子は新車親父はペダル踏み出社  
一人息子に笑い上戸の嫁迎え  
コーヒーの香りに乗って飛ぶ噂  
韋駄天で転がり込んで来た寒波  
満点でないから友が寄ってくる

鳥取県 岩 崎 和 子

カタログが次から次と初商戦  
寒い日の洗濯物の返し干し  
猿同士日向に寄って音も無い  
糸通し助けられてはカバー縫う  
癒されてモーツァルトで夢結ぶ

鳥取県 飯 野 菖 子

雨続き大根の芽が背伸びした  
気遣いは大根だつて知っている  
大根もやっぱり季節覚えてた  
人生は未知があるから生きられる  
どんどんと前ばかり見て気にしない

鳥取県 大田 勝 誉

愛されるだけで終れば唯の人  
愛情も度を越し過ぎて冷めている  
波風を立てぬ我が家が家訓なり  
雑念に練るだけ練って後ずさり  
じんわりと知恵を絞つた達成感

松江市 松浦 登志子

真庭市 矢谷 富士野

初恋を同窓会でものにする

ボンボンと言うこの口がよく遊ぶ

凍みさせて干して大根格を上げ

青空も星空も見た夢の中

風邪ひいて転んで私冷凍魚

出雲市 川島 和歌子

健康法聴いてうなずきすぐ忘れ

雑念を捨てて積木に夢たくす

意地を張り反抗らしい閉じた口

ほどほどの倅せもらい生きている

閉じていた胸のしこりが解け始め

雲南市 菅田 かつ子

スタートへ弾みで暦走り出し

翔びたいと思った頃が懐かしい

美容院出ると寄り道したくなり

携帯へお出で甘酒できている

嫁さんの使い上手に乗っている

安来市 原 煩惱児

夢は夢今日の日銭は地下足袋で

米若も虎造も出る父の風呂

戦いが地下へ潜って行く怖さ

年金で二人暮しの茶がうまい

市になつてもう過疎などと言うまいぞ

ひたすらに走るおだやか日のために

おだやかでないぞくらげが海被う

甘酒の温もり貰う初詣で

寝て一人起きて一人に来る賀状

呼ばれてもただでは行けぬ義理があり

宇部市 高山 清子

回り道した人らしい物わかり

言い訳になりそう真実ほんと言いそびれ

良い思案浮かばずじっと手を見つめ

彼の嘘だまされておく好きだから

身の程を知らぬ男のする誤算

府中市 藤岡 ヒデコ

三角を丸く納める言葉じり

上品でなくとも可愛いとしよりに

記憶とや自分の都合からませる

物忘れそんな私を否定する

しっかりとハートで生きる戌の年

府中市 馬場 利子

悔いること忘れなさいと昼の月

ひたむきに生きる明日へ春の音

幸せを咲かせる花を予約する

屋根を越すシャボン玉にもある冒険

ときめきを抱いてストレス捨てにゆく

シドニー 三谷 たん吉

高知県 近森 功

今年こそ戌年らしく吠えまくる  
戌年だ誰かまわずに噛みつくか  
英語でも大和魂むき出しに  
相談ですぐ決まるのは甚とゴルフ

シドニー 坂上 のり子

何あろうとこの地球より行き場なし  
人間のつぶやく声を聞く句集  
なれそめはどうあれ語るよき相手  
男前言うのは金の出しっぶり

メルボルン 藤原 ポン吉

好景気されど上がらぬ亭主株  
この国でうまいと言えぬ馬クジラ  
今年こそ五キロ痩せると妻吠える  
もち肌は褒め言葉にはならぬ妻

東かがわ市 向山 治 延

谷あいの落ちるしずくが大河なす  
野仏に供え物あり春彼岸  
春風にさそわれのぼす散歩道  
ダイエツトしているような夢二の絵

香川県 中塚 寿々女

青二才叱ってくれる人もなし  
青田刈り出来る企業は一部だけ  
出る杭も押さえて五年老いの職  
朝刊が静かに闇を通り抜け

覗かれているとも知らぬ影法師  
年金を振分けにするぼち袋  
歳なのかときめきのない心電図  
なぜなぜはママに聞けよと旨く逃げ

東京都 やまぐち 珠美

厳冬の師走人とや吹きさらす  
ティツシユ一枚落ちる程度のそら涙  
私はわたしそつばを保てない  
砕ければ許されますか波頭

東京都 笠原 のりこ

この人生いつかうつつやりしてみせる  
満ちて聞くどちらの心はねる音  
この昆布泳ぎすぎたかだしが出ず  
つらいときちよつとチャンネル変えてみる

国分寺市 野崎 勝

年の暮れ懐ほどでない寒さ  
マイカーの疵また妻のせいにする  
年始め意気込みだけは負けてない  
天国へ宇宙へ旅もカネ次第

横浜市 布山 嘉信

実感のない改革が歩き出す  
冬木立朝日に赤く頬を染め  
褒められる事なく続く趣味の道  
姉逝きて夜空の星の一つふえ

横浜市 巖田 かず枝

見ぬ振りも時に嬉しい思いやり

戌年の律義な母の割烹着

すみません大事にしたい言葉です

飼い主に似た寒がりの柴が居る

犬山市 吉田 幸子

お洒落したブーツが雪で臍をまげ

前向きに考えようとお茶を入れ

血液がドロドロキヤベツてんこ盛り

大雪が解けそう温い電話口

犬山市 関本 かつ子

ライブルがいてこそ脳の活性化

いい音で郵便受に年賀状

あいたくて抱きしめた母夢の中

ほうれん草三百円か食べんとこ

岐阜市 平野 あずま

古里の駅で仮面をとり替える

雑学を溜めて誰とも手を握る

宝くじ確率論を守らない

冬將軍長期予報を踏みにじる

高岡市 青井 はつえ

妻の座を奪われそんな犬の位置

ほっておく買いたいものを買う夫

救急車通れるように雪をかき

屋根雪を心配して腰の骨

京都市 三宅 満子

高台の良いお住居はきつい坂

田舎とは失礼なこと市になった

子供より犬が主役の年賀状

期限切れのパン雀にも分かるらし

大阪市 吉川 弘泰

老いの目にはつきり見えて困ってる(白内障手術)

老いの目がこれでゴルフが楽しみに

老いの目でデートするのに倍返し

老いの目がこれで人生バラ色に

大阪市 池上 清治

敲かれて一皮剥けて匂に命

呼ぶ声が届かぬ無念拉致家族

仏前に鉦を敲いて無事を謝す

米虫を洗って流す無洗米

大阪市 中村 忠敬

四十年耐えたついでだあと十年

寒い夜こたつがわりの猫と寝る

どうすればなれるの瘦せの大食いに

目薬をさせばなんだか泣けてくる

大阪市 寺井 弘子

利用価値出るまで囀うチルドレン

寒冷に梅桃桜春を呼ぶ

明日は晴れ沈む夕陽に背を押され

ニートの子一から育て直したい

泉津市 助川 和美

想定内以上にまずいカニ旅行  
愛してる言うてくれんとわからない

靖国へ議員やめても行きますか

怖いもの地震雷火事姉齒

泉佐野市 備後 三代子

ほんのりと紅ひき指の初鏡

病床の夫労わりのふぐ雑炊

極楽と首までつかるくすり風呂

いいんだよがんばらなくて休んだら

門真市 矢阪 英雄

前のめり唇切って鼻無傷

豪雪の情報紙面黒くなり

ピンク衣はピンチのムード安堵させ

停年で情報量が減少し

河内長野市 内海 綾乃

背を丸めひとかたまりで登校す

電線に鴉沢山ゴミわらう

一人ずまいロボットお帰りに言うてくれ

売りにしまい最終処分何回目

河内長野市 木太久 正一

年賀状安否気になる友があり

雪国の耐えねばならぬ老いの顔

一枚の葉書に心癒される

妻のグチうける心は愛ひとつ

岸和田市 中岡 香代

仕上げには心に花を咲かせます  
将来のオナーも今反抗期

ぶぶづけの奈良漬に酔う下戸の父

言い訳の夫と向き合う午前二時

堺市 羽田野 洋介

格好よく贈る言葉も通じない

信号を待つてるうちに気が変わり

曜日より運勢をみるカレンダー

神様も想定外の今年こそ

堺市 奥 時雄

ほらを吹く割に細かな世帯ぶり

何か役あてがいまつり上げておく

周りでは内気な僕と見てくれず

家事すれば感謝に続き小言聞く

吹田市 二宮 栄子

蛇口の湯受けて苦勞の亡母思う

水を買うやがて空気も買うだろう

一日を無口の日あり一人住む

古希の坂余生をのぞいて行く勇氣

高槻市 大崎 侑子

叩かれず育ち世間に叩かれる

親しげに背なを叩いた知らぬ人

一張羅洗濯札に気がつかず

負け試合帰宅して知る逆転打

高槻市 安田 忠子

味方だと思つてゐるのは自分だけ  
パソコンを味方につけて年賀状  
にっこりと声を掛ければ知らぬ人  
偶然に出会つた日から花ひらく

豊中市 源田 啓生

除夜の鐘奇禍の少女よ安らかに  
終生の澄まし雑煮も里の風  
千両も万両もある庭の隅  
バタバタと酉が逃げればどんな戌

富田林市 古田 千華

柔らかさうしかし心の爪を研ぎ  
語り口ソフトでいつも騙される  
福寿草約束どうり花をつけ  
モンゴルに振り回されて大相撲

寝屋川市 長濱 賢山

はんなりと流行の浴衣下駄の音  
いじめるな住みよい地球も限界だ  
世の中が狂えば天候まで狂い  
ダイヤより夫婦で生きた汗の価値

羽曳野市 永田 章司

群れている若者みんな淋しそう  
道草の味を奪つた登下校  
手と足が頭の指令受け付けず  
温暖化二十四季にも修正値

羽曳野市 仲谷 真一

百年後空から降るは黒い雪  
父掃除明日はきつと雪だろろう  
ほたる族年末寒波身にしみる  
四季咲きが年を重ねて枯尾花

羽曳野市 松本 静子

友よりのリング鬻つて歯も元氣  
石光寺寒のほたんも春もよい  
帰りたい古里いまは遠くなり  
チャレンジする気持ちはいつも持ちつづけ

東大阪市 大塚 サキ子

飲めぬのに勧め上手な友がいる  
口下手の私が好きな聞き上手  
立ち話行きも帰りも続いている  
雪化粧鉢の雨天愛らしい

藤井寺市 伊藤 アヤ子

年女今年はきつと春がくる  
古希の坂ゆつくり登ろうまだ長い  
失敗は二度とするなど親心  
思い合い話合いしていい年に

藤井寺市 増井 ヨシ枝

七草にトントン亡母がうたつてゐる  
正月というに破れたズボン履き  
なつかしい追羽根ひとつ買ってくる  
耳遠くなつたか声が大きすぎ

藤井寺市 吉田 喜代子

駅伝も外国人に借りる足

注射してマスクまで買い風邪を引く

水掛け不動水はもう良い寒いねん

寒風に灯りが恋し鍋恋し

藤井寺市 俣野 登志子

じっとして居れぬ師走の苛ち妻

好奇心旺盛歳を忘れてる

来る者は拒まずいつも賑やかで

花泥棒摘みたい気持わかるけど

藤井寺市 西村 栄一

トンネルをあまたくぐって来た笑顔

世に長けて作り笑いが上手くなる

オイと呼ぶ夫の腹は読めている

オッサンの毒舌もよし安売り屋

箕面市 寺井 柳童

終電へ赤がなかなか変わらない

鍋囲む家庭に潜む活断層

分かれ道険しい方に賭けてみる

雪の道歩いて家の前で転け

八尾市 笹倉 ひろし

焼き芋の笛と匂いが冬を連れ

日向ぼこ今や自分も仲間入り

愛情の渴いた街へ慈善鍋

本当の心の中にある正義

八尾市 西川 義明

増税にやれやれまたも酒タバコ

目が嘘をついてる事を母は読む

気があると自惚れひとり勘違い

酔うほどにやれやれ友のノロケ聞く

八尾市 中島 春江

あの人の言葉のうま味隠し味

軋む膝でも歩けますありがとう

飢餓知らぬ人がはびこるむなしさよ

ねずみなど見むきもしないグルメ猫

大阪府 高木 道子

なるほどと自分を解かず広辞苑

過剰なるお世辞の裏で自在鉤

太陽のパワーに会えず雪無限

犬用の声を持つてるドラ息子

大阪府 若月 祐作

除夜の鐘終えて重なる歳一つ

紅葉踏み箕面の猿に滝で会う

二階から走って受話器のベル切れる

置コタツ皆の足くせ知っている

大阪府 小柏 こずえ

ほんやりとしててもひと日すぎて行き

雪の中歩けば心白くなり

おとろえにブレイキかける杭を打つ

冬眠におだて上手な師の便り

穀割つてなおも成長春の貝

大阪府 西川 冷子

盛り塩が呼ぶらしパパは午前さま

下絵描く区別のライン絵が生きる

これからは何でも見よう設計図

神戸市 田中 章子

聞く耳を持つ人に言う我が小言

われ鍋の蓋はきれいで捨てられぬ

こだわりのお鍋男の台所

エスカレーター横目にわたし歩きます

神戸市 武田 恵美子

山道で渋柿なれどおいしそう

バレリーナばあさんの夢よくかわる

駄洒落ずき喜劇役者の夢を見て

腰まわり足をひっぱる脂肪憎し

神戸市 両川 無限

手の内でまた正論が干からびる

戦争の痛み忘れて吹くラッパ

オレオレの牽制球に引っかかる

正面の夕日ノルマが重くなる

神戸市 木村 忠義

日に一度ありがとう言うことにする

早く終えたまには妻を慌てさせ

お雑煮が懐炉となって初詣で

この寒さ熱めの爛にしよかな

もんもんと秒針といる深い闇

本心を吐かず寂しい酒とろり

凡夫婦つなぎ合う手が共に老い

評判を気にしてわたし見失い

相生市 村木 信子

初日記慶び溢れ弾むベン

温暖化し過ぎた地球いま冷やす

出しゃばらぬ要領を知る良き余生

速き日の想い出秘めたダンス靴

尼崎市 古川 正子

沈丁花紅い蕾の顔のぞく

月桂樹大きく育つ十四年

宵戎今年の元氣祈願する

福娘笑顔の揃う戎さま

尼崎市 小池 幸子

着膨れて熊の如しと苦笑い

老い仕度娘のそばに行く決心

無事で居る証し賀状が届く朝

身の程を知って幸せ感じてる

篠山市 谷田 多美子

うれしい日餐沢をする一人鍋

ふる里の料理恋しい雪ごもり

犬小屋もそわそわとして除夜の鐘

湯豆腐をつついて雪どけ待つ夜長

篠山市 永井 かほる

宅急便お餅が行き来おもそうだ  
娘と孫の何時もおみやげ笑顔です  
この雪で一層美味し冬野菜  
賀状の字一字一字に思い出が

三田市 上垣 キヨミ

髪型を変えて別人になる不思議  
字のくせで誰だと解る年賀状  
良い人になれた気がする初詣で  
おべべ着てお供を連れて初詣で

三田市 石原 歳子

気がつけば隅っこ丸く拭き掃除  
若い日を思い出させる母子手帳  
パンの耳老いの眩き聞いている  
握手してさつき別れてまた出会う

宝塚市 丸山 孔一

怨めしくなおうらめしく爪を研ぐ  
往きは飲み帰りはうつつバス旅行  
お人好し引き受け過ぎた荷の重さ  
四季のある国だけでないこの地球

西宮市 片山 忠

僻んでる気持を妻に悟られる  
やみくもにワァーと叫んでみたくなり  
哀愁を帯びて睨んでいるらしい  
駄駄っ子に慈母観音が音を上げる

西宮市 石野 照代

冬のバラ一輪飾り友をまつ  
コーヒーの落ちる音のみ雪の午後  
福寿草そこだけすこし春の色  
ひなを出す娘の横顔童女めく

西脇市 七反田 順子

反対も賛成もする親心  
ねんねこの温み懐かし母の背  
うまい物たんまりあつて三が日  
ふるさとの出会いつきに子に返り

兵庫県 黒崎 美紗子

早い雪驚いている花野菜  
食べる数聞いて盛り付け雑煮餅  
いやなこと押すと消えるか解除キー  
ローカル線のんびり行こう里の足

兵庫県 岩本 美緒子

顎に付けマスクを捜す阿呆かいな  
松の内事なく済んでシヨッピंक  
彩筆に刻の潰せる老いて生き  
四方の光受けるアトリエ小宇宙

兵庫県 白井 二英

賽銭箱ついでに一円投げ込まれ  
カニツアー天眼鏡で見る地図  
農園を続ける是非を話す朝  
反省が足りない証拠二日酔い

生駒市 小西 稔

年頭に去年の誓い建て直し  
先頭をめざし今年も根くらべ  
内気でもいざという時馬鹿力  
バーゲンで日頃の内気どこへやら

和歌山市 坂部 かずみ

暖房を止めて世間の風を入れ  
手土産のハワイの風のチョコレート  
焦れたい育てたままのノンビリ屋  
風船が膨らみかける悩みごと

和歌山市 根田 よしこ

亡父宛てにご活躍をと年賀状  
お年玉みんなふところ探り合う  
里帰り娘の肩を揉んでやる  
小雪舞う春がそこまで来てるのに

海南市 小谷 小雪

神様がくれた月一休肝日  
木瓜の花勇気をもろう朝の道  
おみくじに今年のやる気試される  
麦の芽は雪の中でも空仰ぐ

田辺市 大峠 可動

親展でたった一人に告げた夢  
円熟も未熟もことぶき福寿草  
春三日酒と政治の穴を埋め  
春を着て耳にダイヤの陽を降らす

和歌山県 森下 よりこ

はつきりと答えないのが上策で  
絆とは家族が集うお正月  
頭の中で疑心暗鬼の雲が湧く  
健康で正月太りする平和

鳥取市 谷岡 清子

アンテナに鳥一羽四方眺めおる  
銀世界人も心も邪気を捨て  
初参り唯息災と祈るのみ  
屠蘇雑煮幸せ受ける年初め

鳥取市 岡田 信恵

幸せを一字に込めた年賀状  
喜びを心に詰めて披露する  
登り坂老いる我が身が見えてくる  
センスよい貴方の色に染まったよ

鳥取市 山口 千代子

年毎に日々の流れの早さ知る  
煩惱を消すかのようにひびく鐘  
花は好きやさしい言葉まだ好きよ  
人それぞれに長所短所を持って生き

鳥取市 近藤 秋星

初詣で今年は神社変えてみる  
雑煮餅老人ホームには鬼門  
お雑煮がおはぎに化した新春の膳  
雪景色冬將軍のプレゼント

鳥取市 河田 のり代

青春のノートに八十路夢が湧く  
頑固爺片意地ぬいで子に好かれ  
寒波越え露の花にも恋思う  
妻褒めりや夫婦喧嘩に妻が負け

鳥取市 中宇地 秀 四

脳みその電源切つて海を見る  
温暖化打ち消すように雪が降る  
失敗は私の生きた道しるべ  
貧乏とストレス俺を放さない

倉吉市 前 田 喜美子

初日の出此の世の光今届く  
お正月見せて看護師髪かざり  
市民でも過疎はやっぱり狭い空  
町を練る御輿も空き家気にして

境港市 遠 藤 那珂子

くるくると客をよんでる散髪屋  
海の色キラリ青さにさそわれる  
久しぶり母がみたてた和服出す  
なごり雪彼と住もうと決めた夜

境港市 中 井 虎 尾

降る雪は人の苦勞は知らぬらし  
善人の明日を信じておれぬ世に  
賞味ってこんな味かは期限内  
どうなるの三位一体不満体

米子市 小 塩 智加恵

少子化に犬が家族に迎えられ  
モンゴルを倒すは一人ブルガリア  
寝ても雪起きても雪が降り続く  
降り続く雪に庭木の悲鳴聞く

鳥取県 福 光 京子

長火鉢いつか茶釜を沸かす夢  
稀少価値出るまで待つて粗大ゴミ  
価値観の違った夫婦すれ違い  
安上がり豆腐で酒が飲める人

鳥取県 岡 村 孝 明

縫る物ないかと周り探してる  
重労働晩酌餌に励ませる  
そろそろと歩き余生に夢をみる  
アスベスト無い服いれる洗濯機

松江市 山 根 邦 代

ふるさとは笑顔あふれる温い風  
耐えぬいて明るい春を待つていい  
悔しさをバネに頑張ることにする  
出る杭は打たれるだけの運ですか

松江市 相 見 柳 歩

心にはこの世の土産だけがある  
哲学をすると心が旅をする  
味つけは家族の絆芋を煮る  
しっかりと命が育つ海の底

未来図は多彩日影は映えてくる  
合併で鳥は国際都市に入る

松江市 柏井 日出子

未知の地へ旅はちさくもときめきぬ  
生かされてわが身も人も愛おしい

出雲市 荒木 英子

年明けて我が余生への春占う

豪雪に右往左往の列島日本

大雪に山茶花散つて朱に染まる

七回忌亡母の好んだ栗御飯

雲南市 福岡 博利

愛犬の写真主役の年賀状

白銀の解けてせせらぎ春の音

子も孫も来ず普段着のお正月

OB会昔ばなしに酒をのむ

府中市 岩本 雅代

誕生日手酌の酒は淋し過ぎ

落の臺雪の解け間で笑顔見せ

我が家にも初日が昇るひ孫出来

お好みでビールが旨い我が自慢

### 第93回 大阪川柳の会

会 宿 日 時  
費 千円 欠席投句 4月1日迄(会員のみ)  
場 梅田駅前第2ビル5階第一研修室  
題 △迷う・恩塚治子選△新人・濱田良知選  
△声・村上玄也選△増える・田中新一選

### 川柳かまいし吟社

### 300号記念合同句集作品募集

作品数 10句(新作・旧作を問いません)

応募料 2000円

応募締切 4月30日

発行予定 5月末

送句先 〒028-0516 遠野市穀町6-17

300号記念合同句集発行委員会

事務局 鈴木 南水

○用紙は川柳塔社宛ご請求下さい。

(06-6629-6914)

### 第7回井笠川柳会笠岡大会 (第19回薬大会)

とき 5月27日(土) 開場9時30分 締切11時  
開会13時 閉会16時  
ところ 笠岡市保健センター(ギャラクシーホール)  
☎0865-62-5700  
笠岡駅より④バス伏越下車 歩4分

題と選者  
第一部 「傷」 平山 繁夫 共選  
(当日投句・2句投句) 小島 蘭幸  
特別課題 当日発表 高木 勇三 (1句)  
赤井 花城  
恒弘 衛山

第二部 「尽くす」 大森 昭恵 共選  
(事前投句・2句並記) 恒弘 衛山

会費 2000円(昼食付・発表誌呈)  
事前投句 指定の用紙又は便箋(4月30日必着)  
住所・氏名・柳号(ふりがな)・電話・所属  
柳社明記 欠席投句 1000円  
投句先 〒714-0081 笠岡市笠岡507-68  
井笠川柳会宛 ☎0865-62-6200(戸田さだお)

賞品・賞状 多数(石碑贈呈2名)  
句碑除幕式 5月27日(土)午前11時  
古城山川柳公園  
主催 井笠川柳会 後援 岡山県他

# 愛染帖

新家 完司 選

羽曳野市 吉村久仁雄  
祈るだけで平和は来ぬが初詣で

(評) 祈るだけでは叶わぬと分かるているが、  
祈らずにはおれぬ「平和」という儂いもの

泉佐野市 稲葉 洋  
本年もよろしく内科鍼灸科

(評) 歳をとるということは、医者通いが増  
えるということ。修理しながら長生きしよう。

東京都 岸野あやめ  
もう一度履いたら捨てる古い靴

(評) 今すぐではなく、もう一度履いてから。  
古い靴を捨てるだけでも「決心」が要る。

シドニー 坂上のり子  
会いたいと思つてくれる友がいる

(評) ありがたいことである。双方が「会  
いたい」と思っていたら、必ず又会える日が来る。

奈良県 渡辺 富子  
豪雪のふるさと母と猫が住む

(評) 雪国には雪国の良さがあるが、今シ  
ズンは過酷である。春よ早くやって来い!

京都市 都倉 求芽  
血圧を何度もさがるまで測る

榎原市 安土 理恵  
笑うこと減った両頬たれてくる

倉吉市 松本よしえ  
少子高齢肩をすばめて老いて行く

宇部市 平田 実男  
年金が年七回にならぬかな

和歌山県 森下よりこ  
うちの孫も破れジーパン穿いている

堺市 矢倉 五月  
鉢植えもメダカも積んで里帰り

診断は亭主在宅症候群  
大阪市 前 たもつ  
ジャンボくじ二元をとったと触れ歩く

哲學者のように反省しています  
大阪市 小谷 小雪  
百円のくつ下かなりあたたかい

夢に見たあなたを更に好きになる  
京都市 高島 啓子  
ゴミ箱のあふれることの無い暮らし

母が今生きていたらと思わない  
堺市 加島 由一  
原因は思い当たらぬ膝の水

恋人に月がきれいメール打つ  
神戸市 田中 章子  
し寸を確かめて買う福袋

初雪に遠回りするバスに乗る

三田市 堀 正和  
ガンのことさらりと書いた年賀状

じっくりと宗次郎聞く外は雪  
弘前市 宮崎ヒサ子  
逃げ出せぬただ豪雪の中に住む

雪見酒と洒落込む気分とは遠く  
東かがわ市 川崎ひかり  
DNAおでこだんだん広くなる

家計簿に載せないお金持つている  
和歌山県 村中 悦男  
どうしても昼の薬は余り気味

電気ストーブかかえなくなる寒の入り  
高知市 小川てるみ  
しんがりを歩く幸せだつてある

こころ病んで月の光が届かない  
東大阪市 谷口 義  
準備体操してから昼寝致します

わたくしを作つてくれた町がある  
八王子市 播本 充子  
校庭にボールが一個お元日

ばあちゃんが好きで優しい子に育ち  
藤井寺市 鈴木いさお  
祝福も感動もなくバースデー

九時に寝るから四時前に起きる  
堺市 志田 千代  
寝たきりになつても生きられる人科

生きているのもしんどいね冬の蠅  
豊中市 安藤寿美子

米子市 政岡日枝子

おでん煮て独りで祝う誕生日  
皓々と月を泳がす寒の水

和歌山市 木本 朱夏

悪口は肴 女の昼の酒  
真夜中の鏡不思議なものを生む

和泉市 横山 捷也

電飾を解かれて年の明けた穢  
いやな事続くが空は真つ青だ

三田市 石原 歳子

元気です厚い沢庵囃んでます  
両の手でしっかりと握手お年寄り

藤井寺市 鴨谷瑠美子

亡父と来た粹なところでふく料理  
加齢した恩師顔顔洪くなり

和歌山市 上地登美代

人の手はとても素敵な万能器  
血統書ないが見事な介助犬

寝屋川市 太田とし子

甘酒のおつりですますお饗錢

大きい方ちゃんを知つてる三歳児

堺市 羽田野洋介

美しすぎる月へ思わずコンバンハ

東大阪市 北村 賢子

花に水私に注ぐアルコール

和歌山市 古久保和子

今のうちですよ私を買つのなら

和歌山県 三宅 保州

富田林市 池 森子

欠点と転んでからの三幕目

松江市 川本 晔

わたしの顔しばらく見ないお正月

大田市 神夏磯典子

余つたらあげたい福が余らない

三田市 北野 哲男

老いたフリ元氣なフリを使い分け

八尾市 高杉 千歩

パレットと話す一日桃の花

大阪府 小栢こすえ

お仏壇食べたいお菓子供えてる

米子市 白根 ふみ

脇役にいつも視点をにおいている

大田市 奥村 五月

寒暖を耐える力が落ちた古稀

枚方市 丹後屋 肇

太陽系越え去りゆかば神の域

堺市 西村りつえ

兄弟も父の歳越え囲む鍋

和歌山市 松原 寿子

戦力はないが手伝いなら出来る

弘前市 高瀬 霜石

西宮市 緒方美津子

落ち着かぬ一人ぼっちの露天風呂

交野市 山川日出子

一人旅亡母の指輪に励まされ

吹田市 太田 昭

マットレス死体のごとくゴミに出し

和歌山市 楠見 章子

凡人の哀しさとゲがすぐに生え

黒石市 相馬 一花

お雑煮の餅で絆を深くする

倉敷市 撰 喜子

明日できることはしないで今日の風

鳥取県 竹信 照彦

一年の計は雪溶け水で書く

唐津市 仁部 四郎

監査役一言居士へ空けておき

富田林市 片岡智恵子

総中流も二極化するむ貯蓄額

高槻市 傍島 克治

俺ひとりだけが不運と思ひ込む

大阪市 松尾柳右子

上品に喋ると誰も寄りつかず

羽曳野市 吉川 寿美

修飾語溢れる街でまた転ぶ

唐津市 井上 勝規

知らなんだ主婦は年中こまねずみ

鳥取市 土橋 螢

睨み合う猫には猫の恋がある

香芝市 大内 朝子

老いの血がわくわく春の息遣い

富田林市 大橋 鐘造

輝いていた日もあった破れ傘

鳥取市 土橋 睦子

悟れずにまた一年を生きているのか

樺原市 居谷真理子

享年を知ってしみじみ見る絵画

唐津市 宗 水笑

大阪の土産北海産の昆布

吹田市 岩屋 美明

灯芯を替えて明るくする余生

羽曳野市 永田 章司

どもないと杖つく友に胸痛む

和歌山市 桜井 千秀

繰り返すジタバタ劇が潤滑油

鳥取市 近藤 秋星

生きようぜ夢がいっぱい飛んでくる

松原市 玉置 重人

子離れが済み賑やかなバスツアー

八尾市 生嶋ますみ

老いもよし呆けたかなあで済む話

和歌山市 玉置 当代

情報を掴むアンテナ錆びている

大洲市 中居 善信

米びつの中には何時も米がある

弘前市 福士 慕情

バイパスが出来て取り残された町

松江市 相見 柳歩

君のこと煮つめるように惚れている

尼崎市 小池 幸子

はつきりと聞こえぬ時は笑み返す

三田市 阪本 藤朗

研ぎ上げて包丁に見る冬の色

寝屋川市 長濱 賢山

定価では買わなくなった貧乏性

出雲市 園山多賀子

語尾少し上げて電話も新春の音

羽曳野市 酒井 一壺

境界の杭が時おり移動する

八尾市 山本 宏至

強い女に向かい男は髭伸ばす

堺市 山本 半銭

水仙の白さは寒の厳しさよ

米子市 光井 玲子

散る日まで自転車だけは手放せぬ

札幌市 三浦 強一

出張の夜の楽しみ寄席囃子

唐津市 岩崎 實

バケツから川へと稚魚のいさみゆく

西宮市 西口いわゑ

やさしさにすなおになれぬのも哀し

寝屋川市 平松かすみ

有りのまま撮れたスナップいやになり

倉吉市 野口 節子

清らかな雪の謀反を見せられる

八尾市 吉村 一風

ジーパンの穴から新語ころげ出る

唐津市 坂本 蜂朗

犬だつて算盤はじき尻尾振る

倉吉市 山中 康子

ふところを探り合つてる長電話

唐津市 久保 正剣

耐震偽装どこ吹く風のノッポビル

尼崎市 山田 耕治

叔母達にかこまれ母の七回忌

鳥取県 石谷美恵子

遠くから私見つめるひとがいる

美作市 小林 妻子

老犬はストープの番しています

和歌山県 辻内 次根

争いに勝つても空は鉛色

大阪市 津村志華子

辻地蔵とてもおしゃれなよだれかけ

鳥取市 田村 邦昭

一徹を変えさせられた孫の言

吹田市 穴吹 尚士

愛されているからこそ塩加減

東京都 清原 悦子

嘘のない心の中に晴れマーク

羽曳野市 徳山みつこ

病院へ隠れるほどの地位はない

今治市 渡邊伊津志

ちくはくの意見をつなく縄のれん

# 誹風柳多留一篇研究 7

舞伎の狂言については不明。早い話が満仲と饅頭の洒落。  
清 贇。駄洒落のみ。

山田昭夫・増田忠彦

山口由昭・小栗清吾

伊吹和男

清 博美

40 満仲の役が仕納メ新五郎

柳水連雨譚

山田 満仲は多田満仲(たのまたけ)(源満仲)のことで、

平安中期の武將、多田源氏の祖で源頼光の父。

しかしこの句の場合は、単に「饅頭」の掛詞。

新五郎は生島新五郎で、この句は有名な大

年奇絵島との蒸籠事件を詠んだもの。絵島が

山村座の人気役者生島を蒸籠に忍ばせて大奥

に連れ込み、そこで逢瀬を楽しんだという大

胆不敵な物語。しかし江戸城大奥には、乗物

や長持などの出入りには厳しい制度があった

というから、いくら何でもそのような事は有

り得まいが、この浮説に基づいた句が数多く

作られている。

主題句は、役者新五郎の仕納めの役は、多

田満仲であった、ということ。多田満仲の狂

言があったかどうか寡聞にして知らないが、

これは饅頭は蒸籠で蒸かすことから、満仲と

饅頭を通わせただけのもの。因みに新五郎の

最後の舞台は、『娶鑑薄雪桜』の團部左衛門

の役であった(階級による性風俗)という。

それは正徳四年二月一日から絵島・生島事件

の発端となった山村座で上演されたものだが、

六日後の二月八日に生島が捕らえられ中

絶、山村座も断絶となった。生島は三宅島に

送られて二十九年、後江戸にて余生を送り七

十二歳で、絵島は信州高遠の配流地で六十一

歳で没した。

饅頭ニテ役生嶋ハ相勤メ

一八三〇

生嶋名残まん仲を相勤め

一四二三

山口 贇。多田満仲は能や幸若舞にあるが歌

41 留桶で汲をやつかむ寒イ事 若菜連東里

山田 留桶は銭湯での自分専用の桶。銭湯に

は小桶と称する桶が常備されているが、その

数は多くなかったから、経済的に余裕のある

常連は専用の桶を預けていた。それには御祝

儀やらチップやらで結構お金がかかるから、

とめ桶を遣ひ長屋でにくまれる 天元梅<sup>3</sup>

その利用状況について『近世風俗史』には

留桶の客いづれの浴戸にも男子には十人

の中一人、百人に十人ばかり。婦女はこ

れを用ふる者、十人に九人、これを用ひ

ざる者百人に十人なり(卷之二十五)

とある。

主題句は、寒い最中、留桶を持つている者は直ぐに湯を使えるが、数が不足していて小桶が使えない者は、「留桶で酌むをやつか」

みながら、寒い思いで待っているという情景。

なお、留桶は「大ききとおほむ高さ六寸、巨

り八寸に一尺ばかりの楢田なり。俗に小判形

なり」(前掲書)。だから、次のような句もあ

る。

銭だけの光り湯屋でも小判形 一〇一七  
山口 賛。銭湯は八文十文であるが、留桶の客については

各目銭ヲ与フニ有差。或ハ金一匁一分、又ハ錢三、五百文、二百文ヲ極下トス

と『守貞漫稿』にあり、五節などに払つたらしい。桶の木は榎やサワラ。定紋をいれたりなどもしたらしい。

清 賛。

42 姫の礼かしわめん鳥つれて出ル

鶴亀連松雀

山田 嫁入りすると、隣近所へ挨拶に行くのが習わし。これを「嫁の礼」と云うが、大体は姑が連れて廻る。黄鶏雌鳥は「黄鶏の雌」(「日国」)だが、この場合は姑のこと。

中ふるなかほか町内引合せ 拾二32

おふくろの背中から出る姫の礼 明六桜一

山口 賛。しかし、姫は新婚の嫁ばかりでなく、主婦一般の意もあるので、下女などを連れるケースもあり、「かしわめん鳥」は女連れの意ではないか。

小栗 賛。句意はその通りと思つが、なぜ黄鶏の雌から、「姑」や次の句のように「遣り手」が連想できるのだろうか。強そうな鶏だ

つたのか。

遣り手ば、かしわめん鳥らしく見へ

明二義5

伊吹 賛。鶏の風貌から老婆を連想したのもと思つ。

清 鶏の風貌からか。

43 たん命ハ松しいの木ハならへる

養老連都

山田 松と椎の木となれば、吉原行きの遊客

お馴染みの、大川沿の首尾の松と松浦邸の椎の木となるだろう。しかし「短命は松」が分らない。「史伝」には「何時の頃か枯れて植替へられたものらし」とあり、『川柳江戸砂子』には「短命と云ふのは、此の句の年代から推して安永年間に枯死して植替へたのを詠んだのであろう。其後文政年代等にも植替へられたやうである」(上巻)とある。しかし、もしそんな事を詠んだとするなら、雑俳の句ならともかく、一体何が面白いのか分らない。だから他に別解があるような気がするのだが、詳にし得なかつた。ご教示賜りた

い。

短命な塚長命の近所也

伊吹 首尾の松と松浦邸の椎の木を匂わせ

五一18

て、小松内府と呼ばれた平重盛の没年四十一歳と

のぼるべきたよりなき身は木のもとに

しゐを拾ひて世を渡るかな

の作者源三位頼政の没年七十六歳を比較しているのでは？

清 やはり松が枯れたことを詠んだ句としか思えない。

44 ちんぼうを鑓さすまたの中で出し

柳水連石斧

山田 関所風景。「入り鉄砲に出女」と云われるように、特に女性の詮議はきびしかった。この句は、男の子は体つきからして女の子とあまり違いがないから、男のシンボルである「珍玉」を出させて確認するというのだ。女性の場合には人見女が同様なことをしたというから、今なら人権問題で大変であろう。

鑓や刺股は関所や番所に備えてある犯人取り押さえるの道具。

たしかななり手形に前をひんまくり 宝九宮

増田 ぬけ参りだらうか。

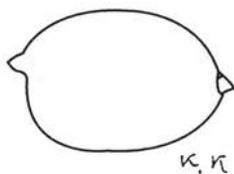
小栗 賛。前髪立の少年。

清 「抜け参り」と決めていいのではありませんか。

共選欄

檸檬抄

(薫風書、カットとも)



「ソフト」 仁部 四郎 選

母さんの胸で育ったソフトな子  
寅さんのソフトから吹く春一番  
山門を出たらソフトな僕が消え  
ソフトドリンクそんな夫で頼りない  
ソフトさがもてはやされて芯がない  
思わくがあつてソフトな声になる  
やんわりと凶星を突いてくる他人  
京言葉ソフトに急所つてくる  
物腰はソフト眼光並ならず  
お別れの手紙ひらかなだけで書く  
紅筆もソフトに動くお正月  
仲裁にソフトドリンク邪魔をする  
巡幸のソフトに汗の塩を見た  
ソフトボール投げてひと日の夕茜  
やわらかい陽射し胎児と会話中  
ソフトジーンズ母さんが跳ねている

堺市 荻野 像山  
池田市 北出 北朗  
熊本県 高野 宵草  
枚方市 海老池 洋  
河内長野市 針生 和代  
倉吉市 最上 和枝  
堺市 西村りつえ  
高石市 浅野 房子  
東京都 岸野あやめ  
京都市 高島 啓子  
鳥取市 土橋 睦子  
西宮市 坪井 孝一  
三田市 北野 哲男  
和歌山市 松尾 和香  
茨木市 藤井 正雄  
八王子市 播本 充子

「ソフト」 藤田 泰子 選

首に巻く妻の手編みがやわらかい  
ソフトにはなれぬ犬です吠えてみる  
羽毛布団それから遅刻多くなり  
喧嘩でもしようソフトになり過ぎた  
もの腰はともソフトでだまされた  
お別れの手紙ひらかなだけで書く  
民営化ポストソフトな顔になる  
虚と実の間ソフトに生きてみる  
やんわりと切り捨てられる雑魚の首  
戦争は猫なで声で寄ってくる  
柔らかな音で九条緩みだす  
核ボタンソフトタッチで撫でられる  
小百合節ヒロシマを読み続けます  
骨までも取って魚のバック詰め  
三段腹叩きソフトに受けとめる  
仁王様ソフトドリンクなど如何

羽曳野市 森下 一知  
出雲市 伊藤 玲子  
和歌山市 土屋起世子  
西宮市 亀岡 哲子  
四條畷市 吉岡 修  
京都市 高島 啓子  
八尾市 山本 宏至  
豊中市 吉田あずき  
和歌山市 楠見 章子  
浜松市 杉浦 恵夢  
和歌山市 上地登美代  
枚方市 寺川 弘一  
堺市 志田 千代  
大阪市 前 たもつ  
大阪市 榎本日の出  
和歌山県 三宅 保州

嘘も上手にソフトにささり流しはる  
脳みそを増やすソフトが見当らぬ  
肚割って語り尽してからソフト  
年の功軟着陸が冴えてきた

八尾市 吉村 一風  
鳥取市 中宇地秀四  
富田林市 中井 アキ  
羽曳野市 徳山みつこ  
河内長野市 坂上 淳司  
羽曳野市 吉村久仁雄

よかつたなあ浪花千栄子の大阪弁  
婆ちゃんがしみじみ語る非戦論  
クッションの痛みだあれも気づかない

枚方市 丹後屋 肇  
大阪府 神夏磯典子  
岸和田市 井伊 東吉  
シドニー 三谷たん吉

ソフトクリーム片手に拝観料払う  
レタストマトソフトにパンが焼き上る  
物腰のソフトにつられ判をつく

大阪府 神夏磯典子  
岸和田市 井伊 東吉  
シドニー 三谷たん吉

政治家のソフトタッチに身がまえる  
赤ちゃんの頬っぺ許しを得て触れる  
ソフトボール若さが駆けた三塁打

大阪市 神夏磯典子  
岸和田市 井伊 東吉  
シドニー 三谷たん吉

嫁入りの皇女にソフトなゴスベルを  
昭和天皇それからソフト帽消えた  
爺ちゃんのソフトな叱りうなずいた

羽曳野市 三好 専平  
大阪市 宮崎ヒサ子  
大阪市 松尾柳右子

ソフトクリーム残して祖父の大往生  
骨までも取って魚のバック詰め  
神の声きつとソフトで美しい

大阪市 秋元 てる  
大阪市 前 たもつ  
竹原市 石原 淑子

縄のれん客の愚痴聞くソフト持つ  
もう背のびしないでソフトシューズ履く  
踏まれ踏まれてソフトになった影法師

大阪市 伏見 雅明  
吹田市 木下 敏子  
鳥取市 録沢 風化

徴兵を「させていただく」のもソフト

鳥取市 録沢 風化

秀句

軸吟

もの忘れソフトに生きることにする  
ソフトムードとかく誤解をされまして  
断るにしてもソフトな京言葉  
よかつたなあ浪花千栄子の大阪弁

和歌山市 古久保和子  
橿原市 安土 理恵  
大阪市 小泉ひさ乃  
河内長野市 坂上 淳司  
和歌山市 和歌山 武本 碧  
鳥取市 鈴木 一弘  
八尾市 吉村 一風  
箕面市 出口セツ子  
神戸市 両川 無限  
鳥取市 有沢せつ子  
堺市 加島 由一  
寝屋川市 籠島 恵子  
大阪府 神野千恵子  
西宮市 門谷たす子  
東大阪市 谷口 義  
弘前市 高橋 岳水  
羽曳野市 徳山みつこ  
和歌山市 榎原 公子  
寝屋川市 太田とし子

秀句

軸吟

風はソフトでわたしを蝶にしてくれる  
向日葵の海ではぐれたソフト帽  
クッションの痛みだあれも気づかない

藤井寺市 高田美代子  
鳥根県 伊藤 寿美  
弘前市 高瀬 霜石

芽

飛永ふりこ選



木の芽草の芽もえて少女の羽化をみる  
 若い芽を摘むリストラの寒い風  
 恋芽生え娘氣にしているにきび  
 遅咲きもやっと芽生えて来た笑顔  
 芋の意地籠の中でも芽が伸びる  
 改革へどんな芽がきて花咲かす  
 個性の芽そろえて摘んでいいものか  
 好奇心まだまだあつて新芽待つ  
 父の手の接ぎ穂の新芽動き出し  
 天と地の恵みに萌える芽を見つけ  
 ほめられた芽がぐんぐんとよく育ち  
 春まじか土持ち上げる芽の息吹き  
 懸命に伸びてる出遅れた新芽  
 芽が出ると思いたいから水をやる  
 交流の芽から吹き出た笑い声  
 春よ春つくしたんぼほ木の芽和え  
 ひと言が新芽摘んだり伸ばしたり  
 伸びる芽へ手間ひまかける母の愛  
 伸びる芽を摘んだ気の子の進路  
 愛いっぱいある土壌なら芽も豊か  
 たらの芽の天ブラが好き春よこい  
 木の芽摘む指の先から春香る

たず子 俊子 恭昌 旋風 勝巳 一風 時雄 登美代 雄々 美代子 康佑 伊津志 茂代 昌鼓 富子 美千代 あずき 哲代 浜丘

夢いっぱい詰めて春待つ葉芽花芽  
 泣いてすねて恋が芽ばえている証  
 前向きに生きよう生きよ芽が光る  
 休耕田浮浪の草の芽を育て  
 不揃いの芽たちへヨイドンかける  
 根性の芽吹き凍土を割つて出る  
 可能性いっぱい秘めた嬰兒の芽  
 裸木の芽からエールを貰つてる  
 木枯しに採まれて新芽動き出す  
 恋の芽を抱えているのはひみつです  
 お祈りの形で発芽する大豆  
 グググッと芽を吹き出した自己主張  
 天才の芽かも知れないクレヨン画  
 衣食住足りて若木が芽吹かない  
 下積みの汗に双葉の心意気

勝視 ばっは 弥生 藤朗 泰女 潤子 すすず ミツ子 倭子 扶美代 五月 幸雀 一知 朝子 正雄 美義 理恵 岳水 霜石 慕情 今愁女

燦々

山岡富美子選



燦々と春の恵みの中に居る  
 燦々と春を吸い込む車椅子  
 燦燦の海に勇気を貰つてる  
 燦燦と朝日を背に帰る漁船  
 陽の恵み燦々野菜旬の味  
 燦燦と輝きたたくて歯を磨く  
 打掛けの金糸燦々鶴の舞い  
 燦然と輝く父の勤続賞  
 燦々と舞う七十のダンス靴  
 燦々と初日嬉しい人の波  
 燦燦と二浪の孫にサクラサク  
 満点のテスト燦々壁に貼る  
 燦燦と輝く古いもあつてよい  
 燦々とはこれ種にも陽の恵み  
 燦々と輝くための白髪染め  
 輝いた過去を肴に父の酒  
 貧しくも君が居るから燦々と  
 燦々の愛のシャワーで蘇る  
 愛燦々美空ひばりが好きでした  
 さんさんと愛という字が日の目みた  
 お日様の輝き子等が見当らぬ  
 燦燦と輝く瞳裏切れぬ

螢 みつこ ふりこ のり子 倭子 浜丘 正雄 恭昌 潤子 あずき 公誠 水笑 寿美 かおり 富子 深雪 朝子 弘風 一粋 かつ子 正剣

朝露の花の笑顔にもらう凜  
燦々と注ぐ陽射しが溶かす嘘  
燦々の日向を猫と半分こ

重人 准一 柳 洋

生と死の狭間で燦々と命  
燦々を避けてニートは閉じこもる  
燦々とネオンいくつの罪を生む

柳 弘 柳 典子 愛 論

愛燦々ガラスの指輪だるうとも  
清貧の中で輝くものがある  
愛燦々受けて家から出られぬ子

岳 水 千 里

太陽が燦々秘密などはない  
背文字さんさん売れぬが光る四書五経  
燦々と輝く陰にある命

(安) 泰 子 妙 子 愁 女

燦々の陽でり恋しい雪回廊  
さらめいた一日だけのシンデレラ  
お天道さまがまぶしい嘘ひとつ

登 美 代 夫 盛 夫

燦燦と美空ひばりは昭和の子  
瀬戸の海陽は燦々と生きよとて  
雲をいちまい剥がすと其処に光るもの

黒 兔 たず子 美代子 弥 生

自分とのいくさ燦々燃えつづけ  
四季燦燦ひとりよがりを衝いてくる  
人

扶 美 代 充 子

ピカピカの名札が春の日を浴びる  
地

哲 男

古稀燦燦二毛作目の花ざかり  
天

霜 石

適材適所石はゆつくり光り出す  
軸

高 瀬

燦々と輝く椅子の裏表

高 瀬 霜 石

駆ける

深田 俱久遠



風光り春のイントロ駆けて来る  
近道を駆けたことない不器用さ  
人生をひたすら駆けた土踏まず  
駆け回り土産を買って旅終る  
駆け抜け西が大雪成に継ぐ  
雨宿りだしに駆け込む縄のれん  
ランドセル駆けてタダイマもういない  
ハイヒール朝のラッシュを駆け抜ける  
うさぎにも亀にもなつて駆け抜ける  
駆けつこのべの子にやる努力賞  
草原を白馬が駆けて暮が降り  
駆け込んで買った撒き餌の福袋  
孫達も大人駆け寄つてはくれぬ  
八十路行く脳裡を駆ける過去の悔い  
駆け登つた椅子の責任重過ぎる  
駆けに駆け一番福のエピス顔  
駆け出しの頃の鮮度にもどりたい  
泣きながら駆たゴールを抱きしめる  
駆け足で去つていったのはもしか恋  
廃校の校庭駆ける夢の中  
白い息残して駆ける子にエール  
夢にまで追いかけてくる棒グラフ

徑 子 一 粒 寿 美 晴 翠 照 彦 志 洋 三代子 桃 葉 扶美代 北 朗 哲 代 寅次郎 あやめ 照 子 旋 風 弘 風 ヒデコ 勝 シマ子 注 湖 キヨミ 霜 石

馬に乗り鳥取砂丘駆け抜ける  
幸せと駆けつっこをする万歩計  
黄信号駆け抜けた日は帰らない  
刺又を取りに教頭今日も駆け  
草の絨毯駆けて遊んだ藁草履  
野を駆ける日を夢みる松葉杖  
飛行機の中で駆けるチキキトク  
ときめいて春を駆け出す女学生  
ベガサスを駆つて宇宙をめぐる夢  
駆けつっこも鬼つっこも消え路地に塾  
犬小屋に駆け込んでから吠えるポチ  
駆けめぐる噂は尾鰭付け戻る  
天駆ける翼が欲しい今日の鬱  
駆け抜けた青春あれは宝物  
新記録街道駆ける朝青龍

圭一郎 潤 子 喜 子 四 郎 俣 子 ミツ子 蜂 朗 早 人 岳 水 次 男 黒 兔 鐘 造 かずみ 栄 呼 公 誠 かおり セツ子 雄 々 みつこ 正 雄 隆 盛

普段着ですぐ駆けつける友がいる  
少年の夢はまっすぐ天駆ける  
駆け巡る野山に学ぶ生きる智慧

天 軸 渡 辺 富 子

# 初歩教室

題 一三

三宅保州

## 作句の不心得十か条(続)

前月号で、私なりの作句上のタブーとすべ  
き「作句の不心得十か条」を述べましたが、  
今月はさらにその続編を掲げさせていただきます。  
これらに該当する場合は、佳句が生まれ  
ず上達もしないこと請け合いです。

- 一 句会には出席しない
  - 二 川柳で手垢にまみれた流行語を使う
  - 三 技巧に走りすぎた句を作る
  - 四 句意のわからぬ句を作る
  - 五 「し止め」の句を作る
  - 六 選者に当て込んだ句を作る
  - 七 自由吟(雑詠)はあまり作らない
  - 八 柳詠、句集等を見ながら作る
  - 九 柳詠等は少ししか読まない
  - 十 競争率の高い大会等には投・出句しない
- 番外 結社には属さない

【同想句】正月・三が日を詠んだ句

原 寝正月さしのさされつ三箇日 賢山

添 「寝正月」と「三箇日」が重複しています。

添 しあわせは差しつ差されつ三が日 こそえ

添 ゆつくりも多忙でもない三ヶ日 浩三

添 ほどほどにくつろぎました三が日 浩三

添 原酒に鮮胃が泣いている三が日 浩三

添 三が日今年も食べて飲みすぎて 象山

添 原朝酒へ妻の我慢は三日まで 象山

添 朝酒へ妻の我慢も三が日 象山

添 朝酒へ妻の我慢も三が日 那珂子

添 三が日正月料理底をつく 幸雀

添 原子が巣立ち夫婦寡黙な三が日 幸雀

添 三日過ぎまた正月をしています 忠子

添 次の句は「三が日」を詠んだ佳句です。

添 原 三が日過ぎれば主婦も風邪を引く 正和

添 「三箇日」「三ヶ日」は現代は使いません。

添 「三日坊主を詠んだ句」

添 今年また三日坊主の誓い書く 早人

添 三日坊主分かっていても誓つてる 章司

添 一年の計三日坊主が同居する 寅次郎

添 【同想で表現も殆ど同じ句】

添 三食はしっかり食べて薬飲む 畑節子

添 三食をしっかりと食べて薬漬け 起世子

添 【添削・批評句】

添 原 大阪に春の訪れ大相撲 真一

添 大阪に三月場所の触れ太鼓

添 原 中一の孫に三番以内発破かける 綾乃

添 何もかも詠み込んで破調すぎます。

添 三番以内目指せと孫に発破かけ

添 次の三句は同義語の重なりを省きたい。

添 原 正月は和服で過ごす三ヶ日 利子

添 添 三が日だけは和服で過ごしたい

添 原 雪国や津軽の太極三味響く 冷子

添 添 雪国にひとときわ響く津軽三味

添 原 待ちに待ち治療三分歯医者さん 智加恵

添 添 三時間待って三分間受診

添 原 三日目はさすがに飽きる関東煮き 萌

添 添 三日目はさすがに飽いてくるおでん

添 原 三面記事ころ砕かれ厭な初春 (卅)信子

添 添 それにしても三面記事が暗すぎる

添 原 三面のモラルを下げる人の価値 (卅)洋子

添 添 事件事故三面記事のモラル落ち (卅)洋子

添 原 孫一人大人三人振り廻す 開子

添 添 三人の大人振り回される孫

添 原 パンタロンが三キログラム減せと言つ つよし

添 添 あと三キロ減らしなさいとパンタロン

添 原 お目当てへ三段とはす足自慢 百合子

添 添 福目がけ三段跳びで駆け上がる

添 原 一、二度は悪いみくじで三は吉 福世

添 添 三度目でやっと大吉引き当てる

原 負け犬の三高狙いがまだ続く 道子  
 添 三高を狙って今も縁がない  
 原 今日だけは三狼の教え守りたい 貞月  
 添 三狼の教えを守る三が日  
 原 一番にならと頑張る三番目 (白) 信子  
 添 一番を視野に入れてる三番手  
 原 三十分前にはいつも余裕もち (河) 洋子  
 添 三十分前にはいつも着く余裕  
 原 三つ指をついて娘は嫁ぎゆく きぬ子  
 添 型どおり三つ指ついて嫁ぐ朝  
 原 三つ指で妻を迎えるポーナス日 (吉) 節子  
 添 ポーナス日だけ三つ指で迎えられ  
 原 三夫婦が揃って我が家幸福だね 雅代  
 添 三世代夫婦揃っている至福  
 原 三代も続けは血筋も様変わり 賢治  
 添 三代も続けは薄くなる血筋  
 原 プロポーズ三日待ってと焦らす人 寿々女  
 添 三日待ってもなしのつぶてのプロポーズ  
 原 失敗の二つ三つなら誰もある 順子  
 添 失敗の二つ三つなら誰にでも  
 原 念願の読書三昧目もたす のりこ  
 添 念願の読書三昧だったはず  
 【少し工夫すると佳くなる句】  
 原 三遍まわってもタバコはやめとこ ただよし  
 添 三遍回っても酒とタバコはやめられぬ  
 原 三振も山を作れば王となる ポン吉

添 打てないが三振王で名を売った  
 原 あきもせず三度の飯は逃さない 映子  
 添 飽きもせず三度の飯が旨すぎる  
 原 三男だからどこまでも翔びたがる 千代子  
 添 三男の気楽さ故か翔びたがる  
 原 三日まち心の怒り消えている みね代  
 添 腹立ちも三日待ったら消えている  
 原 三味を持ち老妓威厳の咳払い 時雄  
 添 咳払いも威厳の三味を弾く老妓  
 次 九句は少し添削しました。(原句省略)  
 添 三歳の姪も電話でありがとう 柳歩  
 添 三千円押しいただいた初任給 キヨミ  
 添 カップ麺の三分間は長いもの みち代  
 添 後列でトライアングル叩く孫 藤朗  
 添 じばばが三人寄れば孫自慢 稔  
 添 三回もお色直しでしらせせ 千華  
 添 少子化に三本の矢も死語となり 好  
 添 売りが買いか三つ数えてから決める 孔一  
 添 三代会やっとお酒の味がする 弘一  
 原 失敗も三回目には怒鳴られる 孝明  
 原 食べ頃の三日前売る干鰯 ミヨノ  
 原 一番手と呼ばれてみたい三番手 サキ子  
 【佳句】  
 三日月も筑紫一郎に浮かぶ宿 松風  
 唐三彩流れたいろのおおらかさ のり子  
 三弦をテープで流す楽屋裏 勝久

三味線を弾いたつもりが墓穴掘る  
 割り勘で三代会までお付き合ひ  
 三つ指をつく玄関が消えてゆく  
 三つ指をついたその手でつまみ食い  
 三回忌遺影にハタキかけている  
 三三九度下戸の私の勝負時  
 三三九度末は地獄か極楽か  
 三叉路で曲が損ねてからの運  
 三面鏡今年の顔が笑ってる  
 ゆずり葉もついに枯れたか三代目  
 お下がりもくたびれている三人目  
 三日寝た足をベダルに見抜かれる  
 三脚に拘る父のカメラ好き  
 三食に不足はないが茶粥好き  
 【今月の推せん句】  
 三拍子揃った夫もの足りぬ 岡本昇  
 罰当たりのようで本当は感謝しているもの。  
 役柄を心得ている三枚目 伏見雅明  
 役者も人生も然りだと言いたいのだと思つ。  
 一つ負け重荷降ろした三冠馬 堀 正和  
 強者の勝たねばならぬ重荷への着眼が良い。  
 足に杖添えて三脚まだ行ける 森本清  
 その前向きな心意気に拍手を贈りたい。  
 【私の句】  
 三文判でよいとうっかり乗せられる  
 鐘三つ鳴らして村の名士なり

# 秀句鑑賞

同人吟 三 島 淞 丘

— 2月号から

貧しくも笑顔あふれていた昭和

堀 端 靖 子

昭和も年々遠くなりました。石井美千代の人形展「昭和の子供達」を見て、当時を偲び感動しましたが、今この句と出会い、またその感動が甦ります。つぎはぎのズボンに満面の笑顔、屈託のない昭和の世が見えてくるようです。さすがは巻頭を飾る佳い句です。

結論を言えは話は終ります

古今堂 蕉 子

実に歯切れのよい句です。川柳で時々ハツと気付かされる事がありますが、この句もその一句です。結論を急ぐあまり、相手の話を充分聞かずに消化不良のまま終ってしまふ。納得するまでじっくり話し合いたいですね。

名前だけ貸してくれとは失礼な

三宅 保 州

思わず吹き出してしまいました。有名称という言葉があるように、作者ともなれば、お名前を貸すくらいは止むを得ないでしょう。ご寛大に、ご寛大に。

泣いた日の五倍笑って元をとる

福 西 茶 子

過去には色々ありました。悲しかった日々を今は楽しく笑って取り戻す。最高の人生じゃないですか。何しろ、元を取るのですから、やっぱり五倍は笑わなくっちゃあね。

情けない顔だと思ふ齒科の椅子

福 士 慕 情

齒科は誰も苦手で気が重い、その上ほつかりと口を開けなければ治療をしてもらえない。美人衛生士に覗き込まれている自分の顔の、なんと惨めなこと、などと気になる内はまだ軽症です。でもお大事に。

もう一杯飲むかやめるか えいっ飲むか

村 上 直 樹

一拍おいて、えいっ飲むか、で酒飲みの心理をすばり表現されています。「えいっ」で下六になりましたがリズムは壊れていないと思います。斯く言う私もお酒大好き人間、いい句に出会ったから今夜も、えいっ飲むか。

どん尻でよし完走で終りたい

岩 佐 ダン吉

どん尻が居るからトップもブービーも居るのです。順位はどうあれ、何事も最後までやり遂げることが一番大切だと訴える、そんな達観している作者に敬意を表します。

平成十二年の秋から本気で取り組みました川柳に、今では虜になつてしまいました。

初めのうちは、退職後の趣味を一つぐらいは持たねばと気軽に始めましたが、素晴らしい師と先輩に恵まれ、川柳の面白さ難かしさを学ばせて頂き、また平成十四年には幸運にも川柳塔賞というビッグな賞を受け、それが一層の励みとなり、以来川柳に明け暮れる日々となりました。

川柳は多読多作、そして多捨を心がけるように教えられ、その実践に努めているところです。

この度の秀句鑑賞という大役を、未熟を省みずお引き受け致しましたのも、私にとつてこんなよい勉強の機会は二度と無いと思つたからです。

拙い鑑賞ですが、約千九百句をじっくりと読み、そして味わつて、私の心に響いた句を鑑賞させて頂きました。勿論他にも秀句が沢山ありましたが、掲載できなかった事をお許し下さい。

第一子長女が急に威張りだす

山本 希久子

皇位継承問題は国民の関心事です。賛否両論があるのは世の常ですが、穏やかに決着して欲しいものです。作者の鋭い感性は、その関心事を見事に一般家庭に置き換えてユートラスに表現されました。「急に威張りだす」で一層和やかな家族が目には浮びます。

あの頃の夢は下絵のままに老い

富田 美義

若い頃の夢はとてつもなく大きく美しい、それだけに実現はなかなか難しいものです。描いたけど果たせなかった夢を「下絵のまま」と素晴らしい表現をされました。まだまだこれから新しい夢を描いて下さい。

逆転の勝ちほ口勝ちより嬉し

江見 見清

そうですね。こんな痛快なことはありません。それに、何事も苦しみ抜いて得たものほど価値があり喜びも一入です。人生も逆転勝利といきたいものです。

モノクロの頃へ人情置き忘れ

長浜 美籠

文明の進歩とともに薄れ行く人情、昨今のお金と効率至上の世の中は心がだんだん冷えてきます。モノクロの頃が懐かしいですね。

抜け殻のふりして母は丸く住み

久保田 千代

抜け殻のふり、とは恐れ入りました。ずいぶん賢いお母さんだと思います。高齢になると頑固、愚痴が出るものですが、上手に惚けて家庭円満に氣遣っている、そんな母をいとおしく思う作者の優しい一句です。

眠ったら損するようないい日

西口 いわゑ

よほど嬉しい事があったのでしょね。それにしても、川柳とはこんなに面白く楽しいものかと改めて思う一句です。そうですね、こんな嬉しい日に寝てしまつては損です。一時間でも、いや十分でも長く今日を味わおう。

風ばかり読んで方角定まらず

植田 一京

政治、経済、株、年金、風は今どっちへ流れ、明日はどっちへ向くのか、いやや混沌たる世の中です。それでも作者は風をしつかり見定めようとする。見習わなくっちゃあ。糸切つて息子は冒険の風を選る

奥谷 彩子

今、男性のひ弱さが問われています。ご息は自分の意志で逞しく世の中を冒険しようと決意しました。作者は、そんな息子を心配しながらも、誇らしく思う一句です。

飼い主の好みと違う犬の恋

上田 俊路

夕方の公園はペット犬と散歩する人で賑わっています。そして立話、お互いに愛犬を自慢し合つたのです。愛犬もしきりに相手の犬に興味を持ちます。そして恋に落ちるのです。ご主人の好みなどどうでもよいのです。

七人の敵も薬を呑む時間

政岡 日枝子

薬を飲むのも日課となつた。この時ぐらいは氣を抜きたい。だけどこうしては居れぬ。いや待てよ、今はライバルだつて薬を飲んでゐる頃だ。と自己暗示を掛けて、さて焦らずに一句ひねるか。さすがは余裕の一句です。

道草もできず列成す登下校

松本 知恵子

学校帰りの道草は唯一開放される楽しい時間、そこには不思議があり、冒険があり、そこから自立心も生まれました。悔しいが今の危険な世の中では、児童たちは列を組み、ただひたすら家路を急ぐしかないので。

どの羽も翔び立つ夢をひと抱き

山本 玉恵

巣立ちの鳥は、羽をばたつかせ飛び立つ一瞬を待っている。少年も明日への夢を抱いて羽織いをしてゐるのです。希望の一句です。

# 秀句鑑賞

— 2月号から

## 正畑半覚

グーチヨキバー紙は優しく石包む

田中章子

人生日々グーチヨキバーの連続。石は鉄の刃をこぼし、挟みは紙を刻み紙は石を隠す。それを優しさを詠んだ作者の巻頭句お見事。

本物とさわって見れば造花なり

山口千代子

人の世にあまりにも二セモノが多いから、無意識のうちに本物を求める。さわって見た作者は立派。自分さえも二セモノかも…。

手弁当つてあげる人が出来

升成好

文明だけが進みすぎ、人は手を忘れた今、一番大切な手作り誕生の句がまぶしい。

よく笑う達磨でいつもすぐこける

渡邊伊津志

よく笑う人間は火達磨になり、雪達磨になり、すぐこけるが常に情熱をもち春を呼ぶ。

長寿更新少子更新どうなるの

三浦強一

戦後、日本の人口が初めて減少の兆しを見せた。怖い。千年來のお付合の戌としにあやかりたいと、作者も筆者も大まじめである。日記にも書けない恋と書いておく

杉浦えむ

うまいなあ。書けないと言いながら、半分書いたようなもの。一行の日記が見えてきて読者は、つい想像をめぐらし元氣をもらう。

猫ジャンプしても糞虫プーラプー

北出北朗

これにもくい一句だ。人間性のある面白さに読者はきつと、猫になったり糞虫になったり、いやまるで人間の世界を切り取ったような、格調高い一句としての推奨である。

とんびにも軍用機にも同じ空

大久保伸子

青空は地球の母でもある。自然はそこにとんびを翔ばし、人間はそこに軍用機をも飛ばす。人間とは一体何者と言えはいいのか。

三猿で笑つてた母それも愛

森田れい子

見ざる言わざる聞かざるで笑つてた母。作者はそれも母の愛であったと思ひ起こし、胸を熱くするのである。真に母こそは永遠。

血が騒くなぜか二月という月に

神野千恵子

鋭い句。実は地中ではすでに芽を出そうとしている二月。人間も血が騒ぐわけだ。

風邪引くな親の願いはこんなもの

片山忠

「風邪引くな」という特に目立つこともない願い。子にける親の願いの深さなのだ。

十二月八日どんな日知っている

近藤秋星

八月六、九日と相手責めるだけでいいのか。まず己を責める大切さに気づくべき。手を振って見送る母が点となる

猪森スミエ

そして母は、子が見えなくなってもなお、その場を離れようとはしないであろう。そしてまた嫁と仲良くして居ます

菅田かつ子

また、やったね。そしてそれを繰り返しながら、お互いの絆を強くつよくして来たね。

古稀過ぎてても昼行灯と言わせない

笹倉ひろし

気を抜かず老いに逆らい生きて行く

西川冷子

生きるとはこの真剣さが土台。自分を乗り越える情熱に拍手を送りたい。川柳は命！

# 言葉は生きています

閑人閑話

田中正坊

本誌の昨年十月号もくじ下に、「日本語をダメにする省略語」と題して、波多野五葉庵さんが執筆している。また、同号の初歩教室に、「言葉の乱れ」について三宅保州さんが書いている。論旨は違うが、どちらも、川柳に正しい日本語を使うという重要な問題提起だと思ふ。

前者の省略語は、正しくは省略語で「語形の一部を省略して簡略にした語（広辞苑）だが、ここで例示された二十数語について見ると、略語だけでなく、複合語・専門語・流行語なども含まれている。ここでそのすべてについては考察しないが、真つ先に槍玉に挙げられた「デバ地下」（デパートの地下売場）は、あまり好ましい言葉ではないものの、新聞の用語に使用され、庶民の日常会話でも使われており、「産直」（産地直送）は、辞典に採録されるほど、一般化している。

カタカナ語（外来語）に関しては、私がかつて本誌に「カタカナ語と川柳」について述べ、川柳句文集「赤えんぴつ」にも採録しているのので、あえて繰り返さないが、カタカナ語は俳句・短歌でも多用されており、「川柳がカタカナ語に汚染されている」と考える人があれば、見当違いであることを指摘しておきたい。ただ外来語でないカタカナ語の中には、「ガングレ」「イケメン」のように、品のよくない隠語めいたものがあり、こういう言葉を乱用するのは、どうかと思ふ。

略語は、戦後、アメリカ占領軍がPTAと多用されており、カタカナ語辞典の巻末に「ユネスコ」のように、そこから生まれた言葉もある。「デジカメ」「マスコミ」のように一般の文章や会話でも常用されており、音数が限られた川柳で活用するのは当然の成行きであり、「略語が川柳をダメにする」というのは、考え過ぎではないだろうか。

話はあるが、国立国語研究所では、これまで四回にわたって「外来語の言い換え案」を発表している。すでに百数十語にも上り、しかも専門語と思われるものが多いので、その適否を論評することはできないが、中には、

「アクセス」「オブザーバー」のように、すでに日本語として通用している言葉もあり、言い換えというよりも、生硬な漢語に翻訳したために、逆に理解を困難にしている例も少なくない。戦争のように、あらゆる外来語を敵性語として排除した轍を踏まなければ幸いである。

川柳は、人間の心や社会の動きを詠む文芸であるから、流行語（ある期間、興味を持たれて、多くの人に使用される語）についても、関心を持たねばならない。その時代時代を敏感に反映する言葉が少なくないからである。中には一過性で、すぐ忘れられる言葉もあるが、定着して一般語となるものもある。現在、よく用いられている「ニート」「チルドレン」などは、どうだろうか。

少なくとも、正しい日本語で川柳をつくることについて異論はないだろう。ただ、どのような言葉が正しいかが問題となるが、これはどこかの機関が決めるべきものではない。言葉は生きものであり、生成発展してやまない。いつまでも、万葉や方丈記の時代にとどまることができない。文芸としての川柳でいかなる日本語を使うかは、つまるところ作者と指導者の知性と感性に拠らねばならないのではないだろうか。

# 本社二月句会

二月七日(火)午後一時  
アウイーナ大阪

立春も過ぎ小雨の中二月句会は113名の参加者を得て定刻に開催された。はじめに一月六日に急逝された、ふあうすと川柳社主幹泉比呂史氏の冥福を祈り黙祷を捧げる。

お話は木本朱夏さん。色彩のメッセージと川柳について、橋高薫風先生の作品から。

黒のイメージ―重々しき、莊重さ、力

漆黒のピアノから出る海の音

青のイメージ―若い、若くて未熟である

仏様に青いバナナを供えとき

紫のイメージ―高貴さ、品格と神秘を表す、

またの世に散るのは紫のさくら

などの色彩のイメージをうまく使えば、川柳作品も奥深くひと味ちがった味わいがあるのではないかと結んだ。

初出席は神戸市の渡辺信也さんを迎える。  
(義記)

月間賞は大橋鐘造さん(富田林市)に輝く。

(司会)朝子・玄也(記名)真理子・富美子  
(受付)利昭・茜(清記)富美子

## 席題「そのうち」

村上 直樹選

そのうちに妻に三つ指つけさせた  
二本目の尻尾そのうちきつと出す  
鼻ぐすりそのうち効いてくる話  
そのうちに行くよとあてのない返事  
そのうちに君の好みに合わしとこ  
そのうちに私再婚するつもり  
そのうちに寝言でばれる隠し事  
そのうちに消えるさ去年の恋の傷  
そのうちに春も来るだろ雪おろし  
そのうちに慣らされそうな事件事故  
そのうちにきつとわたしも影法師  
そのうちに泣き出す恋に今夢中  
駄駄っ児も泣くだけ泣けば寝るだろう  
そのうちに酒は止めると口ばかり  
そのうちに甘く育てた子がニート  
そのうちに飲みに行こうとそれつきり  
泳がせりやそのうち尻尾出すだろう  
かさぶたが剥がれて風化する噂  
そのうちにあいつが頭下げてくる  
三日後がそのうちになる借り上手  
そのうちに三億当てて返します  
(奥)五月  
ダイヤモンド買ったるがなと五十年  
妻の座にそのうち馴染も腰回り  
そのうちに孫も寄り付かない予感  
減塩減糖まもなく眠くなるでしょう  
ロボットがそのうち介護してくれる  
ぱっくり寺(利益叶うのも困る  
柳伸  
義子

賢子

修

弘風

耕治

春蘭

重人

則彦

理恵

比ろ志

富美子

森子

幸雀

アキ

美籠

五月

玄也

克己

朱夏

利昭

正

五月

蕉子

朱夏

玄也

柳伸

義子

そのうちに亡夫と妻に呼ばれそう  
そのうちに結論がでる遺産分け

そのうちと二回言うから嘘になる

そのうちがとうとう百円切っている

そのうちに月の旅行の定期券

至近距離そのうち何かある気配

おそ咲きの努力そのうち社を抱え

そのうちと母割烹着離さない

そのうちに一豊の妻見習うわ

そのうちに笑い話にする苦勞

抱き合えばそのうちとけるわだかまり

見ておれよそのうち俺が白を持つ

挫けるな夜はまた明ける陽も昇る

梅一輪そのうち恋になる予感

大阪に力士のにおい春をよぶ

言い訳が上手で嘘の匂いする

お茶を飲む仕事草におうお人柄

たのしみな明日がにおうランドセル

はしゃいでどこか怪しいにおいする

すれ違う亡母のにおいを追いかける

どん底で人のにおいを追っていた

甘酸っぱいにおいを連れて嫁が来る

鐘造

茜

昭

光久

尚士

富美

洋

千津子

昭

一步

高栄

ばっは

弥生

茜

俣子

富美子

富子

一風

天

淳司

軸

梅

兼題「におい」

太田扶美代選

富美

尚士

千代

光久

照子

昭

鐘造

友だちは同じ匂いの方が良い  
 寄り添って春の匂いの方へ  
 にんげんのおいだんだん薄くなる  
 水仙が春の匂いをつれてくる  
 染みついた汗の匂いを愛される  
 石鹸がにおうあなたが好きになる  
 お寺の子お寺の匂いする名前  
 玄関に入るとにおう暖かさ  
 アロマセラピー株のニユースを聞きながら  
 鈍行においごはいしひとり旅  
 幸せなおいごは人が炊きあがる  
 一輪の水仙部屋中が甘い  
 香水で弱いわたしを主張する  
 ワイシャツに働き蜂の香が残る  
 散歩する人の匂いの道選ぶ  
 嫁さんの鼻が良すぎて気が抜けぬ  
 いいにおいまで独身の奔放  
 雪囲い凜の香放つ寒牡丹  
 花匂う一年生を送り出す  
 血と汗のにおいに亡母が棲んでいる  
 少々の悪のにおいがたのもししい  
 におわない恐い空気を吸っている  
 生活の匂いがない六本木  
 金木庫皆んなの足をひきとめる

義 真理子  
 典子  
 修  
 耕治  
 富子  
 利昭  
 アキ  
 たず子  
 哲男  
 きよし  
 富子  
 弥生  
 理恵  
 淳司  
 いわゑ  
 集一  
 ますみ  
 高栄  
 弥生  
 重人  
 一風  
 森子  
 いわゑ  
 能子  
 千恵子  
 菜月

手のくぼみ罪のにおいがまだのこる  
 人  
 いかなごの炊く匂いする春間近か  
 地  
 チョコにおう穏やかならぬ男達  
 天  
 味噌汁のにおいジョキング切り上げる  
 軸  
 残り火を生きたる石けん匂わせて  
 兼題「捻子」 中井 アキ選  
 捻子山が潰れて妻と腐れ縁  
 心ない人が九条の螺子を抜く  
 居酒屋で捻子を締めたり弛めたり  
 ただ一個の捻子がシSTEM狂わせる  
 生きて行く節目節目で捻子を巻く  
 締め過ぎて切れてしまった夫婦仲  
 しがらみの捻子軋ませる核家族  
 認知症の母が私の捻子を巻く  
 とときは捻子を弛めに巻いている  
 夜食うどんもう一息と捻子を巻く  
 ずっとずっと合わない捻子を巻く夫  
 美しい女に近づく捻子ゆるむ  
 寂しさでブリキのサルの捻子を巻く  
 捻子一つ合わないけれど無二の友  
 煩惱がまた欲望の捻子をまく  
 嫁はんが朝から捻子を巻きに来る  
 しなやかな捻子でハートを開けて来る  
 捻子全部弛めおんなの終い風呂 (浦克) 己  
 はじめ  
 蕉子  
 楓楽  
 瑠美子  
 雅明  
 美明  
 楓楽  
 光久  
 集一  
 利昭  
 愛論  
 和夫  
 きよし  
 正雄  
 ばっは  
 弥生  
 朱夏  
 美明  
 准一  
 富子  
 己

振り出しに戻る捻子が奮起する  
 お化粧を落とす捻子がゆるみ出す  
 プラス思考の捻子はしっかり巻いておく  
 三猿を通してしっかり巻いた捻子  
 影武者の捻子をうっかりしめ忘れ  
 ネジ一本外れジェット機引き返す  
 五感の捻子ゆるめて春を待っている  
 頭の捻子ちよつとゆるめて姑になる  
 捻子一本ギョッと締めたらシャンとした  
 老婆にまだ捻子まかれてる余生  
 捻子巻けばまだまだ僕もとにんまり  
 捻子ゆるみ昨日のおかず出てこない  
 ハードルを高めに上げて捻子を巻く  
 心を開く捻子のひとつにある願い  
 住  
 春の捻子巻けばボエムがころげ出る  
 捻子穴が合わなくなった子ども部屋 (田) 章子  
 捻子いっぱい締めて友だちだれも無い  
 現状維持大きな捻子で止めておく  
 妻が捻子巻いたら僕が動き出す  
 人  
 新しい捻子と歩こう御堂筋  
 折れた虹を止めてあげようボクの捻子  
 地  
 繋ぎ止める捻子が見つからないのです  
 天  
 捻子少し緩めて夫婦しています  
 軸  
 夕胡  
 扶美代  
 義  
 柳伸  
 一風  
 たもつ  
 扶美代  
 楓楽  
 いさお  
 恭昌  
 千枝子  
 さくら  
 光久  
 寿子  
 富子  
 章子  
 ばっは  
 美代子  
 集一  
 森子  
 美代子

兼題「招く」

西口いわゑ蓮

そのときはきつと仏に招かれる  
 近くまで来たど招かぬ客の顔  
 招待状まだ届かないあの世から  
 招かざる人がいちばんはしゃいでる  
 手招きにすぐついて行く癖がある (四) 章子  
 ままことの招待状は断れず  
 招かざる老いを笑顔で跳ねとばす  
 心寒い日やさしく招く屋台の灯  
 座禅組むその空間で無を招く  
 お招きが難とあつては断れぬ  
 平服とある招待で気をもめる  
 官から民金の亡者を招き寄せ  
 ロードショー招かれ見合兼ねていた  
 招かれてきたのに僕の椅子に猫  
 義理チョコがとんだ誤解を招くとは  
 倅せな明日を招く夕茜  
 招かれて行ったお席は気をつかう  
 悪友に呼ばれ一升下げて行く  
 偏食が招いて五体ゆるみ出し  
 うぬばれをくれるネオンに招かれる  
 手招きの笑顔の裏で爪を研ぎ  
 買わぬ客も招いておけば次が来る  
 視点から消えた男は招かない  
 招待状妻同伴が高うつき  
 美しい嘘で心を招く人  
 雪もえて一途に胸の火を招く  
 梅輪挿絵のハガキ友招く

螢  
 庸佑  
 弘風  
 理恵  
 章子  
 朝子  
 典子  
 柳弘  
 扶美代  
 美代子  
 正  
 奮水  
 朱夏  
 光久  
 たず子  
 水昇  
 利昭  
 とし子  
 希久子  
 かりん  
 シマ子  
 公誠  
 寿美  
 柳弘  
 寿子  
 奮水

招かれた茶室癒しの和のこころ  
 場違いの席に招かれ目まいする  
 一言が誤解招いている空気  
 幸せを招く笑顔を持ち歩く  
 心の窓ひっそり開けて春招く  
 招かれた椅子のスプーンはよく喋り  
 残照に招かれていく小さなうつつ  
 お断わりたどえ亡夫が招いても  
 自分との戦いストレスを招く  
 招かざる客が温もり置いて行く  
 人柄が招くまあるい大きな輪  
 地  
 絵手紙の花に招かれ汽車に乗る  
 天  
 福招くのも火を招くのも女  
 軸  
 招かれて招いて深くなるまらずな  
 兼題「エリート」 玉置 重人選

エリートに欲しい現場の強かさ  
 エリートの自信あらわが疎まれる  
 エリートの帽子あご紐ついている  
 エリートの弱さ雨に負け風に負け  
 エリートは夫と違う犬ですの  
 煽てたらエリートらしい顔をする  
 エリートの肩書き脱ぐと風邪を引く  
 エリートと同じバジヤマを買いました

弥生  
 美智子  
 太郎  
 夕胡  
 みつ子  
 愛論  
 茜  
 楓楽  
 紀乃  
 美智子  
 千津子  
 たず子  
 洋

六本木ビルズにエリート一人墮ち  
 エリートと同席をしてくたびれる  
 エリートも漫画見ているいい笑顔  
 本当のエリート威張ったりしない  
 エリートの測で溺れているピエロ  
 どっこいしょなんて言わない東大出  
 エリートと無縁を生きて汗臭い  
 エリートも仮面つけたい時がある  
 即答はせぬエリートの皮手帖  
 東大もビリで出る人いるのです  
 エリートの裾に纏わりつくうわさ  
 エリートの卵が駄駄を捏ねます  
 エリートも仮面をずらす赤のれん  
 エリートに教えて上げる花言葉  
 エリートと飲んでる酒は味が無い  
 返り血をあびてエリート雑魚となる  
 エリートは鍵つ子だった頃がある  
 エリートを育てた母の丸い背な  
 焼酎のエリート高く飾られる  
 エリートの疲れが見えている背中  
 エリートでないのストレス溜まらない  
 エリートやセレブがみんな好きらしい  
 ハンサムでエリートだった夫です  
 エリートの視野に離れぬ七光り  
 兼題「エリート」 保州 義昭選

エリートも人間の顔しています  
 エリートも方向音痴だとわかり  
 散り急ぐ花エリートに見えて来る  
 エリートに育て田舎で独り住み

西  
 いわゑ  
 一風  
 みつ子  
 柳弘  
 紀乃  
 朝子  
 千里  
 柳伸  
 つつや  
 森子  
 さくら  
 倅子  
 朱夏  
 太郎  
 和夫  
 義子  
 富美子  
 真理子  
 太郎  
 一步  
 みつ子  
 賢子  
 なぎさ  
 保州  
 義昭  
 アキ

エリートの息子の介護当てにせず(奥)五月

人 地 天 軸

エリートに詠りがあつてほつとする 理恵

エリートも一塩ふるとしほみだす 比ろ志

優しい子でよかつたエリートではないが シマ子

エリートに現場の風は妥協せず

兼題「豆」 河内 天笑選

豆好きでまめに七十七歳になる 螢

納豆の好きな女でまだ切れぬ 美明

鬼は外輸入大豆をぶつつける 弘風

豆粕と芋で昭和の底力 直樹

豆の数三度かぞえてみな違ふ なぎさ

小豆伍買うて夫婦のおぜんざい 潤子

節分はわが身の内の鬼払い 森子

ばあちゃんの煮豆不思議と敵がない 直樹

折紙の楯で園児が豆を撒く 富美

京なまりの友がより合う五色豆 たず子

こだわりの豆は老舗で買うてくる 三喜夫

豆粒のような腫瘍におどされる 女也

だんじりの上でキリリと豆しほり 菜月

人間の本音を吐いて豆をまく 高栄

豆くらいではわが家の鬼は出て行かぬ 光久

年の数とても食べきれない傘寿 いさお

基地はノーでつかい声で豆を撒く ダン吉

豆ごはん昔話がしたくなる 洋

青い目を細めいたたくお赤飯 日出子

おだてられ豆の木宇宙まで伸びる 千里

天国を見たくて伸びる豆の蔓 鐘造

豆撒いて冬の出口へ鬼を追う 柳弘

鬼は外豆まく孫が福の神 はじめ

煮豆なら歳の数ほど食べられる シマ子

外国の豆を日本の鬼に投げ きよし

遺伝子を組み換えられた豆の鬱 典子

黙黙と年豆を噛む共白髪 集一

枝豆の殻が秘密を聞いてゐる ますみ

さん付けで呼ばれる豆さんお芋さん 俣子

豆を挽く不倅せではない香り 扶美代

貧乏を追いつせもせず豆を撒く 尚士

ばあちゃんは旅の夜風で豆を煮る 一歩

佳

みつ豆の好きな男に油断する 楓楽

大好きなモカ挽き今日が始動する つづや

豆の炊いたんはお店で買うてます 重人

リハビリに大豆を箸でつままれ 公誠

生かされた喜び豆を一つ足す 修

人

騙しあう親見て育つ豆狸 恭昌

豆噛むと腰まで響く老いのはる 公誠

天 軸

生きてきた証の豆が食べ切れぬ 大橋鐘造

豆が進んでグロုပ်の手になった

番傘わかかくさ川柳会創立60周年

同人句集『草の塔Ⅲ』発刊記念川柳大会

とき 5月4日(祝日) 午前11時開場

ところ フェイセス・月華殿

(06-6771-8731)

祝 辞 JR環状線寺田町下車西へ徒歩5分

番傘本社主幹 磯野いさむ氏

(社)日川協事務局長 本田 智彦氏

103回芥川賞作家 辻原 登氏

東大寺執事 上野 道善氏

お話 前上方落語協会会長

一代目露の五郎兵衛氏

事前投句「ふりだし」 田中新一謝選

4月4日締切り(出席者に限る)

宿題 「恋」 やすみりえ選

「光」 前川千津子選

「牙」 西出 楓楽選

「してやったり」 大木 俊秀選

「うっとり」 住田英比古選

「でのひら」 森中恵美子選

各題1句・締切り13時、席題なし

会費 3000円(記念品・句集・発誌・昼食)

懇親宴 7000円(申込制・締切り4月4日)

事前投句送り先・懇親宴申し込み先

〒631-0024 奈良市百鬼園2-4-17 藤原一志方

電話0742-24451-25537 主催 番傘わかかくさ川柳会

# 老心海城

毎月24日締切・30句以内厳守

編集部

川柳塔おっぱこ吟社

木村あきら報

もまれても角が取れない石もある  
温かい湯気が呼んでる縄ノレン  
ドン底をくぐった人の眼が温い  
温もりのある一言で夢が持て  
句碑の字に偲ぶ故人の夢の跡  
明日吹く風に全てを賭けてみる  
さよならと軽く握った手の温み  
残業で儲けた金で葉買う  
手作りのマフラー一本縁結ぶ  
折込みが毎日増える年の暮れ  
日溜りに置物みたい猫の番  
世渡りは三歩進んで二歩下る  
子は街に親は老いても過疎に住む

川柳塔おおとり

鈴木

ひかり  
よしみ  
かおり  
貞月  
文仙  
あきら  
賢  
初恵  
寿々女  
放任  
八重子  
いさむ  
治延

一弘報

以和万津  
艶子  
知恵  
小生

布施はずみ極楽切符もらい受け  
気心がしれた仲ならもらっちゃう  
もらう物高価過ぎる腰が浮く  
野良猫のずぶとさもらう生きねばと  
遺産なし頭と心だけもらう  
一日の活力もらう朝ごはん  
目の鱗落としてもらう詩へ炎え  
点滴に命を満たす氣をもらう  
葉呑む父母にもらったこの命  
たくさんの人から貰う処世術  
孫たちに若さもらって艶を出し  
隣からおいしい匂いだけもらう

川柳塔みぞくち

小西

雄々報

身支度へ時計気にして準備する  
虎落笛に急ぎたてられて冬支度  
頂上飾り終えて正月待つゆとり  
注連飾り準備の荷が重い  
新春へ心引き締め準備する  
仏壇のほこりも払い新春を待つ  
プロポーズ心の準備して出かけ  
いざ本番舞台の袖で深呼吸  
なごやかに大掃除して除夜の鐘  
老いの坂こころの準備考える  
準備したチラシ正月客を呼び

竹原川柳会

時広

一路報

一弘  
和子  
ヒロ子  
清子  
真一  
幸次郎  
黙光  
登美  
和子  
風花  
道子  
由多香  
弘子  
豊枝  
鈴枝  
信雄  
久子  
智恵子  
公美枝  
和代  
静江  
正光  
雄々

つけあがるから許さない三回目  
ほほえんで許す女の花鏡  
とげひとつ抜くと許せる事なのに  
時効です許そう海も風いで来た  
許されて甘えてみたい角砂糖  
ごめんねの一言待っている麒麟  
許さねば生きて行けない地球です  
正座ならまだまだ負けぬまだ負けぬ  
すこやかに老いて体重計にのる  
戌年と知らずウチの犬は昼寝  
人間も寒いと丸くなっている  
夫婦の原点でしたランブの灯  
妻の手の魔法のランブよくしゃべる  
ランブの灯今夜は魔女に変身す  
昔話が似合うランブが置いてある  
パチンコが休みか父がうちに居る  
揺れる揺れる揺れるランブの灯がわらう  
リハビリーへのあの木の下で休もうね  
休んだらもう動けない古希の坂  
年一度健診前の休肝日  
小休止などとしただろ五十年  
掌を合わせ心休まる地蔵前  
影法師休んでいいよ闇の夜

川柳ふうもん吟社

夏目

一粋報

一期一会の風が手の内から去らぬ  
日輪を背負いわたしの道をゆく  
ミネラルがどつぷりと湧く母の井戸  
憎しみの鎖たち切る聖書読む

青居  
規代  
敬子  
汎美  
幸子  
厚子  
万年  
不朽  
寿枝  
史子  
千枝  
静風  
笑子  
輝恵  
貞力  
半覚  
比呂子  
節夫  
淑子  
房子  
慶子  
一路  
洋々  
鬼桜  
忠良  
公弘



何十年ぶりの大雪閉口し  
 年金に温もる暇のない暮らし  
 新春にふところ温め待つ  
 漫才に笑い腹中温めつた  
 羊水の温もり神のお計らい  
 ストープの囲みも解ける集会所  
 寒いか温もり伝う母の声  
 温泉の温もりを抱くおぼる月  
 頭から湯気たてながら雪おろし  
 どの国も太陽差別なく温い  
 政治家は温もる金の成る木植え  
 何処に在っても人が温もる灯でいよう  
 蕎麦でも食って温もって行きなさい

川柳塔なら 坊農 柳弘報

武子 かつみ  
 かおる  
 久枝  
 和枝  
 実満  
 みどり  
 かつ乃  
 (西) 和子  
 くに子  
 小生  
 盛桜  
 螢

しんがりになって紅葉の中にある  
 反省のビルが哀しみだけ残す  
 峠越す命は神のおほし召し  
 言い勝つてまた反省のひとり酒  
 原点は愛だと反省する看護  
 思っておせばわが人生の誤字脱字  
 この坂を越せば明日が見えてくる  
 終の日へ回しつづける風ぐるま  
 神さまが代弁なさる温い手話  
 単線のレールはとてもおしゃべりで  
 修羅越えて日の丸何も語らない  
 幸せなラスト孫子に担がれる  
 追い越せと父の歩幅がとるリズム  
 河内弁友も地酒もみなぬくい  
 地に還る日まで反省する命  
 命みな土に還っていくラスト

尼崎尾浜川柳会 山田 耕治報

六助 惠美子  
 朝子  
 一風  
 春雄  
 寿美  
 茂雄  
 美千子  
 隆盛  
 孝子  
 恭昌  
 真理子  
 比呂志  
 秋雄  
 弥生  
 富子

打楽器が吠えてわたしを離さない  
 傷心が海を相手に吠えている  
 淡々と年をつないで鈴鳴らす  
 吠えるのは犬だけじゃない妻もいる  
 おふくろと呼べばまばたく冬銀河  
 悔しさを心の奥で吠えている  
 尻尾まいて吠える若者みてしまふ  
 真つすぐな絵筆は赤に憧れて  
 大寒に絵筆は春を描きたがる  
 吠えようと泣こうと神の視野の外

川柳大阪 高木 信醉報

孝一 朋月  
 義芳  
 きよし  
 比ろ志  
 江美  
 求芽  
 全彦  
 鹿太  
 美籠  
 五月  
 章久  
 孝一  
 芳香  
 いっわ  
 ダン吉  
 東吉  
 宏  
 ひろゑ  
 タカ子  
 柳昌  
 善純  
 美花  
 功  
 洛醉  
 重人  
 柳弘

足跡に残すラストの人生譜  
 黄昏に逆縁つらい風が吹く  
 黒豆煮母を越すのはいつのこと  
 人生の幕に生前葬もよし  
 ラストダンス余韻こっそり持ち帰る  
 被爆した日本ばかりがする反省  
 愛妻弁当いいえ子供の手いでです  
 鉄筋をぬいて弁たつ建築士  
 心臓の弁が時々謀反する  
 ラストまで僕と一緒に居て欲しい  
 冷静がラストチャンス物をにする  
 人間になろうと越えた九十九折り  
 来し方を思えば疼く傷の数  
 燃え尽きた笑顔で神に召されたい

博香  
 蘭香  
 カズ子  
 冬葉  
 洋子  
 修  
 春蘭  
 千梢  
 章久  
 弘風  
 太一  
 道子  
 理恵  
 良一

一台の酒で吠えだす弱い父  
 入念に絵筆を洗い空を塗る  
 吠えたものの阿吽には速い一人相撲  
 結べない心の糸がじれつたい  
 おんな二代鯛の頭をせせつてる  
 絵筆からはほえみ届くお正月  
 厳冬は死語にはさせぬ天の意地  
 海が吠え寝つけぬままの宿枕  
 平穩に遠い今年も事件事故  
 屋上の土を見つけた雀二羽  
 笑顔には笑顔を返す初鏡

五月 昭三  
 宏一  
 里江  
 耕治  
 よし子  
 勝巳  
 美代子  
 亀与子  
 イサミ  
 正治

定年後いつも財布に金がない  
 しにくかった姑今は仏様  
 酒のない店で素面の仲直り  
 行き詰まる私の心に歌がある  
 計られたあの日あの時あの言葉  
 ひたすらに汗計算はしていない  
 美醜よりあったかハートに魅せられる  
 白足袋に女の魅力ちらつかせ  
 選挙前増税隠す策するい  
 米泥棒人の苦勞も刈り取って  
 ほんわかと魅力漂うごつい肩  
 時計の針止めたい位今は幸  
 掃除機が消した貴女の歌音痴  
 童謡が認知の母の子守唄  
 五十年夫婦が進む向い風  
 勝てば官軍ゆつくりと水を飲む  
 生きざまはいろいろ死に様は一度

大根とサンマですます安い秋  
モナリザに逢つて一〇分立ちつくす  
両腕を広げ確かさ計る愛

鉄心 かよこ 珠生 笑風

いつだつて笑顔を返すのが魅力  
じいちゃんの湯殿の歌が無事告げる  
夢が肩叩いた秋の日溜りて

喜楽 隆司 幸子

自立する意志で手離す車椅子  
魅力ある話は酒が連れてくる  
赤トンボ歌うと認知母笑う

青道 一步 川童

今日もまたトップが何だか最敬礼  
したたかに計算されていた涙  
義理人情計りはしつかりかけてある

まつお 信醉

大原川柳 山本 玉惠報

インタビュー答える靴もしゃんとして  
足元はトップモードのスニーカー

みづえ 敏夫

スニーカー走りたくなる青い空  
スニーカー弾んだつげが晩に出る

さちこ 地佳平

スニーカーステップ踏んでみる八十路  
試歩の足スニーカーの紐しめなおし

南花 辰子

入学に光る一步のスニーカー  
スニーカー真っ白で出る遍路旅

悦子 喜美子

足軽に履ける重宝スニーカー  
粒選りの剣士大きなスニーカー

巴子 美佐子

スニーカー歩いてほしい父に買う  
スニーカーだけは若いと万歩計

みさえ たつ子

スニーカーに釣られて散歩距離のばす  
危険距離知って飛べないスニーカー

ひでの あすなろ

老人の歩幅を笑うスニーカー  
妻

妻子

スニーカーで心弾んでいる歩幅  
ほたる川柳同好会 水野 黒兎報

玉惠 黒兎

凧の中にふくら梅の花  
日の丸で送った兄が還らない  
頑張らぬ方が成績上げています

勇治 助骨

冬の犬毛皮ふつくらリッチです  
初詣での旗にさせられた妻も古漬に  
雪下ろし雪また雪の屋根の雪

契子 春代

ゆつくりと頑張らないで生きてます  
楽にやれ頑張れよりも結果良し  
トーストがふつくら朝が動き出す

柳童 信男

ふつくら手が握ってる夢未来  
旗を振る妻の後からついて行く  
ふつくらと干した布団に愛がある

久子 桂子

頑張って出来る事ある有り難さ  
母の手の丸みのままによもぎ餅  
二代目はボスの器じゃなさそう

見清 雪子

無理すなを素直に聞ける歳となり  
無柳塔唐津 仁部 四郎報

螢柳 正三郎

里山の春の恵みは熊と分け  
暇な炬燵全部読んでるチラシまで  
新幹線長崎ルートこしばらくのせめぎ合い

晴翠 勝視

無料パス遠距離恋愛苦にならず  
色仕掛けわかつていても渡る綱  
満腹におやまだはいるバイキング

正剣 蜂朗

雑詠といわれて僕は筆を執り

虹汀 水笑

割勘を一言居士がまず納め  
強度偽装ローンの残り二十年  
コヅクリモヘガメマスワトノリノミヤ

四郎 輝夫 高明

川柳塔きやらぼく 福代 天雀報

春枝 初枝

いい便り道草食つてやつて来る  
風向きに逆わず器用に生きる  
風の中めぐり会えは奇蹟かも

雪江 瑞枝

ブルドッグのくせに尻尾ばかり振る  
おおらかな鹿野なつかし友に逢う  
心経百遍愛という字にはかならぬ

やえ 那珂子

ゆらゆらと小舟もねむる船だまり  
息長く続けてプレー輝かす  
お土産がダイソーこれも一〇五円

なみ 寿々子

世の中がこんなに荒れるのはなんで  
八十路坂とうとう来たか腰のばし  
物騒な世間にも鍵をかけ

まゆ 章江

ケイタイがなくても困らないくら  
どか雪が師走の足を迷わせる  
何事も包みかくさず二人住む

恵子 玲子

御慈愛の宮妃最後のありがとう  
逢いに行く約束伏せ字のまま終わる  
百の道教えてくれた百の風

すみえ 日枝子

ボチの瞳はいつも私の安定剤  
京都塔の会 都倉 求芽報

千代 富美子

才能はないが意地なら有り余る  
このポーズ私一番映えるはず  
付合いでポーズとつてるぼたん雪

藤重 輝美

灰汁強い男と知って距離をとる  
言い負けて薬人形は灰になる  
父母と火鉢の灰も遠くたなり

灰皿へ余韻残して去った彼

花咲翁さん灰をまいてよいやな世に  
手に抱う友の遺灰にある湿り

五十年かまどの灰も妻のもの

自治会長の抽選外れてほっとする

くじ引きに減法強い肝つ玉

あみだくじ一本加えて吉にする

運のない方へ方へとあみだくじ

半吉のお告げ多難な春らしい

結婚も貧乏くじと笑う妻

空くじなしボケットテイシユくれ

抽選券足りずに要らぬ物を買う

最強のブラジルくじで引きあてる

命より儲け大事とビルを建て

百歳までの寿命大事に生きてます

逝つたらゴミに分別される宝もの

よく喋るひだが大事は洩らさない

妻の顔に大事な話と書いてある

おおことにならぬあいだに距離をおく

百合子

川柳若葉の会

宮崎シマ子報

平凡に南天の実が赤く熟れ

初詣でほどほどの吉ありがたや

矢面に立ち守りぬくものがある

言い訳をすればするほど矢がささる

矢絰の似合った頃の恋おもう

庸佑

正坊

英子

昌乃

益子

六助

宏子

美義

欣之

きよし

尚士

牛延

則彦

萬的

満子

啓子

高栄

和友

葉子

求芽

弘之

百合子

厄除けの守り矢を手に初詣で  
まだ自立出来ず矢印へと進む  
引いた弓どうにもならぬ放たねば

満身を弓絞るよなめものなし

道徳のくすれ日本の芯ゆらく

うぶみ川柳会

小谷美ツ千報

カタカナの名前の花が増えてきた

砥石では心の垢は落とせない

管理職つけてほとんど天下る

経あげて釈迦尊像のお身ぬぐい

骨切つた名残りを背なに生きている

受け継いだ砥石で親に負けぬ腕

雪が降り地上の垢もほら消えた

ほとんどが愛着あつて捨て難い

切れ味は天下一品の夫でした

長年の垢が災いする右脳

自己分析するとポロポロ落ちる垢

村が市になってだんだん垢抜ける

頭からシャワーを被る朝の願ひ

曾孫が手垢残した金魚鉢

とりあえず帽子被つて汽車に乗る

荒波を砥石におとこ磨かれる

白菜は雪を被つて蜜になる

保有米ほとんど食べずパンを食う

マンネリを砥石にかける私です

風紋は天狗が爪を研いだ跡

あれ以来すつと粗砥にある炎

慶子

欣史子

喜美子

あずき

香住

くにお

黙光

かつみ

よしえ

天雀

天人

和子

京子

和

龍枝

あづま

芳江

雄人

重忠

美ツ千

ひろこ

和枝

螢

修

石花菜

宣子

岸和田川柳会

原 さよ子報

Eメール夫婦げんかで役に立ち

猫だつて癒しの役に立っている

役に立って自分も少し満たされる

役立っていると言う自負持つ元氣

菓立つ子へ妻のへそくり生きてくる

寡黙だが泥をかぶつてくれている

増税で家計見直しおいつかぬ

世界中勿体ないが見直しされ

見直したはずの後ろに嫉糸

見直してあげたい欲しいお互いに

泣き虫の孫を見直す運動会

見なおせど生命線の短い手

見直すつウチの子だった車内キス

結び文昔は粋なラブレター

出来ちゃつて後から結ぶ縁もあり

ある決意靴紐しかと結ぶ朝

面識があるが相手に忘れられ

面識があることとん値切れない

椿の花落ちて空しい風の音

壺坂の五百羅漢に見知り顔

チャイルドが小銭チャリンと慈善鍋

炭小屋で吉良が震える十二月

物置が思いで詰まる宝箱

物置のガラクタ捨てぬおじいちゃん

物置に昔の夢がつまつてる

年一度賀状で結ぶ古い仲

香代

珠子

房枝

ゆい

仁緑

ダン吉

和美

ふみよ

幸子

寿海

守

基

みつ江

洋

榎

蛙城

弘子

東吉

力子

文夫

笑司

浅子

さよ子

穰一

清

狸村

呂万

川柳ささやま

遠山 可住報

折々の花をたずねて一人旅  
 腹の中の色を言うてる精神科  
 七転び八起き目覚めて反省を  
 パーゲンに溜るストレス置いてくる  
 太っ腹見栄が財布の底叩く  
 パーゲンの服で間に合う師走風  
 パーゲンに突っ込む顔は皆元氣  
 買い得かパーゲンの品の品定め  
 パーゲンで買った品物見せあひし  
 パーゲンの時しか買わぬ癖がつき  
 腹割って話そう爛が出来ている  
 めし粒を拾う戦時を生きた腹

純子 美緒子 文子 美紗子 靖子 多美子 開子 照代 かほる つや子 哲男 芳郎 可住

三幸川柳教室

古久保和子報

手を振って駅で別れてそれっきり  
 木枯らしの一足早い無人駅  
 駅からの眺めを変えて町おこし  
 あなた待ったのしさがあり雨の駅  
 過去捨てて男女は始発駅に立つ  
 カラフルなりユック姦し道の駅  
 日々好日終着駅を引き伸ばす  
 旅の駅一期一会の風に会う  
 星屑が降って来そうな山の駅  
 方円に生きて輪廻の駅続く  
 逢いに来た駅で理性を取り戻す  
 年金で大中小の宿浴衣

昇子 信子 幸夫 宏夫 三千子 徑子 登美代 当代 武 碧 みね 孝義

夕食が家族の絆紡ぎだす  
 ゴシップが大好き女系家族の輪  
 猫一匹家族と呼んでワンルーム  
 家族にも偏差値がある大所帯  
 病人ができて家族の輪が歪む  
 子沢山母は背中目があるの  
 悪口を言う元氣になる家族  
 ごった煮の家族に染まる同じ味  
 子は塾でママはエステでパパごろ寝  
 四世代炬燵の位置が決まってる  
 絵のような家族があった古写真  
 お茶碗が順に大きくなる家族  
 斜めから見れば喜劇になる家族  
 三輪車押して押すなと自我芽生え  
 大国の都合で生んでいく憎悪  
 初孫へ家族禁煙強いられる  
 誕生日忘れた母のわらべ顔  
 生者必滅祈りは深くなるばかり

一歩 起世子 町子 義雄 桂香 かず子 章子 公子 准一 イセ 幹子 和子 朱夏 かすみ 次根 智三 保州 千秀

西宮北口川柳会

黒田 能子報

未来図にはばたく孫の空がある  
 老いてなおはばたくてイヤリング  
 はばたく日の孫を夢見た預金帳  
 はばたい二人何ではばたこ新年だ  
 良い人と言われはばたこお人好し  
 はばたいて地球の裏でピアノ弾く  
 噂にはならぬ位は儲けたい  
 朱の章を一途に舞って椿落つ

たず子 江美 てる 順子 開子 一之 奮水 哲男 美代子

仕事ひとすじ嫁にいくのも忘れてる  
 雪深い一途に思う屋根の雪  
 一途さが時に重荷となることも  
 惚けまいと一途にはげむ趣味の会  
 手習いを一途にしている残り旅  
 二年越し愛の賛歌を書き上げる  
 開けゴマ今年はきつと福がくる  
 能弁へ心開いてきつといいき  
 封筒を開くと妻のさようなら  
 何かあるはずだと聞く冷蔵庫  
 胸襟を開いて無一の友となり  
 初詣でみんな幸せそう顔  
 風上げて休耕田は甦る  
 脱線はジヨーク以外はやめてくれ  
 儲けたら指輪買うたるそれっきり  
 大根の白にも自負の艶がある  
 快晴の元日お墓も機嫌よい  
 道草を食った分だけ角が取れ  
 ひとりひとり思い浮べて見る賀状  
 丁寧な日本語人れ歯美しい  
 明けましてと来年も書きたい命

千代 トミエ 鹿太 五月 松煙 孝一 房子 文 忠 朋月 昭三 正和 歳子 二英 石舟 比る志 求芽 光久 美籠 富喜子 和子

川柳茶ばしら

板山まみ子報

人力車夫婦の旅にある平和  
 つけて消し消してはつける灯油高  
 灯油高懐寒く音を上げた  
 この店もシニア相手でないらしい  
 テーブルを足して子等待つ春の膳  
 やつと出た芽だ焦らずに水をやり

秀水 八木 幸子 文男 かつ子 美千代

定年で釣三味のはずだった  
楽しみをいくつか持ってスケジュール  
まみ子 盛夫

南大阪川柳会

吉川 寿美報

ひと皮むけば私は宇宙人  
スマイルをたやさぬ試練わたし流  
重人

電話口わたし私でわかる仲  
なぎさ

(吉) 修

愛想笑いするたびわたし消えてゆく  
楓 楽

産声へ描く父の地図母の地図  
三男

町内地図我が家を探す虫眼鏡  
珠美

世界地図やはり日本はいいところ  
シマ子

子どもには大人の知らぬ地図がある  
千梢

初めのお使い地図を握りしめ  
庸 佑

古い地図はくち池の埋め立て地  
弘 泰

登下校にビリビリさせる赤い地図  
柳 弘

悪いけど男は乗れん専用車  
柳 伸

薬より困む笑顔が効いてくる  
章 久

困まれて恋が芽生えるカルタ取り  
ダン吉

困まれた海を粗末に生きている  
郁 夫

竹囲い嵯峨野に映える細雪  
憲太郎

ストープ列車囲んで女話好き  
志華子

赤ちゃんを囲む皆のいい笑顔  
萬 的

常識の範囲で治め和を保つ  
ひさ乃

(福) 修

困まれて最高を咲く寒はたん  
集 一

診療所いつもの顔が座る椅子  
朝 子

わが家の椅子やさしい妻のお茶が出る  
直 子

たもつ

ゆずられる車内の椅子は温い  
窓際の椅子は力むと音がする  
悪友はあの人と言う妻同士  
チャイム押し逃げる悪さを憎めない  
来年の地図に書き足す夢一つ

長 柳 会

村上 直樹報

絵模様の賀状によぎる恋のあや

美術館しつと論ざれ黙り込む

母さんへはがき一文字親孝行

新鮮な風いれにくる若い嫁

次々と喪中のはがき胸をつく

沈黙が一番強い鉄の壁

新年の最初の出費お年玉

友情をつなぐ証の葉書くる

新春へ花芽忘れぬ沈丁花

待ちわびて友の近況知る年賀

不機嫌な父は黙って席を立つ

お年玉運用先を子に聞かれ

友からの葉書が誘う古希の会

新しい風を纏ってくる元旦

妻黙るワインとチーズ準備する  
給葉書ももらってからの恋しぐれ  
愛妻が新茶摘み取る里の春  
愚痴ひとつ消して新たな年迎う  
百八の煩惱乗せて除夜の鐘  
母からの言葉古いが新しい  
埋み火を煽る賀状の女文字  
来るはずもないと知りつつ待つ賀状

タカ子  
千里  
利 昭  
更 紗  
頂留子

直 樹

明 信

マ サ

靖 子

輝 子

も こ

美代子

正 一

三和子

不二雄

ひろし

正 博

英 美

一 慧

史

新聞に半日漬す好奇心  
はがきならさらりと書ける淡い思慕  
一枚のはがきに鬱が救われる  
悪筆の母の賀状にある温み  
鉛筆書きの孫の賀状は宝物  
妻の前僕は時々貝になる  
これ以上言えば傷つく人がいる  
寝たきりへはがき絵を描く愛と哀

はぎきの市民川柳会

徳山みつこ報

雪の朝物音全て消して明け

百年後空から降るは黒い雪

人間の知恵を試しにくる吹雪

オシッコで雪に落書きしたあの日

被災地へまだ悲しみが降りつもる

権力や金にも媚びぬ雪は降る

山と雲四季それぞれ味を見せ

少しづつ四季がずれてる怒ってる

名利と味覚楽しむ古都の四季

早足で移ろう四季を追う余生

あれこれと思うばかりで暮れて行く

年末は古希の男もいそがしい

またくるの年末なんていらぬわ  
年末に諭吉揃って出たまんま  
第九聞く九条世界にと思う  
壺の手が抜けぬ師走の掴み取り  
それなりにけじめ付けたい年の暮れ  
昼間にも闇の世界は動いている  
闇の空ライトに映える天守閣

武 男  
幸 雄  
正 子  
和 代  
敬 二  
淳 司  
よしお

和 子

章 司

真 一

かつみ

いさお

扶美代

光 男

猿 杏

喜久子

庸 佑

泰 子

アヤ子

敏

静 子

ヨシ枝  
ダン吉  
一 知  
志 洋  
昭 平  
たけし

闇夜にも二人の胸に灯がともり  
 闇闇を消した発光ダイオード  
 正論を吐いて闇討ちくらいそう  
 いつの世も真相だけは闇の中  
 暗がりでも握り返してゴールイン  
 闇から覗く明日に明るい陽が映える  
 闇にいてじつとチャンス wait している  
 映画館誰かが軒かいてる  
 気分よく居眠りできたロードショー

川柳塔わかやま吟社

牛尾 緑良報

謝っていれば続いていた絆  
 語り部があつてアルバム生き返る  
 日の丸がはにかむようなお正月  
 充電の母との絆さとの春  
 切れそうな絆を今日もあたたためる  
 あらためて絆を深くする介護  
 絆編む老いの加減がむずかしい  
 激論を交わして深くなる絆  
 名乗れない義理の親子という絆  
 褒められて絆だんだん太くなる  
 アルバムの中で止まっていた時間  
 閉じ込めたはずのアルバムから発火  
 アルバムではみんなの手をつなぐ  
 アルバムに並ぶ亡夫への鎮魂歌  
 アルバムの虜になって小半日  
 自叙伝の代りアルバム喋り出す  
 アルバムへときめいた恋埋めてある  
 人生の縮図アルバムみな喋り

りつえ 美喜 六點 一壺 耕策 吐来 みつこ 美代子 恵勇 輝子 よしこ 学 稚代 保州 英子 准一 智三 三喜夫 大輪 小りこ よ小雪 和香 正博 和子 富美子 佐一

アルバムに心を許す顔もあり  
 日の丸の下でピエロの芸はせぬ  
 日の丸に春の音符が弾み出す  
 パンザイが一番似合う日の丸だ  
 日の丸の波に揉まれて征つたきり  
 心象に日の丸がまだ血の色で  
 日の丸の未来へせめて子たくさん  
 親方日の丸も居りませぬ民営化  
 リムジンに日の丸立って靖国へ  
 日の丸の旗から転げ出た自由  
 日の丸に後事託して散つた夢  
 個人情報わたしは知っている絆

川柳ねやがわ

森

反省は刺客にやられ落ちたこと  
 反省を袋につめて除夜の鐘  
 うなぎ屋に守る秘伝のタレがあり  
 欲のない暮らしに守るものは無い  
 アメリカの言いつけ守る被爆国  
 年金で三食だけは守られる  
 信号を守ると会社遅刻する  
 きつちりと退社時間は守ります  
 友達の暮らしでは守るのも限度  
 指先で暮らしを守る点字の書  
 お守りがたんとあるけど不仕合せ  
 身を守る仕方を知らぬ子に狂気  
 腐葉土になって律気に森守る  
 守るものなくて気楽と負け惜しみ  
 男と女守る価値には誤差がある

豊太 朱夏 裕美 三男 あきこ 泰女 紀久子 克子 さち子 順子 緑良 茜報 三郎 博泉 九好 集一 高栄 かすみ 勲 仁清 柳弘 一炊 ルイ子 弘風 たもつ 弘一

千万の世代背負うて来た文化  
 網棚で不審がられている荷物  
 象と蟻猫ペリカンも荷物好き  
 荷物より諭吉がいいと顔が言う  
 荷物解き地方新聞目を通す  
 お荷物にならぬ程度の愛がいい  
 掃省の児ケロリと荷物着払い  
 嫁く荷へ親の思いの積み切れず  
 過去形にしてから荷物軽くなる  
 肩の荷を下ろし私も風になる  
 ゴールまで亀には亀のペースあり  
 ゴールには母のカメラが待っている  
 今もなお西田哲學五里霧中  
 阿波踊りするロボットも出来るかな  
 世の中が寒くて心着ぶくれる

豊中もくせい川柳会

江見 見清報

大事な傷は浅いと見た誤算  
 裏口をそつとあけてく下心  
 組んだ手をコートの中が暖める  
 雲の峰大事な方へ恩返し  
 いい人となぜか言われて騙される  
 久しぶり少し飾つて友と会う  
 今年こそアルマに目玉入れてやる  
 息子だけが年玉もらう面映ゆさ  
 影だけが味方だったと知つた悔い  
 この歳でなぜか女難の相がある  
 大事です空気のようなこの家族  
 運が来ず線を入れたくなる手相

鈍甲 頂留子 勇太朗 れい子 さち子 利昭 とし子 一風 郁夫 忠央 庸佑 桂作 日出子 朝子 庸佑 重人 啓生 春 和子 慶子 高栄 幸雀 満寿巳 尚士 巴子 玲子

厳しさがなぜか失せてる子の躰

持ち上げたお餅の下にある地球

箏太鼓なぞか恋しい村祭り

老いたなと思う五勺の酒で酔う

心というたつた一字にある世界

昭和史の語り部大事楚楚と生き

亡母の倍生きて面影想い出す

ちよっぴりと皮肉も入れてある笑い

書道展金のかかった字が並ぶ

大事です一つ残った僕の愛

お大事に医者が病気で休診だ

国民は眺めるだけの迎賓館

非戦論吐いて喧嘩は売る総理

字を書くとコンプレックスがつてる

不合格返して欲しいお賽銭

ときめきをいっぱい入れて貼る切手

八尾市民川柳会

宮西

弥生報

隆

美義

都代子

石舟

比ろ志

郁子

知香子

萬的

正坊

勇治

見清

則彦

寅次郎

寿美子

早人

求芽

春蘭

柳伸

あかり

浩三

シマ子

一風

ますみ

幸生

欣之

秋雄

直子

柏手に深い欲の音がする

小半日生きたいいな雪だるま

プレーキの甘い女で通い詰め

思い出もかしてゆくよな春の雪

駆け引きの中でふところ寒くなる

プレーキの効かない夫と旅に出る

ふところはいつもほっこり冬の底

あかつき川柳会

森村

美花報

他人事と思わぬ二度も列車事故

花束がいくつになっても似合う人

花束もうすすす知っている左遷

職安に置いてきました花束を

栄光が一段光る花の束

花束にトゲを抜かれた薔薇が居る

温暖化地球の鮮度落ちてゆく

七〇歳まだ新鮮な私です

天声人語とれとれの朝意味する

産直の野菜に皺の手が競う

採りたての野菜の甘味知りました

鶴の句碑建立誓う年初め

言葉越えた交流だったのは笑顔

姉菌さんあなたの家は大丈夫

イラクよりも救ってあげたい被災国

助けてと叫ぶ練習する園児

青空が見ていた手抜きするマンション

イラク戦まだ正当化するプッシュ

岸壁の母も九条護持します

公園に子供がいらない冬休み

宏至

美代子

高栄

レイ子

民

はじむ

弥生

美花報

タカ子

美世子

修

良知

シマ子

真理子

祥昭

美智子

柳弘

富美

美花

正

ダン吉

幸泉

保州

裕美

ひさ乃

東吉

北朗

涼子

良くなった景気が見えぬ台所

止まらなくなった国債輸転機

九条へ性根問われる戌の年

園遊会きつと無毒の人ばかり

震度五で倒れるビルの隣に居

税金で偽装の始末するらしい

九条を孫子のために守りたい

強度偽装日本国はどうだろう

手を引くと世界の声が舞うイラク

逆三角形が重いこの国の未来

わかあゆ川柳社

松本はるみ報

旅靴きつと風呂敷入れておく

駆け足で一年が行きやがて春

妥協した胸に本音は仕舞いこみ

折鶴を折る指先に見える明日

人間の本音聞いている聴診器

百均のテープで止める隙間風

耐え兼ねて鳥賊は本音の墨を吐き

処世術本音はあんこの中にある

老松が揺れて揺らされ今も生き

川柳塔まつえ吟社

三島 淞丘報

春の土手ベットの走るランドセル

老いの愚痴ベットがじつと聞いている

地震でもベットは主を探しあて

ベットでも責任もつて飼いたいね

飼い主へベットのお世辞言っておく

十二支にもれた三毛猫抱いてやる

一步

扶美代

たもつ

六助

蕉子

重人

敏

正坊

鈍甲

英一

仲子

聖子

はるみ

恵美子

好栄

ちよえ

かつ子

博利

清泉

ちえこ

紫晃

小生

喜美子

静恵

蘭



香水につられ二次会三次会  
ちびた靴履してくれる縄のれん  
観音様拝む足音雪凍る

口にせず呑んだ一語が胃に溜まる  
ふわふわと噂の種が風に乗る

ひと雨ごともうすぐそこに早春賦  
縄のれん人の気持がわかる酒

からっぽの瓶をさかささにまだ飲む気  
騒がしい人ではほんとは淋しがり

このハート揺らしたけれど報われず  
風船が風とのワルツを踊つてる

耳朶に一寸香水つけて母の洒落  
いつも会ういつもの席で縄のれん

縄のれん上司の愚痴を言いにくる  
縄のれん頭突きで入る通がある

相聞にさまよいくる縄のれん  
新成人シヤナルほのかに夢を追う

尼崎いくしま川柳会

春城武庫坊報

雑種だがうちでは一番出来が良い  
手を合わせ拝む幼子何願う

雲動く拝むかたちの母に成る  
大当り電話口から福の声

福娘しるこの好きな可愛い子  
福袋まだ買ったことありません

またひとつ歳重ねたなあ屠蘇を酌む  
二人生きてる初日光の中に佇つ

汚れなき新雪を踏む悔悟

とみ  
令子  
和香  
和美  
芳子  
富美子  
信博  
みやこ  
貞夫  
俣子  
房枝  
珠子  
悦子  
年子  
里子  
蛙城  
洞庵  
孝子

武庫坊  
純

数の子やうかうか馬齢重ねしを  
病みたるは地球か吾か雑煮食う  
こぼれ萩ひとの噂は言うまいぞ  
通院の連れ欠けてくる冬の底

翠洋会

谷口

明日目が覚める保証は誰もない  
夜が明けてきれいなさっぱり忘れてる

明瞭な答えがほしいお月様  
明日あることを信じてよく眠る

是が非でも今年の漢字明にする  
真ん中に明るい母がいてぬくい

財産は家族元気で明るい輪  
明るさの裏の素顔に気づかない

お洒落してもえ立つ心蝶となる  
落葉散り燃えた命も地に還す

同じ夢もつて未来を誓いあう  
大空に燃えつきるよう散つた友

女にはもてたことない血筋です  
怒つてもめめるテレビチャンネル権

お互いに凭れあつてる父と母  
終りなく求め続ける茶の奥義

男なら持つて欲しいわ知恵ちから  
初日の出私の未来問うている

十錠をこす錠剤と生きている  
講演会笑おう生きている限り

独り住む涙は涸れて強くなる  
途中下車出来ぬカルテが睨んでる

福娘めあてに並ぶえべっさん

薫  
半蔵門  
芳子  
年代

義報

楓楽  
日の出  
れんげ

集一  
孝一

石舟  
志華子  
みつ子  
水昇

富子  
理恵

正坊  
恭昌

正雄  
満作

捷也  
蕉子

舞夢  
千歩

さと美  
照子

春  
会美

会美

孫の元氣去年に優るお年玉  
狡いこと許すわたしもずるくなる  
寒さ増し人が恋しいはぐれ雲  
少子化のお子様ランチ甘過ぎる

見解の相違温度差うまらない  
釈明をすればするほどボロが出る  
落ち椿足のやり場を考える

富柳会

池

森子報

尻尾振ることが嫌いで野良の犬  
諦めた数だけ長いシルエツト

男も菓子も甘すぎるのは要注意  
大笑いして体内の毒を吐く

大掃除したい地球に住んでいる  
許そうと決めて明日を組み立てる

しつぱ振るロボット犬に監視され  
神様がプラリー私を消しにくる

ここだけはいつもの秋で深呼吸  
失敗をさほど気にせぬいい女

あるだけの絵の具を塗って諦める  
ここはあかんと貧乏神が出て行った

尻尾まで鉛こ詰まって肩が凝る  
さよならの尾灯は青い句読点

風の子の光散らして夕枯野  
金魚には金魚の掟尾を振つて

まだまだと祈りの石を積み上げる  
知恵の輪を少し開いた十二月

温暖化人の情けも生ぬるしい  
スタートのおくれが拾う時の運

絹子  
桃花  
すみ子  
希久子  
美籠  
尚士  
千梢

信子  
鬼焼  
萩乃  
ひろこ  
春蘭  
深雪  
巳代一  
奈保美  
扶美代  
よりこ  
紅紫明  
彦次  
アキ  
鐘造  
一和  
和子  
淳司

ひとつずつ欲を放していく命  
たとう紙を開ければあのときが戻る  
小遣いの額で小さな趣味をもつ  
栓を抜くたつぷり涙いろの泡  
妻よりも激しく残す爪の跡  
台風の中彼には妻がいた  
両の手に愛を探せば深い森  
台風が目がわたくしを睨んでる  
身銭切れ頭も切れる課長補佐  
どつぷりと首まで染める冬の景

倉吉川柳会

竹信 照彦報

酒五勺くらって今日も大酩  
二千六年も君を愛して愛される  
大きな服買って子供に二年着せ  
大根が雪と白さを競ってる  
いつの間にも大きくなった孫の靴  
大物になるまで出てゆく並でよい  
大風呂敷広げて見たがためない  
脳みそを寒晒して練り直す  
金のない男が遊ぶ策を練る  
政治家の口に入りたい練りワサビ  
作戦を練っても負ける猫の知恵  
ラフレターなんとも練った跡がある  
言い訳を練れば練るほど見苦しい  
壁土を素足で練った物語  
正月を練り絹まとい改まる  
さて誰を飲み込もうかと波頭

欣之 伸雄 隆彦 哲史 正典 あり 奏子 冬虹 高鷲 森子 幸子 螢 日出子 賀寿恵 重忠 勝誉 紀和子 石花菜 季芳 次男 龍枝 喜美子 悠子 よしえ 風露 完司

欲望よ波が生まれて消えるだけ  
いら立ちを波の立たないよう仕舞う  
ライバルの白波高くやってくる  
ブラジャーが豊かな胸を波うたせ  
和解して波は静かに打ち返す  
ミィハーのままで波風たてぬ日々  
愛燦々受けて梢は伸びて行く  
やんちゃでも可愛いですと若いママ  
愛の深さ確かめる如雪を踏む  
病床へ小さな嘘をこれも愛  
病む母へ家族の愛が光り出す  
愛もまた空なりと説くお釈迦様  
食品も物も溢れて愛寒い  
政治家が練ると税金高くなる

川柳塔みちのく

小寺

花峯報

大寒を一気に駆ける呱呱の声  
いよいよと身構えておく肩たたき  
雪国で雪に吞まれて春を待つ  
雑煮よりお屠蘇が好きかな総入れ歯  
忘れん坊いよいよ認知症となる  
大寒を裸祭りて受け入れる  
星影もぐい呑みにする大ジョッキ  
大寒に後藤伍長が下りてくる  
腑に落ちぬ言葉を呑んで貝になる  
ひと呼吸おくと変っている手酌  
守る子が居てかじかんだ手は見せぬ  
入れ歯にも野望がこびり付く雑煮

修 芳光 ひろこ 泰輔 睦子 萩江 節子 康子 克枝 和枝 鬼一 照彦 朴人 誠子 洋子 あすなろ 順風 雅城 花匠 井蛙 ふさゑ 銀波 黙人 花峯

二世帯で老母の雑煮の冷めぬ距離  
餅肌と共に食いされる雑煮餅  
大寒の口に蕩けるスチューベン  
真冬日の笹が一つ還らない

川柳塔打吹

野口 節子報

悪人は酒を飲んでも潰れない  
奥の間で交わす酒には気を遣う  
用を足す他はこたつで酒浸り  
点滴をしながら酒の臭い嗅ぐ  
酒飲もうはいはいはいとすぐ決まる  
酒のない世でも暮らせる自信ある  
献身の夫婦揃って断酒会  
お酒五合のむと阿弥陀様になる  
酒だつて吞まれる人を選びたい  
記憶なし酒が濡れ衣着せられて  
アツあつの焙焼食って策を練る  
ヒステリー通過まっしか策はなし  
日本で万策尽きてアメリカへ  
十士家に任せて船を漕ぎ出した  
氏神の賽銭箱に見張り役  
護身策はつくり寺の護符を持つ  
策立たず痛みと腫れに貼り薬  
策の無い相手で味気なく思う  
金策に出た父さんが帰らない  
内豪を潜って愛子姫攫う  
口開けて春が来るのを待っている  
旅先で一期一会の幕が開く

慕情 一花 五楽庵 芳光 睦子 三津子 貴恵 茂夫 龍枝 京子 重忠 泰山 滋 螢 清 美美子 幸子 禎元 玲子 和子 かつみ 和枝 石花菜 完司 美知江

新聞を開いてたむのが特技  
 心眼を開いて見えて来るものは  
 玉手箱覗きたくなり蔵開ける  
 しあわせを開く夫婦の助け合い  
 風呂敷を開いて福を包み込む  
 開運の願いを込めて初詣で  
 懐もだんだん開く春日和  
 結んで開いてあつと言つ間におぼしさん

堺川柳会

河内 月子報

ビールかけ元氣二倍で景氣呼ぶ  
 美しいうちに振らねばならぬ旗  
 フォールボール掴むグローブ持つて行く  
 トラ景氣四連敗が水を差し  
 トップとは辛いものだな胃の痛み  
 格好いい兄貴と呼ばれ眠られず  
 応援の旗を茶の間で振つている  
 弾丸となって兄貴の球がとぶ  
 金本に負けぬ親父の無欠勤  
 ナイターの明かりまぶしいホームラン  
 金色に輝きを増す赤い星  
 阪神の鉄腕アトム揺ぎなし  
 頼りたい兄貴こつそり泣いている  
 ここ一番兄貴責任感じすぎ  
 優勝のオフお座敷がよくかかる  
 兄ちゃんが割つてしまった初水  
 茶の間監督父さん騒がしい  
 元氣だと黄色い旗が出してある  
 来年はふたつの旗の御堂筋

照彦 克枝 善江 小生 紀美恵 公恵 孝恵 節子  
 公誠 鐘造 世紀子 八千代 朋月 日の出 さくら 天笑 好梓 時雄 冬虹 なぎさ 健吾 竜之介 潤子 淑子 篤子 像山

この頃はいい風吹いて景氣よい  
 ドームより浜風似合うタイガース  
 変化球ばかりで生きた強かさ  
 負けた日も虎ディリーのトップ記事  
 満足をしたのか風船が消えた  
 六甲おろし唄い二人の景氣つけ  
 優勝の風船くる病床に  
 直球でいけと茶の間の評論家  
 ブランドショップも百貨も売れてます  
 ダメ虎に無償の愛を貰いた  
 一族の旗が元氣に風を切り

川柳エスポ

山本 三郎報

プライドが邪魔して好意受けられぬ  
 手作り野菜そつと玄關置いてある  
 さりげなく氣遣う好意身に染みる  
 つつましい生き方に合うわたし  
 辛酸の試練を生きて丸くなり  
 好きでない青汁飲んで今日を生きて  
 たつた四歩歩けた妻を抱きしめる  
 都合よく忘れたことにして生きたる  
 都合よく忘れたことにして生きたる  
 ヘリコプター低く飛ぶ日の不吉感  
 眞実は飲み干してから切り出そう  
 生きてるか竹馬の友の電話です  
 考える輩はゆれつつ生きている  
 消えやらぬ悪夢涙の献花台  
 とおせんぼする人多く生きたくない  
 抱きしめる子供の温み柔らかかさ  
 列島の揉める小島が彼方此方で

伸子 月子 清晋 願 舞夢 かりん 扶美代 玄也 幸雀 りつえ

ああ悲惨な災害故の地獄絵図  
 携帯はドラマの中の主役です  
 夢にみる私もほしい万馬券  
 米作り八十八の苦勞あり  
 寝込まずして寿命いっぱい生きる日々  
 流れ来て川辺に生きる草二つ  
 初対面好意を持って一目惚れ  
 ご好意は素直に受けてありがとう  
 深呼吸生きたる力が湧いてくる

むらくも川柳会

毛利 幸報

思い切り初日をぐつと胸に抱く  
 幸せを心に願う初日の出  
 初日の出今年こそはと細きメモ  
 元旦の初日拜んで福を待つ  
 初日の出今年も夢の中で見る  
 旧姓の思い出楽しくクラス会  
 来し方を辿れば父母の途に出る  
 安らかに眠れと祈る昨日今日  
 茶柱が希望をもたせてくれる朝  
 家族みな朝寝楽しむ日曜日  
 人生の余白を埋める酒の虫  
 冬山へ無事を祈つて母がいる  
 待つただけ幸せけると想います  
 みずみずしい肌に戻れぬ老いの肌  
 一言がやたら氣になる日記帳  
 亡父の忌に集う去年と同じ顔  
 紅葉狩りしぐれて急ぐ大山路  
 絵手紙の見舞いがとどく晴れた朝

三重 昭一郎 晩翔 よねぞう はつよ 鈍甲 恵美子 さち子 三郎 幸報 彰 幸 安男 英男 美保 俊夫 秀夫 かずこ 恵美子 ます美 義良 明朗 信夫 定子 喜美 昭子 秀子



## 中後清史氏を偲ぶ

牛尾 緑良

らのプレゼントとして誕生しましたが、愛情に溢れた親子の交流を見逃せません。

背く日があるかも知れぬ子の笑顔  
花束をもらい娘をさらわれ

奥さんにも温かい目が向いています。

妻の手を一度ゆつくり見てみよう

やすらかな妻の寝息を聞く安堵

まだ妻に指輪を買ったことがない

子供さん達の成長を見守りながらの晩酌こそ至福のひとつだったのでしょう。みんな

で楽しむことはもっとお好きだったようです。医大に入院されてからも看護師さんの協

力で川柳大会を開催するなど、川柳への意欲は並々ならぬのがあったと感じます。

水中花水から出たい日もあろう

長旅の苦を語らないさ、れ石

車座が好き人間が好きだから

人を愛したより以上に回りからも愛された

中後清史氏のご冥福をお祈りします。合掌

弔 吟

車座の中にあなただを囲む句会

魂は軌跡の中に生き続け

信じられない別れ冷たい風を抱く

美しい軌跡描いて流れ星

川柳も酒もタバコも連れていけ

夕胡

夕胡

夕胡

夕胡

孫が来て継ぎ足してゆく余命表

買いそうな貴方を選ぶご招待

句会でお会いする中後氏は物静かで思慮深い方でした。句はお人柄そのもので誰の心にも染み込む説得力がありました。わかやま句

会の年度賞のひとつ、平成七年の「あおい賞」

第1位を

矢面に立つ羽目になる読み違い

の句で受賞されて居ます。平成十一年には、

「はまゆう川柳会」を代表して第7回和歌山

県川柳大会で選者を担当されるなど、足跡を

残して来られました。平成七年からは次女の

夕胡さんもわかやま句会に誘われ、揃つての

句会参加を楽しまれていたようです。

夕胡さんは昨年の国民文化祭福井大会で特

選に入賞されるなど、中後氏の遺伝子は確実に活動を始めています。

しっかりと受け継ぎましたDNA 夕胡

喜寿記念句集「軌跡」は三人のお子さんか

そと抜け出さねば孫がついてくる

一喝がほしくてわざと背を向ける

野草からもう幼い日の香り

# 第30回 全日本川柳2006年岩手大会

日時 平成十八年六月十一日(日) 午前十時開場  
 会場 岩手県花巻温泉ホテル千秋閣  
 〒〇二五-〇三〇四 花巻市湯本第一地割二二五

交通機関 J R新花巻駅から車で25分・J R花巻空港駅 花巻駅から車で20分  
 宿題 第一部(事前投句)  
 一般部門 四月十五日締切

「星座」西湯賢一郎選 「コイン」黒沢かかし選  
 「地酒」本田 智彦選 「高原」松岡恵美子選  
 ジュニア部門(小・中学生) 締め切りしました

専用用紙のない方は、2×16cmの句箋一枚に一句宛記入・各題二句・無記名、封筒の裏面に住所・氏名明記。  
 投句料 一、〇〇〇円(定額小為替・現金書留)を同封して左記宛  
 郵送のこと。

投句先 〒530-0041 大阪市北区天神橋二丁目北一―一九〇五  
 (社)全日本川柳協会 宛

TEL〇六(六三五二)二二二〇 FAX〇六(六三五二)二四三三

宿題 第二部(当日投句、十一時十分締切)  
 「もてなす」ふじもみどり選 「鬼」森中恵美子選  
 「匠」大野 風柳選

第二次選者 磯野いさむ・植木 利衛・塩見 草映  
 福岡 竜雄・米島 暁子  
 各題二句当日配布の句箋に記入

会費 四、〇〇〇円(昼食、記念品含む)  
 表彰 (1)文部科学大臣奨励賞 (2)参議院議長賞 (3)川柳大賞  
 (4)大会賞 ジュニア部門は賞状とメダルを予定

大会賞

(社)全日本川柳協会大会委員長 磯野いさむ  
 全日本川柳岩手大会実行委員長 佐藤 岳俊

## △表彰式典・前夜祭ご案内

◎表彰式典 平成十八年六月十日(出) 午後六時  
 (功労者・平成柳多留入賞者・大会十年連続出席者)

◎前夜祭 表彰式典後、同一会場に於いて

会場 岩手県花巻温泉ホテル千秋閣

〒〇二五-〇三〇四 花巻市湯本第一地割二二五

参加費 八、〇〇〇円(会食・アトラクション)  
 TEL〇一九八(三七)二二五〇

大会・前夜祭のお問い合わせ先

〒〇二八-一三〇九 岩手県紫波郡紫波町北日詰大日堂十八―一  
 熊谷岳朗 方 日川協岩手大会事務局 宛  
 TEL・FAX〇一九(六七六)三七五一

大会・前夜祭参加費の送金先 四月十五日締切

郵便振替口座番号 〇二二二〇一―二四四二六〇

## △宿泊・観光ご案内

宿泊 岩手県花巻温泉ホテル千秋閣

宿泊料金・一泊朝食付・税込み 五、五〇〇円〜九、〇〇〇円

一名一室希望の方はその旨記入して下さい。

観光 高村山荘・高村記念館・歴史民俗資料館 他

六月十二日(月) AM九時〜PM三時 八、五〇〇円  
 (昼食11名物「わんこそば」)

申し込み二十名以下の場合中止または料金変更にて実施します。

宿泊・観光の申し込みは別紙(ハガキ)申込書に記入し、ご送付下さい。

四月十五日必着です。

宿泊・観光の問い合わせ先

JTB東北花巻支店 担当者・平賀 聡

TEL〇一九八(二三)六三二一 FAX〇一九八(二四)六三八二

# 柳界展望

○出雲総合芸術文化祭川柳大会は、11月26日開催。

へ出雲市川柳連盟賞

懐の雲を眺めている独り

新家 完司

スロースローマヨネーズの

知恵を絞る 川本 畔

○阪神タイガース優勝記念

川柳大会は、12月11日道頓

堀くいだおれで開催され

た。当日の本社関係者天位

満足をしたのか風船が消

えた 太田扶美代

頼りたい兄貴こっそり泣

いている 津守なぎさ

一族の旗が元気に風を切

り 河内 月子

来年は天まで揚げる虎の

旗 山岡富美子

○第26回鳥取県川柳作家協

会賞受賞者は次のとおり。

へ日満賞

神さまの死角にいても手

を抜かぬ 岸本 宏章

へ日満賞準賞 深田 俱久

○南大阪川柳会17年度ベス

ト5は次のとおり。

①小谷集一 ②吉岡修

③鍛原千里 ④前たもつ

⑤大内朝子

○京都塔の会年間多得点賞

は次のとおり。

①都倉求芽 ②榎本宏子

③西村益子 ④藤井則彦

⑤大野百合子

○川柳塔なら17年度最優秀

句は次のとおり。

なんべんも泣いて笑うた

靴の底 大内 朝子

○高槻川柳サークル卯の花

17年度優秀賞は次のとおり。

①太田昭 ②穴吹尚士 ③

笠嶋恵美子 ④一階八斗録

⑤坂本晴美

○城北川柳会17年度トップ

賞 津村志華子

○西宮北口川柳会では、平

成17年度年間賞を次の通り。

へカップ永久保持者

門谷たす子

へ優秀賞 ①内は順位

①西口いわゑ ②奥田みつ

子 ③黒田能子 ④田辺鹿

太 ⑤門谷たす子

▽会長交替△

○岸和田川柳会は1月より

長谷川呂万氏に変わり、井

伊東吉氏が会長に就任。

## ▼計 報▲

○ふあうすと川柳社主幹、

泉比呂史氏は1月6日肝不

全のため逝去された。享年

75歳。本社から天笑主幹・

岳人理事長・みつ子副主幹・

奮水氏が葬儀に参列した。

## 新同人紹介

堀ほり 正まさ 和かず

升ます 成なり 好よし

奥おく 時とき 雄お

—天笑・月子・玄也推薦

## ▽訂正・削除お詫び△

1月号 4頁下段3行目、

一本の道で…を削除

2月号 90頁中段17行目、

皆↓背 91頁上段9行目、

町の灯り↓街の灯り

○17年度本社句会皆出席者

追加—米田恭昌

常任理事会 2月7日 出

席者18名 ①規定・規則の

改正案提出—3月に再検討

②各地川柳会代表者会議2

月18日について ③950号誌

上大会進行状況 ④同人承

認3名 ⑤その他

次回常任理事会 3月7日

(火)9時30分 アウィーナ

句会名	日時と題	会場と投句先
西宮北口 川柳会	13日(月)午後1時から レンズ・気まま・消す・自由吟	西宮市立中央公民館 阪急西宮北口駅南出口徒歩3分 プレラにしのみや 〒663-8202 西宮市高畑町2-82-308 西口いわゑ
尼崎 尾浜 川柳会	14日(火)午後1時から 人形・出世・自由吟	尼崎市立立花公民館 尾浜分館 事務所 〒661-0976 尼崎市潮江5-2-47 田辺鹿太
ほたる 川柳 同好会	14日(火)午後1時から 信号・揺れる・つらい	豊中市立蛭池公民館 阪急・モノレール 蛭池駅駅前ビル5F 〒561-0813 豊中市小曾根2-4-1 水野黒兎
高槻川柳 サークル 卵の花	16日(木)午後1時半締め切り 胸三寸・反応・そっくり 焦る・自由吟	高槻現代劇場306号室 阪急高槻駅徒歩7分 〒569-1118 高槻市奥天神町1-26-17 瀧本きよし
岸和田 川柳会	18日(土)午後1時半から 浅い・委細・兎・遊ぶ	市立福祉総合センター2F 南海線岸和田駅東歩3分 〒596-0807 岸和田市東ヶ丘町808-307 長谷川呂万
川柳 ねやがわ	19日(日) 正午から 丈夫・遊ぶ・足音・自由吟	寝屋川市立総合センター4F 京阪寝屋川市駅からバス総合センター前下車 〒572-0063 寝屋川市春日町9-9 高田博泉
もくせい 川柳会	20日(月)午後1時から 失う・自由・ずばり・自由吟	豊中市立中央公民館 阪急曾根駅南東徒歩5分 〒561-0801 豊中市曾根西町2-8-4 江見見清
川柳クラブ わたの花	24日(金)午前9時半から 真相・脈・路地裏・いたわる	八尾市生涯学習センター 〒581-0866 八尾市東山本新町9-3-16 吉村一風
東大阪市 川柳 同好会	25日(土)午後6時から 電車・踏む・コント・姫	東大阪市立社会教育センター 近鉄布施駅北長堂小学校隣 〒578-0925 東大阪市稲葉3-3-21 片岡湖風
はびきの 市民 川柳会	26日(日)午後1時から 集める・がたがた・エブロン 「生きる」	羽曳野市立陵南の森公民館 近鉄高鷲駅北東徒歩10分 〒583-0882 羽曳野市高鷲8-31-11 塩満 敏
川柳 ふうもん 社	26日(日)午後1時から 粘り腰・ホルモン・囲う	JR鳥取駅構内 シャミネホール 〒680-0033 鳥取市二階町3-102-2 植田一京
京都 塔の会	27日(月)午後2時締め切り 土・決める・訂正	ハートピア京都 地下鉄丸太町駅南改札⑤番出口すぐ 〒600-8428 京都市下京区弁財天町328 都倉求芽
川柳塔 みぞくち	27日(月)午後7時半から リズム・粉・雑詠	溝口五区集会所 〒689-4201 鳥取県西伯郡伯耆町溝口757-3 小西雄々
南大阪 川柳会	28日(火)午後6時半締め切り 注文・グレー・こってり 放つ	玉造老人憩いの家 JR環状線玉造駅西徒歩3分 〒540-0004 大阪府中央区玉造1-16-13-304 前たもつ

★日時・会場などが変更になる場合は、本社事務所(06-6629-6914)へご連絡ください。

### 3 月 各 地 句 会 案 内

(開催日順)

句会名	日時と題	会場と投句先
川柳塔 な　ら	2日(木)午後1時から 使う・門・花壇	奈良市立中央公民館4F (近鉄奈良④出口歩5分) 〒636-0311 奈良県磯城郡田原本町八尾62-6 渡辺富子
尼崎 いくしま	3日(金)午後2時締め切り 袋・女・雑詠(A・B)	サンシビック尼崎3F 阪神尼崎駅南西徒歩5分 〒661-0035 尼崎市武庫之荘5-25-17 春城年代
富柳会	4日(土)午後1時から 浮・気配・自由吟	富田林中央公民館 (近鉄南大阪線富田林駅下車南へ200m) 〒584-0043 富田林市南大伴町4-1-10 池 森子
倉吉 川柳会	4日(土)午後1時から 魅力・自然・組む	倉吉市 明倫公民館 〒689-2221 鳥取県東伯郡北栄町由良宿2072-17 谷口次男
城北 川柳会	4日(土)午後1時半締め切り 僅か・絡む・イメージ・自由吟	旭区 老人福祉センター3F 地下鉄千林大宮駅3番出口の左隣 〒535-0002 大阪市旭区大宮4-10-8 神夏磯典子
川柳塔 唐　津	6日(月)午後1時半から 鯉・お茶・麗らか	唐津市 栄町公民館 〒847-0824 唐津市神田1517-13 宗 水笑
堺川柳会	9日(木)午後1時から 節(共選)・騒ぐ き・な・か(折り句)	堺市総合福祉会館 〒593-8305 堺市堀上緑町2-16-3 河内天笑
川柳塔 打　吹	11日(土)午後1時から 幕・栄光・やる気	倉吉市上灘町 上灘公民館 〒682-0034 倉吉市大原637-3 牧野芳光
川柳塔 まつえ	11日(土)午後2時締め切り 新調・通る・芽・動く	松江市雑賀町 雑賀公民館 〒690-0015 松江市上乃木9-23-22 三島浜久
川柳塔 みちのく	11日(土)午後4時から 苦笑・羽ばたく・そろそろ	弘前市桶屋町4-7 居酒屋とんぼ2階「川柳道場」 〒036-0161 平川市杉館宮元53-1 小寺花峯
八尾市民 川柳会	12日(日)午後1時から ミルク・化粧・挑む・雑詠	山本コミュニティセンター内3F学習室(近鉄山本駅) 〒581-0086 八尾市陽光園1-3-12-305 宮西弥生
川柳塔 わかやま	12日(日)午後1時から 愉快・さすが・オンリー 「誰(だれ)」	近鉄カルチャーセンター2F JR和歌山駅前 〒641-0012 和歌山市紀三井寺111-2 牛尾緑良
岬川柳会	12日(日)午後1時半締め切り おだてる・浅い・余白	岬町 みさき苑ふれあいセンター 〒599-0301 大阪府泉南郡岬町淡輪3592 八十田洞庵
川柳 藤井寺	12日(日)午後2時15分締め切り 算・遊ぶ	藤井寺市立生涯学習センター・シュラホール3F 近鉄南大阪線藤井寺駅下車南徒歩10分 〒583-0023 藤井寺市藤井寺公団1-105 高田美代子

# 編集後記

関西の春を呼ぶ風物詩として毎年マスコミに大きく取り上げられている。

☆30号誌上川柳大会の応募用紙は、本号と4月号に同時封じます。一人でも多くの方のご投句をお願いします。

☆3月の異称は弥生、語源は木草弥生月で木や草がますます生い茂る月の意。しかし、これはあくまで旧暦と言われる太陰太陽暦のこと、関西では奈良東大寺

のお水取り(修二会)の行事が終らないと、待ちこがれた春はやって来ない。

☆お水取りは千年以上東大寺で続いている行事で、練行衆(こもりの僧)と呼ば

れる11人の僧侶が厳しい行を勤め、病氣や災害を取り除き、天下泰平、五穀豊穡、国家の平安を十一面観音に祈願する。2週間毎夜とも

される松明の中で最も大きい「籠松明」(3月12日)は、

☆平成14年入場証を入手、火の粉のかかる位置で行を見せてもらった。それはまさに大迫力で、身のうちの煩惱を焼き尽くされた気分になり、身も心も軽くなつて夜道を帰った記憶がある。

☆過日新聞で芭蕉の有名な句「水とりや氷の僧の沓の音」が目止まった。私は氷の僧でなくこもりの僧と覚えていたので、間違いではないかと俳句を嗜む友人に尋ねてみた。すると、弟子の夢夢が聞き違えて書き取ったとの事、どちらも正しいとされているらしい。

人口にはこもりで膾炙されているようだが、考えてみるとそれでは厳寒の中の僧の姿が見えて来ない。ミスはいつの世も——芭蕉翁も不本意だろう。(ふ)

## 希望

### ひとこと

全没がいつまで続く本社句会  
昨年正月から本社句会に出席し  
皆出席48名の一人となりました。  
一月から全没が続きました。けれど、本格的に川柳道に入り二年目の私、試験試験と我が身に言い聞かせていました。  
初入選が五月。天笑主幹に  
良心はあつても救助行かなんだ  
を抜いて頂きました。この句には、  
エピソードがあります。尼崎尾浜

川柳会から本社句会への地下鉄で頭に浮かんだ句。駄目元で締切りギリギリに出した句。帰りの地下鉄駅で鞆を忘れたのが分り会場へ逆走した句。嬉し過ぎた句。  
その後、八月に二句。十一月に一句。計四句の入選でした。  
今年一月句会では、なんと四句が抜けました。昨年十二月と今年一月と同じ四句とは。希望が湧いてきました。  
川柳を一年かけて味わった  
(龍本きよし)

○私たちが生きて行くうえ  
でどうしてもお世話になら  
ねばならぬお医者さん、病  
院をどのように選べばよい  
か。これまでは、地の利だ  
けを考えていたのだが：

○病院も選ばれる時代とな  
った。インターネットでラ  
ンク付けされ、評判の悪い  
病院は淘汰されることにな  
る。しかし医療の質を結果  
だけで判断してもいいのだ  
ろうか。

○最近母のお世話になって  
いる病院の先生が「賢い患  
者はトクをする」という本  
を出された。帯には、医療  
ミスで死なないためにぜひ  
知っておきたいこと——開業

○三年少し前に、兄を肺癌  
で亡くしてからは、やはり  
病院選びも寿命を左右する  
のではと考ええるようになって  
きた。最近医療の世界も、  
競走社会となりつつある。

○兄の場合は、自分で選ん  
だ病院で、信頼できる医師  
に、一生懸命の治療を受け、  
満足をしていたので、不幸  
な結果ではあったが、あき

医の選び方ウラワザ公開。  
超高齢化で「貯筋」の時代  
がやってきたなどがある。  
わかりやすく目からうろこ  
の思いで読んだ。(希)

# 川柳塔(同人)・水煙抄(誌友)投句用紙

種目「

「発表(5月号)

地名

都府道  
市

姓  
雅号

きりとりせん

◎8句を楷書で正確に書き、15日までに到着するようにお送りください。

同人・誌友 マルで囲んでください。



# 檸檬抄投句用紙

「ほんのり」 (3月15日締切)

5月号発表

藤田 泰子 選 — 共選 — 仁部 四郎 選

B A

--	--

B A

--	--

地名

市都  
県道府

姓雅号

地名

市都  
県道府

姓雅号

切らないで下さい

左右に同じ句を書いて下さい



## 作品募集

**一路集 (3句)** 「麗らか」 「お茶」 「鯉」  
**檸檬抄 (2句)** 「ほんのり」  
**愛染帖 (3句)** 藤田泰子 仁部四郎 新家完司  
**水煙抄 (8句)** 板尾岳人  
**川柳塔 (8句)** 河内天笑  
**5月号発表 (3月15日締切)**  
 河内天笑選 板尾岳人選 新家完司選 仁部四郎選 藤田泰子選

**6月号**  
**檸檬抄** 「懐かしい」  
**一路集** 「蛙」「湿気」「長閑」  
**初歩教室** 「菌」

## 本社3月句会

と き 3月7日(火) 午後1時開場・2時締切り  
 —開催時間、締切り時間に御注意下さい。  
 と ころ アウィーナ大阪 4階 金剛  
 天王寺区石ヶ辻町19-12 電06-6772-1441  
 おはなし  
 兼題 「怪しい」 「きばる」 「回る」 「パランス」 「絵」  
 席題 1題 当日発表(各題2句以内)  
 会費 1000円 投句料 500円  
 川端一歩選 太田昭選 井伊東吉選 山本希久子選 池森子選 河内天笑選

**薫風一周忌 本社4月句会**  
**8日(土) 午後5時半から**  
 兼題 「笛」「凄い」「奪う」「ひょいと」「島」

## 第24年度 夜市川柳募集

第10回 「甘い」 波多野 五楽庵 選  
 ハガキに3句 3月末締切  
 投句先 〒593-8305 堺市堀上緑町2-16-3  
 河内天笑方 堺 川 柳 会

## 「川柳塔」への投句について

- (1) 川柳塔欄への投句は同人、水煙抄欄へは誌友(誌代半年分以上前納の定期購読者)に限り、本誌綴込みの投句用紙を使用してください。
  - (2) 愛染帖・檸檬抄・一路集への投句は、同人・誌友に限ります。初歩教室は誌友のみとします。愛染帖・一路集は川柳塔柳箋(本社事務所取り扱い)、檸檬抄は本紙綴込みの投句用紙を使用してください。
  - (3) 各欄への投句は、必ず氏名と住所(県・市名)を明記してください。
  - (4) 各欄への投句数および投句締切期日の厳守をお願いします。
- 川柳塔本社事務所へのご連絡は、土・日曜、祝日を除く平日の10時から16時まででお願いします。

〒545-0005

大阪府阿倍野区三木町二丁目一〇一六  
 ウエムラ第2ビル202号室

発行人 河内 権治  
 編集人 西出 楓楽  
 印刷所 美研アート

電話(06)6291-6914  
 振替0098015133368番

発行所 川柳塔社

自費出版

川柳・俳句・エッセイ・小説

新聞・チラシ・ポスター・伝票等

あらゆる印刷物の事なら、まずお電話を……。  
あなたの思いをかたちにします。

## 美 研 ア ー ト

☎530-0022 大阪市北区浪花町9番4号

TEL (06) 6372-1178

FAX (06) 6372-1196

E-mail : bikenart@wonder.ocn.ne.jp

医療法人社団

# 湯川胃腸病院

・日本医療機能評価機構・ISO9001-2000認証取得

健康保健取扱 看護2A・緩和ケア病棟

- ・消化器科・内科・外科
- ・放射線科・ホスピス
- ・デイサービスセンター

診療時間

月～金 8:30～16:00

土 8:30～11:00

JR桃谷駅徒歩3分

<http://www.yukawa.or.jp>

電話 大阪 (06) **6771-4861**(代)